
NARUTO憑依小説

朧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO 憑依小説

【Nコード】

N9477Q

【作者名】

朧

【あらすじ】

ふと、少年が目が覚めるとそこは木の葉の里だった。今までいた現実世界に戻る訳がないが、木の葉でのんびり過ごす訳にも行かず、様々な戦いを制し、大きな野望を胸に同胞達との戦記が始まる。

賛否両論大歓迎です。まだまだ未熟ですが、頑張って行きたいです。暇な時は少し改稿してます。1〜12話は改稿終わってます。本筋は変わりませんが、細かい所はかなり変わるかもです。

改稿済みとしていない所では話しが繋がっていないかも知れません。

学園祭終了しました。

更新再開出来ます……が、まだ多忙のため、すぐには無理かもです。

1話 木の葉の里へ

「知らない天井だ……」

本当に知らない木造の天井を見て、思わず呟いた。

事実、周りを見回して見れど、自分の昨日まで居た部屋とは似ても似つかない事に戸惑いを隠せずに居る。

「あら、レイやっと起きたのね」

不意に声が聞こえ、ゆっくり振り返る。

何とも声質がフワフワとしていて、大空の様に透き通った水色の髪をした女性を見た。

少し長い髪を後ろで束ね、額には何やら見覚えのある物を当てていた。

「父さんにそっくりな惚け顔ね。早く降りて来なさいよ」

微笑み、そう告げて階段を降りて行く。気付かなかったが、ここは二階だった。

父さんにそっくり、その言葉がどうにも馬鹿にされた様な気がして、レイは少し先行きの怪しさを感じる。

一階へと降りると机があり、そこへは朝食が乗っていた。

台所に見える水色の髪の女性が母親だとしたら、椅子に座り新聞を読んでいる茶髪の男は差し詰め父親と言う所だろう。

（自分の適応力にホトホト呆れるね……）

知らない人間が普通に接してくるからと言ってそのまま乗っかけている自分を少し誇らしく、何とも悲しく思う。

「お、やっと起きたな！ 飯食ったら庭に集合な！」

まるで友達同士の話し方に少しうろたえた。男の額には先程の女性と同様に見覚えのある当て物。

「んーと、わかった」

とりあえず椅子に座ろうと思い、男性と向かい合ったとき、新聞を見て目を疑った。

「……木の葉新聞？」

ポツリと呟いた。

木の葉。その言葉には覚えがあったのだ。

2話 月下一族

「母さんは今日から少し任務でいなくなるからな！ その間俺がきっちり修行をつけてやるぞ」

準備運動をしている父親の背中を見る。

何だかんだで付いてきてしまったが、何やら面白そうに思えた。

「ほえ、修行ねえ」

いきなりの提案にする事が分からず、頬を掻く。

少し考えれば、額にある物が木の葉の額当てである事に気付かなかった自分に腹を立てた。

「まずはチャクラを練ってみろ」

「……練ってみろってもどうやって？」

惚けながら首を傾げた。

庭にある池に居た魚が空高く跳ねる。

「あー、とな、身体エネルギーってのが人体の細胞からエネルギーを一つ一つ集める事、そして精神エネルギーが修行や経験から積み上げられるエネルギーの事であってな、その二つを混ぜ合わせる事……だよな？」

「訊かれても分かんないよ？ 父さん何で分かんないの？」

「俺らの時代は戦争中だったし、体で覚えるもんなんだよ、じゃないと死ぬしな！」

さり気なく男は怖い事を告げる。

刹那。

ごうつと風が男の周りを回った。

近場にある木々が揺れ、池の水面がざわつく。殺気にも似た気配に思わず尻餅を付いた。

「ま、こんな感じた。月下一族の血を受け継ぐお前なら、こんぐらいは直ぐ出来る様になるだろ。最初は難しいから印を結んでやれよ？」

男が力を抜くと風が収まる。

淡々と説明をされたが、ほとんどは聞いていなかった。

(……これが『チャクラ』…… 実際見てみると、万能過ぎる)
初めての感想を考えた。

何度が漫画でご対面している能力。目の前にして見ると何でも出来そうな力。

大蛇丸が闇へと走ったのも頷ける。

「じゃあやってみるよ……」

両手を前に出し、手を合わせ、印を結ぶ。

そのまま力を徐々に体外へと放出する感覚、足で地面を蹴り、前へと駆け出す様に、スツと集中した。

「……これはッ」

目の前の父親が声を上げる。

男には及ばないまでも、ふわりと風が舞った。

地へと足をつけていた木の葉が浮き、沈みを繰り返す。それを数十秒繰り返してから、どっと現れた疲れにより肩を落とした。

「はぁ…… チャクラ練るのって疲れるね、まだ何かやるの？」

そう口にするが、未だに男は目を見開いたままだった。

「あ、ああ、今日はこんな所だ、明日は木登りをやるからな」

男はニツコリと笑みを浮かべた。

なぜ嬉しそうなのかはわからなかったが、それでも楽しくて、いつの間にか自分も笑っていた。

2話 月下一族（後書き）

やっと2話書き終わりました。月下一族ってのは私が考え出したオリ一族ですw

これから原作にも絡ませるつもりですので、楽しんでくださいね。

3話 修行と出会い

木登りを終え、魚が優雅に泳ぐ池の上で、レイは水面をフラフラと歩いていった。

そうして居る内にチャクラの総量が尽き、足からそのまま水の中へと落ちる。

「やれやれ、水面歩行の業は随分苦戦してるな」

男が ゆっくりと家から姿を現す。

髪がボサボサな所から寝起きであることが予想出来た。

「……でも浮くようになってきたじゃん？ 10秒ぐらいね」
少し不貞腐れながら言った。

「足りない足りない、三十分は欲しい所だぞ？」

水面歩行が十秒。それはもはや欠陥忍者としか言いよつの無い粗末なチャクラコントロールと量である。

「……んな事言われてもねえ」

「行き詰ってるんだったらちよつとおつかい頼まれてくれるか？」
急な父からの頼みごと、未だに少し親と認めているかは疑問だった。

でも向こうは確実に自分の事を息子と認めているのだ。

これに報いるのは当然だと、レイは思う。

「おつと行くならこれ付けていけよ？」

どすん、と景気の良い音を立ててそれは地へと落ちた。

「何これ？」

何らかの意図を感じるこの重り。

根性、としきりに書かれた重り。

なぜか嫌な予感しかない地面への沈み具合。

「ちよつとした根性ベルトだ！ 実は知り合いがこれもってけつて

んで貰ってきたんだが、どうにもサイズが合わなくてなあ」

残念なのか嬉しいのか良く分からない表情を男はした。

ただ、このベルトを見て思い出す風貌がある。

全身に濃い緑のタイツを着込み、同じく緑のベストをつけ、おかっぱな男の風貌を。

(うつ、絶対いつか復讐するぞ……)

そんな見覚えのある姿形にひっそりと復讐を考え始め、ベルトを足へと装着した。

「ぴったり見たいだなあ」

「サイズはね、……でも重すぎじゃない？ 足が地面に埋まるんだけど？」

「何を言う！ これでも軽くしたとあいつが行ってたぞ？」

「……父さん、多分あんまりその人の言う事を信じない方が良いと思うんだけど……」

ポツリとそう呟いた。

その後、どこへ行くかを聞き出し、ようやく外へと出たのである。周りを見回して自分が異界に居る事を再認識した。

標準語は日本語の様に思うが、それでも建物も身体能力も折り紙付きであるからだ。

「ここかな？ すいませーん」

締りのない声が屋台へと響く、忍具を平然と表に飾り、主人は新聞を読み漁っている何とも危ない屋台である。

「坊主、何の用だ？」

柄の悪いサングラスをかけた男が振り返る。

「ちよつと父さんに忍具頼まれたんだけど、分かる？ 俺の父さん」
「その水色の髪……ああ、ギンの事か、ちよつと待ってな」

と言つて再び背を向け、何かを用意している。

更にはようやく父の名が明かされたのだ、月下ギン、それが本名であると頭へ叩き込んだ。

「ほれ、これ持ってけばいい筈だ」

と考え耽っている、いつの間にか男がこちらを向いていた。

そうして手渡しているのは紫色の風呂敷であり、中に何が入っているかは分からない。

「ありがとねー、おじさん」

丁寧にお辞儀をし、その場を去る。

家を目指し、駆け出したのだ。

すると金髪の少年と衝突した。

「おっと、ごめん」

「気にしないで良いつてばよ」

ふと語尾が気になった。

金髪の逆立った髪に顔に付いた傷の様な物。更にはその瞳の色を見て確信する。

「ナルトォー!？」

「何で俺の名前を知ってるんだつてばよ？」

しまった、とそう思った時にはもう遅かった。

目の前にいる少年は不思議そうに首を傾げ、答えを待っている。

「いや……あのね、一楽の常連だろ？ 実はあそこに行こうと思っただけで案内してくれない？」

ナルトの顔がぱあ、と明るくなった。

「だったらすぐ近くだつてばよ！」

先程よりも声を大きくして、前へと進んだ。

歩くナルトの回りを見ると、人々が少し距離を空けて歩く。

それでやっとナルトの表情が明るくなった事に合点がいった。

——寂しかったのだろう。

「おーい、待ってくれよ」

また一つ、考えを改め、遠くへと向かったナルトを追い、駆けた。

「ここだつてばよ」

ナルトが指を指した先には小さな屋台があった。

味や評判がいい為、この屋台でもそうとう儲かっているらしい。

「へえ、ここがね」

「テウチのおっちゃん！ こいつにラーメン一つ！ とんこつ味で頼むつてばよ」

「えっ、味は強制なの？」

疑問を口にするも、ナルトは聞き入れない、というよりも聞いていなかった。

「悪いな、今日はちょっと早めにしまつて行かなきゃならん所があるつてなあ」

「そりゃ無いつてばよお！」

ナルトは心底悲しそうな表情を見せた。

色々読み取れはするが、勝手に考えてもどうしようもない程、この里の人柱力への差別は大きい。

テウチや少しの人々しか、ナルトの心は分かつてはやれない。

「いいよ、今日の所は……お邪魔しました」

再び少しお辞儀をし、そのまま歩いて家がある方へと向かう。

「おう！ 今度はぜつてえ食わしてやるからなあ！」

元気の良い叫び声が聞こえる。

それに振り返る事なく、右手を上げ、駆け出した。

ナルトは恐らくは同年代。そしてそれは同時に様々な危険が蔓延る忍の世界の变革が始まるという事だ。

3話 修行と出会い（後書き）

やっと3話更新です。ナルトがいつ入学するとかわかんないのでその辺は適当ですのであしからず。

4話 性質変化

ナルトとの出会いから三日後、レイは水面歩行を完璧にマスターしていた。

目を瞑り、腕を組み、ただ突っ立っている。それでも水面は波紋一つ立てずに水上にいる。

「おお、水面歩行は終わりだな」

「結構時間掛かったけど、これもこれのおかげかな？」

藍色のズボンを少し捲り、根性ベルトを指差した。

「ま、そんな所だろうな、身体エネルギーの向上による作用だ」

ギンは微笑む。

恐らくは見切り発車だっただろうに、期待以上の効果を生み出してくれた。

「じゃあ次の修行移る？」

「ああ、性質変化の修行な、とりあえず、そこに落ちている木の葉切ってみろ」

言われた通りに木の葉を拾う。しかし解せない。

「もう風遁って決まってるの？ 俺火遁が良いのに」

惚け、疑問を問いかけた。

「月下一族は代々風遁以外はありえない、それは古い歴史の中で唯一変わっていない事だ。かくいう俺も風遁以外使えんしな！」

随分と様にならない所で威張るものだ、レイは思う。

ギンは木の葉の上忍である。普通上忍にもなれば、二つか三つは性質変化を持っている物。

それが一つと言う事は、欠陥忍者なのでは、と思わざるを得ない。

「はいはい、じゃあやるよ？」

しゃがみ込み、木の葉を拾って、両手で包み、チャクラを流した。

確か感覚は薄く、鋭く。

頭で何度も木の葉が真つ二つになる様子を考えた。

「……一体どんな冗談だよ、お前は」

「えっ？ 何っ？ 何か悪かった？」

ギンは開いた手の平を見て目を丸くした。

二つに引き裂かれ、分かれた木の葉の姿を見て、何か思いつめた様に。

「チャクラの練り方教えてまだ四日だったか？ どんな異端だよ！

……だが良くやったぞ！」

不意に頭をくしゃくしゃに撫でられる。

言葉では嫌がるが、こういうのも悪くはない。

「さて、木の葉が終わったら次は滝なんだが……よし、家を少し空けるぞ」

「えゝ、もう今日は止めようよ」

「駄目だ、鉄は熱い内に叩かねえとな、じゃあ身支度しろよ」

駄々をこねても無駄と判断し、少し深い溜息をつく。

そうして立ち上がり、家へと足を進めた。

「俺が言うのも難だが、レイ、お前人間か？ 才能以前になんつか、……飲み込みが早いっつか、理解するのが早いっつか」

心臓の鼓動回数が増す。

びくつと一瞬表情を歪め、すぐに元に戻す。

「……そうかな？ それよりもこれからどこに行くの？」

話を逸らした。

余り突っ込まれなかった。

もし気付かれてしまったら——自分はこの人達を裏切っている。そう、裏切っているのだ。

こんなに大事にされているのは、この人達の子供であるこの体だから。

「ああ、まずは火影様、三代目火影様の所へだな」

いつもと変わらない無垢な微笑みを見せたギンが、そう告げた。

他の建物とは少し異質な塔の様な形をした建物。

そうして大きく『火』と書かれ、威厳を象った建物だ。

「へえ、ここ？ 初めて来た」

「だろうな、一般人は入れねえし、忍でも任務が用事がある時しか入れねえからな」

そうして建物内部へと入る。

ぐるぐると螺旋して少しずつ登っていく。

少し変わった形だった。

「じゃあ、入るぞ？」

火影が居ると思われる扉へと手を伸ばし、ギンは深呼吸をした。

扉越しでも何やら強大な気配。プロフェッサー教授と呼ばれる威厳がこういう所から来ているのかも知れない。

ギンがノックをすると、奥からさも優しくそんな老人の声が聞こえた。

「失礼します！」

いつもはおどけた父が、柄にもなく緊張しているのだ。

そして扉を押し、ゆっくりと入った。

三代目は丁度墨で字を書いていた。

火影の印である帽子を被り。

「なんじゃ？ ギンか……ふむう、ならばお前はレイじゃな？ 大きく変わったもんじゃ」

三代目と視線が交わる。

挨拶する事も忘れ、吸い寄せられそうになった。

「おい、火影様が声を掛けたんだぞ！ 挨拶の一つでも——」
「良い、それよりも、何か用があるんじゃない？」

三代目が視線を流し、ようやく我に返る。

「はい、実は第10演習場を貸して欲しいのです、一ヶ月ほど……」
ギンの問いかけに思わず驚愕した。

「一ヶ月!? そんなに?」

「ああ、今回は多分一筋縄じゃ行かないからな」と説明を受け、黙りこくった。

「第10演習場、となると、性質変化じゃな?」

「ご察しの通り、それで、答えはどうなんです?」

ギンと三代目の視線が繋がる。

敵通しと言う訳でもないのに、こちらまで圧迫される。

もし、殺し合いならば、どうなっていたのか。

「あそこは今は余り使われておらんからのう、好きなだけ使つがい」

どうも、とギンが礼をすると、そそくさと部屋から出た。

「父さん、火影様嫌いなの?」

三代目が居る部屋の前で、先程浮かんだ疑問をぶつけた。

「?……そんな訳ないだろ、ちよつとした挨拶みたいなもんだよ……」

「お前、どう思った?」

「どうって——今すぐにでも、手裏剣が飛んできそうな感じ……かな?」

曖昧に首を傾げた。

それを見たギンは不適に笑う。

「ハハハッ、今はそんだけわかりや、十分だ。忍の対話なんてあんなもんだよ、じゃあ行くか」

景気良く再び笑い声を上げ、とある方向へと歩き出した。

ただ、今はそれにただ付いていくのだ。

何かを見出せるまでは。

5話 才能の片鱗

早朝だと言うのに薄暗い森の中、レイは立ち尽くしていた。

もつここ、第十演習場に来て日課となっている修行と言う名の何でもありの戦闘訓練。

森を少し歩いた所には滝も流れており、こちらにまでその音が聞こえる。

ただ今は回りの茂みを睨み、ギンの散乱した気配を探る。

「わッ……」

急に突風が吹いた。

生い茂った木々を揺らし、木の葉を散らす。

どんな術なのかも、そもそも術なのかも確かではなく、両腕で顔を覆い、隙間から先を見る。

「さて、今日のお前は何分持つだろうな？」

視線の先にはギンがいた。

突風に茶髪を揺らし、子供の様な闘争心を剥き出しにした笑みを見せつつ、歩み寄ってくる。

「くっ——今日は俺が勝つんじゃない？」

一步一步ギンが歩く度に風が強くなる。空気が、視線が、殺気が痛い。

それでも引く訳には行かず、強がった言葉をぶつける。

「さあて、そいつはどうか」

フツと、ギンが消えた。

視線の先には頭を揺らす木々のみ映る。

「——な！」

先程の言葉の続きが聞こえたと思った刹那、レイは青空を見ていた。

いや、正確には空しか見えなかったのだ。

何をされたかも分からぬまま、少し吹き飛び、地へと落ちる。

「次にお前はどうするよ？」

風の中、ギンの問いかけだけ響いた。

姿は見えずとも、恐らくは悪戯っぽく笑っているであろう。

「……どうするも、こうするも」

腕へと力をいれ、立ち上がる素振りを見せる。

立ち上がる際に足に付いていた数個の根性ベルトを外す。

「戦うしか、ないでしょ？」

爆ぜた風の中、駆け出した。

今までではありえなかった速度にギンも目を見開く。

「なかなか速いじゃねえか」

一瞬。

そう、一瞬の様に思える程のスピードで微笑むギンとの間を詰め、拳を振り下ろした。

「チッ」

我武者羅に突き出した右腕を掴まれ、舌打ちをした。

「速いは速いが、ま、下忍止まりだな」

右腕を掴まれた状態から蹴り上げるが、それすらも止められ、投げ飛ばされる。

ギリギリで地面へと足を付け、体を翻す。

「ふう、やっぱり疲れるなあ」

足を上げ下げし、調子を図る。

「最初はこんなもんだろう、さ、滝の修行に移るか」

そう告げて、ゆつくりと滝のある方へギンは向かう。

風にはためいていた緑色のベストが止まる。

「もう終わり？」

首を傾げる、いつもより終わるのが早過ぎた為である。

「そ、終わりだ。疲れを溜めるのは修行じゃないしな、それに——
そろそろだ」

意味有り気に最後、ギンは呟く。

それが何を意味しているのかは分からないが、何かの予兆は感じ

取れた。

滝前にて、流れる滝を眺めた。

「どうした？」

「いつ見ても大きいなあとね」

そう言つて更に上まで見上げる。

小鳥の囀りも、虫の鳴き声もその豪快な音にかき消される。

そんな滝に今、レイは両手を付けた。

「今日は出来るんじゃないか？」

とお世辞にも似た言葉を受けた傍ら、本気で滝を割ろうと思う自分もいた。

修行した帰還など、のべで十日あるか無いか、普通では割る事などありえない。

だが。

「ハア！」

意気込みと共に叫び、それと共に突如、滝の音が止まる。

恐る恐る目を開けると、一閃に滝が割れていたのだ。

「ほらな、何日もあれだけ修行してたんだ、それを入れても速すぎるくらいだが」

ギンは苦笑した。

そうして自分の手を見る。

たった十日程、修行しただけで性質変化をマスターした。

ただ、これが自分の才能ではない事が唯一の心残りと言える。

それに報いる為に、レイは強くなる事を決意した。

この体でやる事は山ほどある。

「何か、疲、れ……たっ——」

フツと力が抜け、その場へと倒れ込んだ。

「何だ、眠っただけか、驚かせやがって」

安心しきった様に寝息を立てて寝ているレイ見入る。

天才……いや、鬼才とも言える。

性質変化の修行とは、実際1年やそこら掛かる修行であり、自分がやった時は半年で天才と呼ばれた。

たった十日修行しただけの息子は一体なんと呼ばれるのだろう。

「ホッホッホ、どうやら修行は終わったようじゃのう」

「……三代目ッ！」

サツと気配を感じ取り、振り返ると現火影である三代目がいた。
なぜここへ来たか、などと言う事は聞かずとも分かる。

「レイの……事ですよね？ いつから見えていたのですか？」

「ついさっきじゃよ、それにしても、目に余る成長振りじゃな。のう、ギンよ」

背中へと両腕を回していた三代目がこちらへと歩む。

「何もする気はないぞ？」

「ッ！」

読まれていた、少なくとも警戒していた事には感づかれた。

「こやつ、先日あった時も、良い目をしておった、おぬしが考え耽る事も分からなくはない」

眠り扱けたレイを見据えた三代目は続ける。

「若くして天才、などと呼ばれた者達は、余り恵まれる共思えんしのう」

「ですが、火影様！」

「じゃから何もせんと言うておろう？ こやつにはもう火の意思が流れておる。苦悩する事もあるかも知れん、絶望する事もあるかも

知れん。じゃが、それはこやつが自分で決めた事じゃ、少しは信じ
てやれ」

こちらへと背を向け、そのまま三代目は去っていく。

ギンはその時見た。

最後に見えた三代目の悲しげな表情を。

自分の弟子の事でも考えたのだろう。三代目はすぐに瞬身の術に
より、消えた。

5話 才能の片鱗（後書き）

5話更新です。

6話 同胞達

雲一つない快晴の朝、第十演習場ではなく、レイは自分の部屋で目覚めた。

憑依時と同じく広がる天井をじっと眺めていた。

「どういうこと？」

レイは布団から起き上がり、首を傾げる。

いつ気を失ったかも定かではなく、漠然とした記憶を読み漁っていた。

「久しぶりね、お父さんの修行はどうだったの？」

声が聞こえ、レイは振り返った。

凜とした顔立ちに淡々しい水色の髪を束ねた女性がそこに立っていたのだ。

「母さんもう戻ってきたの？　というか俺は何で戻ってきてるの？」

レイは当然の疑問を問いかけた。

「何だか急な任務らしいわよ」

「ランクは？」

「Sランクの任務ですって」

フフフツと不気味な笑みを浮かべた母親に少し寒気が走る。

「それよりも、パンパカパーン！　今日から貴方はアカデミーへの編入が決まりましたあ！　おめでと」

目の前で女性は笑顔で元氣良くパチパチと拍手をしている。

——一体何を考えているのだろう？

「今更アカデミー？　いいいいいよ、時間の無駄だし、それなら一人でチャクラコントロールでも学ぶから……」

とだけ告げて去ろうとすると、何か呟いた。

再び振り返る。ペタリと座り込んだ彼女は口に手を当て、泣いていたのだ。

「ちょ、な、何で泣いてるの母さん！　だれか、原因の究明をオ

！」

突然すすり泣いた母親にレイは動揺する。

テンパって辺りを走り回り、丁度寝ていた布団に足を引っ掛け、豪快に転ぶ。

「わわわっ！」

顔から勢い良くどすんつと畳へ突っ込んだのだ。

「えと……母さん、分かったから、アカデミー行くから、ね？」

畳へひれ伏したままレイは答えた。

まるで子供をあやす様に何度も、ねを連発しながら。

「いえ、いいのよ……貴方が自分の意見をはっきりと言ってくれるなんて思わなかったから」

いつの間にか、彼女の涙は止まっていた。

その言葉を聞き、レイは立ち上がった。

「じゃあアカデミー行かなくても——」

「それは駄目よ？」

恐る恐る口にした言葉は一瞬の内に灰と化した。

そうして既に手続きの済んだアカデミーへと向かうこととなったのだ。

「じゃあ頑張つてね」

アカデミーへと向かう為、家の玄関でお見送りを受けていた。

母の腑抜けた言葉がレイの耳へと重なる。

「それにしても以外だったわね、泣き落としに弱いだなんて」

背を向け、即に歩き出していたレイに突き刺さる。

姿は見えずともなにやら人差し指を立て、ニツコリと笑っている

姿は用意に想像出来た。

「そうだね、じゃあ行つて来ます」

「もー、そんなに無愛想な返事して！ そんなんじゃガールフレンド出来ないわよ」

とそんな事を言つてはいるが、とりあえずは無視した。

忍が蔓延る世界でガールフレンド、母は本気で頭のネジがどこかいかれてやしないかレイは心配になる。

目印となるのはナルトが良くぶら下がっていた描写のあるブランコを探していた。

今が何時かも皆無である。レイがずっと歩き回ると見覚えのある場所へとたどり着いた。

「ここつてうちは一族の……」

快晴である本日も、そこへと足を踏み入れるとなぜか曇った様に見える。

所々に傷のあるうちは一族の家紋。血塗れたうちはの空気を存分にかもし出していた。

「おお！ 雰囲気凄いなあ」

当時のまま再現された地。凄みのある屋敷を見て思わずたじろいだ。

「何かご用でしょうか」

背後から聞こえた声にさあつとレイは血の気が引いた。

うちは一族の屋敷内に一般人が入る事はない。残虐な事件が起こった場など、誰も訪れたくはないからである。

レイはゆっくり振り返る。そこに居たのは恐らく同年であろう少女だった。

女の子にしては短い黒髪にそれより更に濃い漆黒の瞳をキラリと輝かせていた。

「あ……あ、」

「どうかなさいましたか？」

少女の紺色の服のその袖に付けられた、うちの形をした家紋をレイは見たのだ。

「すいませんでしたあ！ 迷子なんですう！ 別に好きで入った訳じゃないんです。命だけはご勘弁を」

「え、あの、とりあえず頭を上げて下さい」

頭を下げてレイは必死に謝っていた。

自尊心や傲慢さなどもなく、ひたすら平謝りをする。

「まだこの世界に来てから何にもしてないんです！ 殺さないで！ 殺すって……一体どんな勘違いをしているのですか？」

「だって、幽霊でしょ？」

「違います！ というか貴方こそ私を勝手に殺しているじゃないですか！」

そう言つと少女は口を尖らせた。

「へ？ でもうちは一族でしょ？」

「まあ、一応そのつもりですよ」

あっけなく答える少女にまたも疑問が生まれる。

そうして生まれた疑問を混ぜ合わせると、一つの真理へと辿り着いたのだ。

「転生？ 憑依？」

咄嗟に訊いた。間違っていたらとても恥ずかしい事になっていたかも知れない。

少女がクスリと笑う。

「要約すると、貴方も？」

「みたいだよ、俺は月下レイ。君は？」

レイの問いかけに信用したらしく。

「私はシズク。うちはシズクといいます」
とそうにこやかに答えた。

6話 同胞達（後書き）

大幅に改稿しました。

7話 異世界の訪問

アカデミーの職員室前にて、編入という事で少年をシズクが連れて来ていた。

木造の床に大人が通ってはぶつかりそうな所に『職員室』と書かれた横札がある。

普段は人が良く通る場であるのに、本日は少し遅めなせいかな生徒はすべて教室に、教師は職員室にて無駄話に花を咲かせているのだろう。

「へえ、二年も前から来てるなんて大変だね」

ふわりとした声がシズクの耳へと届く。

「……なぜか他人事の様に聞こえるのは気のせいですか？」

気に掛けていた事をストレートに突かれ、少し竄れ顔になった。

そんな事を知ってか知らずか、レイはまたも言葉を続ける。

「それにしてもよりにもよってうちは一族って……ご愁傷様、幸せと不幸のダブルパンチで」

手を合わせ、拝む様にレイは口にした。

「うつ……聞く度に憂鬱になりそうな内容ですからね」

「いいじゃん、写輪眼あるんだから」

うちは一族は特有の眼、写輪眼を有する。忍術、幻術、体術のすべてを見切り、跳ね返す事が出来るという夢の様な瞳術を持つ。

無論、対応出来る速度にも限界があるが、シズクはこの眼を手に入れた時は歓喜したのを覚えている。

「でも問題だらけだね、まあうちはの亡霊にでも憑かれたと思ってとつと諦めて隠居生活でも送ったら？」

そんな事を笑顔で言うレイ、するとずんつと回りの空気が再度重くなった。

「どうしてそう人の気にしてる事を平気で言えるんですか？ その口ですか？ それを閉じさせれば黙りますか？」

スツと写輪眼を発動し、レイへと顔を近づける。

噛み殺す様に吐息をも掛かる距離で碧眼を見据えた。

「ちょ……もう使えんの！？ 待った待った！」

眼を見るとレイはすぐに降参のポーズを取った事で写輪眼を解く。
「ではこれで、余り不適切な発言は謹んで下さいね？ 出ないと――」

「出ないと、何？」

「分かるでしょう？」

不気味な笑みをレイへと見せると、理解した様に息を飲んだ。

コツコツと音を立て、レイから遠ざかり、教室へと向かう。

「あー、死ぬかと思った……随分と軽率じゃない？ 誰か見てるか
もよ？」

再びお惚けな声が届く。

ゆっくりと振り返り、漆黒に光る眼光で見る。

「それでも眼さえ見えてなければ特に問題はないじゃないですか」

シズクは冷静に正論を言う。

「力を付けるのも構わないけど、息詰まってない？」

「――ッ！」

シズクは眼を見開き、口籠った。

出会ったばかりとは言え、良くも悪くも少年は予想の斜め上を行く
思考を持っている。

表情にも出さない自分が先を読まれたのだ。

「息詰まる？ 当たり前じゃないですか、死ぬ方が良いとでも？」

「死ぬ？ なんで？」

首を傾げた少年にやはり予想よりも上に行くと、シズクは思う。

「なぜなんて良く言えたものですね、貴方には何も――！」

「死なせる訳ないよ？ てか、死なせないからね」

満面の笑みを浮かべたレイを見て、シズクは感じ取った。

（あ……）

不意打ちだった。

窓の光の元で輝く水色の髪が酷く美しく見える。

信ずる者の少ない自分を、たった数分放しただけの少年は

「な、何をそんな恥ずかしい事を言っんですか！」

——死なせないと、そう言ってくれたのだ。

「恥ずかしいかな？ でもま、そういう事だから今後ともよろしくね。」

軽い言葉が響く。

頬を赤らめたシズクが素へと戻るのにはそれだけで十分な時間だった。

「……では、私はそろそろ戻ります、クラスは恐らく同じになるでしょうし……それにもう一人居るんですよ？」

とそれだけ告げて、クルツと回転したシズクは廊下を歩いていく。

忍者アカデミーの教室。

そこでは生徒編入の知らせを聞いた生徒達がこぞって気にしていた。

宥める教師の意見も聞かず、話続ける。そんな中レイは興味心身に廊下で覗いていた。

「さーて、そろそろ編入生を紹介したいとこなんだが……」

「せんせーいっ！ 男の子、女の子？」

桜色の長い髪の少女が先生へとそう質問した。

言わずと知れた座学トップの春野サクラである。

「ん？ 男だぞ？ じゃあそろそろ入ってもらっか」

男だと聞いた時の女子生徒の盛り上がり方は半端なものではなかった。

逆に多数の男子生徒のテンションは駄々下がりではあったが。

「はいはい、どうぞよろしく」

のんびりとした声と共に教室内へと踏み出した。

刹那、足元の段差へは気が回らなかったのだ。

「あわわわっ」

驚いた様子のまま身体が前のめりになる。

これでは行かない、とレイは思い、床へと右手を付き、そのまま跳ねた。

「おまつ……へぶっ」

全身が浮いている状態であつた為、回転した際に両足共々教師の顔面へと突き刺さった。

教卓へとぶつかり、背中をさも痛そうに摩っていた。

「あれ？ 先生駄目ですよ、そんな所にいたら危ないじゃないですか」

嘲笑う様にフワリとした声で言う。

どうやら起こっているらしく、ワナワナと震えていた。

「ハッハッハッ！ 何やおもろい奴が来おつたなあ」

突如、そう叫び声が聞こえた。

目を向けると微妙に逆立っている金髪を引つさげた少年が立っていた。

関西弁の様な口ぶりで少年は続けた。

「先生、どないしたんや？ はよ授業やろつや」

こちらもレイと同様に嘲笑う。

遂に怒りが限界に達したのか、教師は二人にビシッと指を指した。

「お前等二人共廊下に立つてろお！」

儂くも大きなその声は編入初日で挨拶もしていない少年が廊下に立たされると言う汚名を着せられたのだ。

「いやー、ホンマに自分も運の悪いんやな」

金色の髪少年は嬉しそうに壁へと寄りかかっていた。

だらしなく着込んだTシャツにジーンズを重ねる。

どう見ても忍の格好ではなかった。

「運なの？ 俺には君が出てこなきゃ上手く行きそうだったと思えたけど？」

「君なんて他人行儀な呼び方はええっちゅうねん、俺はトモヤや、ひのがみ日上トモヤ、よろしゅうな」

と流れる様な自己紹介をされた。

教室では既に授業が始まっており、失笑気味に進めていた。

「あ、うん。俺は——」

「知つとるで、レイ、やろ？」

不覚にもトモヤの言葉にあっけにとられた。

そうしてそれは詮索する必要すらなかった。

「シズクから聞いたで、同胞やってな……」

トモヤがニヤリと笑みを浮かべた。

『……では、私はそろそろ戻ります、クラスは恐らく同じになるでしょうし……それにもう一人居るんですよ？』

先にシズクが口にした言葉が思い出される。

今日は幸運にも二人もの同胞と出会ったのだ。

時間が経った教室の前の廊下にて、レイはトモヤと熱烈な会話を繰り広げていた。

「だからさ、そこは上手く改良して……」

「いや、無理や！ そんなん出来る訳ないやろ」

「出来るよ！ いや、出来る気がする！」

自信満々に言い放つ。

正直、根拠は欠片も持っておらず、ただ、気がするだけなのである。

「そうか？ 俺は無理やと思うんやけどなあ」

トモヤは呆れた表情で髪を掻いた。

そんな顔や服装を見る度にどうしても忍には見えなかった。

「じゃあシズク来たら屋上にでも行つてやってみない？」

「ええな、負けた方がたこ焼き奢りやな」

話して見て分かった、彼は妙に話にたこ焼きを絡めたがる。

さつきには十分間ほどたこ焼きの焼き方や味について永遠と話された。

「私がどうかしましたか？」

ふと顔を上げるとシズクがたたずんでいた。

忍者アカデミーには予鈴などが無く、授業の終わりに気付かなかったのだ。

「よし、じゃあさつさと……ん？ どうしたの？ その子」

シズクの後方では同じく少女がいた。

薄く黄色い髪を前でピンで留めている。原作とは随分と違った容姿ではあったが、誰なのかはすぐに特定出来た。

「貴方、レイ君って言っんでしょ？」

「……そうだけど？」

不意に聞かれた事に正確に返した。

何か裏があるのか、と模索して見るが、そんな考えは脆くも崩れ去る。

「私は山中いの、よろしくね」

と右手を差し伸べてきたのだ。

少女——いのはただの自己紹介で来ていた。

「あ、うん。こちらこそ——」

こちらも右手を差し出そうとした。

刹那。

何かに襟を掴まれ、そのまま高速で引き摺られる。

「はよ行くで、休み時間少ないんやからな！」

左を見ると、シズクも憂鬱そうな表情で襟を引っ張られていた。

彼女の災難はうちは一族に憑依した事よりもこちらにあるかも知れない、とレイは密かに思う。

忍者アカデミーの屋上。

晴れ渡った今日などはとても気分が良くなる。

実は生徒は出入り禁止だと告げられるが、この際はどうしても良かった。

「で、なんで私をこんな所へ連れて来たのですか？ 十秒以内に答えないと殴り倒します」

「まあ、待てや。そこんとはレイから頼むわ」

先程よりも常時不機嫌なシズクが青筋を立てている。

これは早く終わらせないとこちらの身が持たないそうであった。

「はいよ、所でさ、多重影分身で経験値の増幅が出来るの、知ってる？」

無愛想なシズクへとそう問いかけた。

無論、原作を知っていれば100%答えられる質問の筈だったが、シズクはゆっくりと首を傾ける。

「あー、言っとくけどな、シズクはNARUTOの原作所がアニメすら見たことないで、全部俺の俄仕込みの知識や」

そんな言葉がレイの両耳へと届いた。

（……知識も持たずにどうやって虐殺乗り越えたんだろう？）

ふと、そんな事を考えたが、構わず続ける。

「まあいいや、一応そういう風になってるんだけど、影分身でも出来ないかなあ、と」

「絶対無理やって！」

「出来るよ！ ぶっちゃけ影分身と多重影分身の違いなんて知らないし！」

少し切れ気味に、そう答えた。

そうして手早く印を結ぶ。良く見慣れた印であった。

「影分身の術！」

左方が突如煙に包まれ、そこから自分そっくりな人影が現れる。

「ほら、二人ともやって」

二人も言うとおりに術を発動させる。

そうしてチャイムが鳴ってしまい、シズクは更に不機嫌になって教室へと戻っていった。

「なんかやりたい事でもあったんか？」

「さあね、俺等も早く行かないとまた立たされるよ」

トモヤへとそう促し、影分身達を実験として残していった。
そうして影分身の修行が始まったのだ。

7話 異世界の訪問（後書き）

8話 熱血師弟成立

自然に満ちた木々や花々。

何かで計ったかの様に等間隔に立てられた木の間をレイはトボトボと歩いていた。

「……はぁ」

深く、溜息を付いた。

アカデミーが休みだった。

たったそれだけの理由でこんな所へ来てしまったのだ。

『よおし、やっぱり修行といったら森だね!』

数時間前、家前で自分でそう言った事が思い出される。

ようやく方向音痴ではないのか、と言った疑問が浮かんた。

「腹減ったぁ……死ぬ……」

そう呻きながらも前へと進む。

既に夕焼けが辺りを真っ赤に染め、無風で葉一つ散らない森の中を淡々と進む他無かったのだ。

「——397……398……」

森の奥深くから、何かをドスツ、と蹴る様な音と、更には三桁の数字が次々と聞こえる。

何事か、と木陰から覗いてみると、一人の少年が丸太をひたすらに蹴っていたのだ。

現在はおかっぱではなく、服装も違うが、髪質、目で判断した。努力の天才ロックリーがそこにいたのである。

(うわぁ……)

心の中で木霊した。

緑色の全身タイツを着込んでいなくとも、彼はキャラが濃すぎる

のだ。

丁度400回目を数え終え、小休憩を取ろうとしていたリーに不意に近づく。

「もしもし」

「誰ですっ!」

振り返ったリーに瞬時にそう返される。

まさかいきなりそんな回答が待ち受けていると思わなかったレイは少したじろいだ。

「えっとね……そうそう、君に——」

言い掛けた直後、リーの拳が迫る。

余りにも会話を素っ飛ばしたコミニケーションに対応が遅れた。

「ととつ、いきなり何?」

「張り紙を読んで、僕と勝負しに着たんですよ? だったら受けて立ちます!」

お決まりに右手を立て、リーは構えている。

意気揚々と言葉を吐き捨てるリーに、もはや幻滅と言って良い程落胆した。

「いや、違うんだけど……」

「そうですか!」

するとリーは程好い木の棒を二つ取り、一つをレイへと投げる。

地面へと刺さった棒を疑問を掲げながらも引いた。

「武具の勝負がしたいんですね?」

「違うわ!」

またも検討違いな答えにレイは思い切り後方へと棒を投げ飛ばす。クルクルと回転しながらも、木の上の木の葉を散らして棒は進む。そんな事を知ってか知らずか、リーは首を傾げるのだ。

「では、僕と何の勝負を望んでいるんですか?」

もう駄目だ、とレイは感じる。

彼は勝負しに来たと思っていないらしい。

覚悟を決め、レイは一步前へと出る。

「……じゃあ殴り合いでいいよ」

目を軽く伏せ、苛立ちを露にレイは言う。

勝って説明をする。

頭にはそれしかなかった。

「組み手ですね？」

再びファイティングポーズを取り、リーがこちらへと駆ける。

まだ下忍にもなっていない子供である。レイの目でも捉える事は十分可能であった。

「ハア！」

意気込みと共に突き出されたリーの右拳を掴む。

そうして身動きのできない状態の中、顔面へと右拳をほぼ全力で叩き込んだのだ。

「——ぐわっ」

霞む様な叫びを発し、リーは少し吹き飛んだ。

同時に苛立ちから開放され、レイは清々しい気持ちで夕焼け空を見上げる。

カラスが数羽飛んでいて、真っ赤な空と調和した。

開口一番、勝負を申し込んできたリーを倒し、何とか状況を説明した。

そうして、ようやく木々の無い公園へと足を踏み入れる。

「ここが出口です」

リーは頬を摩る。

少し本気でやり過ぎたか、とレイは思ったが、意外と数分後にすぐリーは起きたのだ。

この年でもう無茶な修行をしている為か、彼はとても頑丈に作られている。

「そ、ありがとね」

「でも、レイ君は強いですね……」

もう夕刻である為、帰ろうと話を切ろうとした所、リーはそれを止める。

公園には子供一人おらず、遠くの道筋に少し人が歩いているくらいであった。

「そう？」

とだけ告げ、レイは歩く。

それに釣られる様にして、リーも後ろを歩いて来た。

「はい、僕よりも小さいのに、あんなに強くて……正直、悔しいです」

「小さいっても、一つでしょ？」

振り返り、レイがそう言っても、リーの表情は晴れない。

ひたすらに頂垂れ、ポツポツと後を歩くのみ。

特に何でもない筈であった。

関係ない、とそう割り切れば良かったのだ。

「じゃあさ、今度良い先生紹介してあげるよ？」

だが、見てみぬ振りをする程、レイは人間が出来てはいなかった。頂垂れていたリーの顔がばあぁ、と明るく変わる。

「せんせい？……先生ですか！ 誰です！」

両手に拳を作り、目をギラ付かせて言う。

こんなに根性、と言う言葉が似合う人間を、レイは前世と今期を合わせて初めて出会った。

負けたばかりだというのに、リーは燃えに燃えている。

「ん、名前は分かるんだけど、場所がね………よしっ、あの人に訊いてみよう」

角を曲がる人を指差す。

ただの一般人ではない。中忍以上の忍のほとんどが着ると思われ

る緑色のベストを着ていたのだ。

恐らくは上忍の居場所くらいは知っている筈、と駆け、角を曲がった人へと声を駆けた。

「あの〜」

「何だ、少年達よ！」

レイが声を駆けた男は振り返る。

親指を立て、白い歯がキラリと光った。

そして何より、全身に着込んだ深緑色のタイツと、特徴的な黒髪おかつぱを引っさげている。

レイが復讐しようと考えていた、マイト・ガイがいたのだ。

（リーもあれだけど、こっちもあれだなあ……）

心中で感想を述べ、レイはリーとガイを見比べる。

今は服装、髪型共に違うが、数年後は親子の様に等しくなっていることだろう。

「ガイ上忍、この子の先生になってくれませんか？」

唐突に、レイは訊く。

二人はお互いを見比べ、何が通じあったのか、いきなり握手をした。

「少年、名前は何という？」

「僕はロックリーです！ ええと……」

「俺の事はガイ先生と呼ぶが良い！」

ガイのその言葉にどう感化されたのか、抱擁し、涙し、情景としての夕日が妙に輝いていた。

見てるほうが暑苦しい、とレイはつくづく思う。

「じゃあ俺そろそろ帰りますんで……リーも頑張ってねー」

未だに抱擁が続いている二人を余所に、レイはあらぬ方向へと足を踏み出す。

この周りの地形は覚えており、迷子になると考えられないので、一人でも戻る事は十分に可能であった。

「待ちたまえ！」

ガイから声が掛かる。

嫌々ながら振り返ると、既に背後にいた。

全く気づかれずにこれ程の速度が出せるのだから、上忍だと改めて認識する。

「君は……ギンの息子だね、確か、レイ君、と言ったか？」

（ああ、ベルトをくれたのはこの人だし、知ってるのも当たり前か……）

何かを納得した様に、レイはガイを見入る。

復讐まで考えた相手ではあるが、今後は未永く付き合っていく事となるだろう。

木の葉の上忍であり、はたけカカシとも張り合えるこの男とは……。

「はい、その通りですけど？」

「やはりか！ ハッハッハ、根性ベルトは付けているかね！？」

白い歯を剥き出しにし、ガイは訊く。

もはや、足に三重にもなって付けられている事とは、彼は存じてはいない。

「付けてますよ……あ、丁度お下がりあるからリーに上げる！」

重り代わりにポケットへと入れていた小さめの根性ベルトを下から投げる。

放物線を描き、リーは受け取る体制に入ったが、掴んだ直後に手を離れた。

ズンッ！

「な、何ですかこれ！ お、重いイ」

地面へと減り込んだベルトをリーは何とか持ち上げた。

それでも、流石に限界が来たのか、すぐに落とした。

「ハハハッ、リーよ、まだそいつを付けるのは早いかな！」

「じゃあ、そろそろ本気で失礼しますよ」

そう告げて、再び背を向け、レイは家へと歩く。

後方でまたも「ごちゃごちゃ」と話し込んでいる二人の声を聞き、共

にやっ
てい
ける
かど
うか
不安
にな
った。

8話 熱血師弟成立（後書き）

改稿したので、少し薄っぺらくなっ
たかもしれませんね。

9 話 決闘

漠然とした景色を、レイは眺めていた。

大きな砂漠の荒原な大地の真ん中に立ち尽くす。

辺りを見回せど、オアシスなどは存在しなかった。

木々も存在せず、足元にある砂に埋まっているものは、死、死、死。

足をどれ程前へと動かそうと、決してそれだけは変わらない。嫌になりかけた時、レイの意識は途切れた。

「早く起きてください、アカデミーに送れてしまいますよ？ 卒業できなくなってもいいのですか？」

その呼び声で、レイは目を開けた。

虚ろな視点を直す為、目を何度も擦り、問いかけた。

「……何でいるんだっけ？」

「昨日からいます。勝手に存在を消さないでください」
目の前にはうちはシズクが立っていたのだ。

（あ、そうだった）

と心の中で頷いた。

今まで世話を妬いてくれていたおぼさんの急死により、家に押しかけて来た事を忘れていたのだ。

「随分と気の毒だね」

「そうでしょうか？ 確かにあれ程の理解者を失った事は痛いですが、悲しいです。ですが、死は避けられませんから……」

どこか寂しげな表情を、シズクは見せた。

近場の人間を失った事の無い自分には到底理解出来ない。

失いたいのと思わないし、失う気もさらさら無かった。

「さ、そろそろ行かないと本当に遅刻しちゃいますよ？」

無垢な笑顔で、シズクは笑いかける。
嫌な事を微塵も感じさせない、そんな顔であった。

忍者アカデミー廊下にて。

遅刻を免れようと、レイとシズクは走っていた。

「大体、どうして目を離したらいなくなってしまうんですか！」

もう何度目かも分からない質問を、再び問われた。

正直、レイとしてはまともな方向へと進んでいるつもりなのだ。

それでも迷ってしまう、消えてしまう。

そんな自分は実は病気なのではないか、とレイは今、本気で思い始めていた。

「仕方ないじゃん……ほら、間に合ったし」

教室がようやく見えた。

もはや廊下には生徒などいなく、正にぎりぎりであった。

「よ、新婚さん。間に合って良かったなあ——へぶっ」

スツと教室から現れたトモヤを、瞬時にシズクが殴り飛ばした。

今のは流石に同情の余地は無かった。

「うるさいです、次言ったら本気で殺しますよ？」

「……分かった、せやから足除けてくれへん？」

殴り飛ばし、腹に足を乗せ、トモヤを見下しているシズク。

傍から見れば、ただの暴力であった。

「おい、お前らとつとと席に着けよ」

それを気にも止めずに、後方から歩いてきた先生の間抜けな声が轟く。

こんな事は日常茶飯事なので、場慣れして来た様であった。

「さあて、授業始めるぞ」

再び、間拔けな声突き抜ける。

普通の生徒であれば、授業の為に道具を出す所ではあるが、レイはシカマル達と話し込んでいた。

「じゃあさ、どうする？」

「逃げ出す機会は山ほどあるだろ、あのセンコウ隙だらけだからなあ」

シカマルは言う。

そうしてひそひそと、逃げ出す心算を始めた。

ちらりと、黒板に文字を書き始めた先生を見る。

上忍にもなれず、任務にも出ない、それでいて隙だらけなのだから、余程の修行不足と見えた。

「でも、捕まったら怒られちゃうよ？」

後ろからチョウジの弱気な声が聞こえる。

「捕まらへんかったらええやん」

それを掻き消す様に、トモヤが答えるのだ。

脅えたチョウジを引っ張れるのは、今やシカマルとトモヤ以外に適任者はいなかった。

「じゃあほんの少しだけ我慢しろよ、時期が来たら俺が合図する」
隣にいるシカマルは余裕そうに先生の顔を見つめた。

そして前に乗り出していたチョウジ、トモヤも一旦下がり、大人しく時を待つ。

「まだ？」

待ち切れなくなり、レイは言う。

もともと真面目な性格でも無い為、授業など落ち着いていられる筈も無かった。

「もう少しだ。腐っても忍、足じやかなわねえよ」

とだけシカマルは答え、再び視線を戻す。

じっと、何かの時を待っている様にも見えた。

パリンッ！

突如黒い物体が飛来し、窓ガラスを割ったのだ。

「な、何だ？」

慌てた先生が窓と壁に突き刺さったクナイを見比べた。

「よし、今だ」

こちらもシカマルの合図で、四人バラバラに散る。

レイが最後に外を見た。

外ではクナイを使う練習をしており、ちらりと、金髪の少年が教師に叩かれている姿が、目に映ったのだ。

忍者アカデミーの道場。

通常、忍具の使用や体術の授業などは、外でやるのが原則であるので、授業で使われる事はほぼ無い。

そこに目を付けたシカマルは、ここを集合場所として認定したのだ。

「せやから四人同時に行った方がええって言うたのになあ」

悔しそうに、トモヤが口にした。

微かに小腹が空いているのだろっ、何度も腹を摩っている。

恐らくは、チョコウジのお菓子が目当てなのだろうと、レイは納得

した。

「意外と先生来るの早かったし、四人じゃ逃げ切れなかったと思うよ」

少しだけ正論を混ぜ、トモヤを宥める。

実際は、逃げ切る事が出来た。

シカマルが自分達の力を少しでも把握していればではあるが……。

「そっぴゃ、いつからこつちに来てるの？」

ふと、頭を過ぎった疑問を訊く。

未だに手合わせも何もした事がないので、今一自信は無いけれど、恐らくは前々からここにいる。

移動時の足へのチャクラの転移や大きさ、そして態度や周りへの打ち解け方など、全て自分を上回っているからであった。

「あ、俺か？ 一年前や」

「ほえー、結構前からいるんだね」

うんうん、とレイは頷いた。

大よそ検討は付いたけれども、自分の考えが正しかった事が妙に嬉しく思う。

コッソ、コッソ。

一つだけある道場の扉。

その奥から微かな足音が、地べたに座り込んでいた為、よく聞こえる。

「シカマル達、来たんじゃないの？」

ただ、よく耳を済ますと、鼓動は一つ。

つまりは人間が一人、歩いている足音であった。

「先生かも知れへんな」

悪戯に、トモヤははにかむ。

その応対に、こちらも笑って返した。

入り口一つ、密室、二対一、不意打ち。

一流の忍であっても、返り討ちに出来そうな材料が勢ぞろいして

いるのだ。

更には、相手は自分達の先生であり、向こうからの先制はありえない。

こちらは下忍にもなっていないアカデミー生というお面をも被っている。負ける要素など欠片も見当たらなかった。

扉を真剣に見つめる。

今や足音は止まっており、扉のぼやけたガラスからは黒い影が見えた。

そうしてゆっくりと、扉が開いた。

「……やはり、ここか」

唐突な訪問者に目を見開く。

シカマルでもチョウジでも、はたまた先生でもない。

気取った表情に黒髪、原作開始時よりも大分押さないが、扉を閉める時に見せ付ける様に？うちは？の家紋をちらつかせる。

紛れも無く、うちはサスケが、そこに立っていたのだ。

「よう、サスケ、何か用あるんか？」

「お前に用など無い」

素っ気無く、手を差し伸べたトモヤを通り過ぎ、レイの目の前で歩み寄って来る。

何を意味しているのか、想像も出来ず、首を傾げた。

「俺？」

自分を指差して、訊く。

「そつだ……勝負しろ」

サスケの予期せぬ言葉が、静かな道場に響く。

その言葉を聞いた瞬間、レイは無性に帰りたくなった。

「勝負？ 何で？」

一応等間を空け、トモヤを審判の様に配置し、訊く。
だるい、面倒、帰りたい。

様々な負の感情が折りまく中、サスケは答える。

「お前には関係ない！」

大いに関係はありそうだが、これ以上訊くのも面倒なレイは何も言わなかった。

元々、サスケとは余り仲が良くない。

これはアカデミー生ほぼ全員に言える事でもある。

残虐以来、サスケに近づこうとする輩も、サスケから近づこうとする事も無い為、教室内ではサスケは常に孤立していた。

ただ、一人。うちはシズクを除いては……。

「行くぞ！」

正々堂々と、サスケは宣言し、駆ける。

アカデミーで優秀というだけあって、既に下忍レベルはありそうであった。

繰り出される蹴りを逸らし、拳を掴み、床へと叩きつける。

柔道の様な一連の動作を完璧に行った。

「……がはっ」

受身も満足に取れずに、サスケは床へと叩きつけられる。

それでも並みの身体能力ではないのか、すぐさま立ち上がった。

「おまつ、容赦とか知らへんのか？」

「知らないね、何それ？」

会話を繰り返す間に、サスケは打ち付けた箇所を摩る。

多少痛むのだろう、表情を歪めていた。

「もう辞めたら？ というかどうして勝負なの？」

その言葉に勢い付いていたサスケは押し黙った。

もじもじと似合わない反応を沈黙の中、しばらく続け、ようやく口を開く。

「お、お前の家に、シズク行ってんだろ？」

声を詰まらせて、振り絞る様にサスケは答えた。

レイは考える。

サスケもうちは一族であり、シズクもうちは一族である。

そしてサスケは一人で暮らし、シズクは自分の家に押しかけ状態と言う何とも不思議な形ではあった。

「もしかして……一緒に住むの断られたとか？」

ビクッ、とサスケは仰天した様に動かなくなった。

呆け、立ち止まっているサスケを見据え、ようやく理解する。

「あー、やっぱり？ まぁ子供とはいえ男女が同棲つてのは無いし、振られるのも当たり前だよ、うん」

レイは一人で頷いた。

遠くでトモヤがどうしようも無い様な表情を浮かべている。

「……………」

下を向いたまま、サスケは動かない。

少し小刻みに肩をワナワナと震わし、その振動が段々と大きくなる。

そして、フツと顔を上げ、叫ぶ。

「——お前が言うなあああッ！」

雄叫びと共に、サスケは再び足を前へと繰り出す。

怒りはこんなにも人を強くするもののだと、レイはしみじみと感じていた。

サスケの速度は先程よりもずっと速く、ずっと殺気が籠った力強い眼であった。今、チャクラを上手く使えたなら、写輪眼を開眼出来たかも知れない。

「うわぁ、荒れてるね」

一言感想を告げ、少しだけ身構える。

右手にチャクラを集中し、後は突っ込んでくるのを待つだけであつた。

「くたばれっ！」

忍とは到底思えないド迫力な力眼で、叫びながらもサスケは拳を振り下ろした。

ドンッ！

顔面を捉えた音ではない。

骨が砕けた音でもない。

「あーあ、やってもうたな」

さも残念そうに、トモヤは言う。

道場の壁に深く叩きつけられたサスケの姿を、まじまじと見つめていたのだ。

「生半可なのじゃ終わらなそうだったし、良い薬だよ」

完全に気絶しているサスケを余所に、言う。

将来木の葉を裏切るかも知れない種。

今の内に摘んでしまうのが一番なのだろうが、周りからの非難や、様々な要素を考え、取り止めとした。

「今の音何だあ？」

不意に扉が開いた。

不味い事に、シカマルとチョウジの首根っこを掴んだ先生が、キョロキョロと首を振っている。

「悪いな、捕まっちゃった」

心底申し訳無さそうなシカマル。

ただ、今それよりも駄目な事が怒っているので、トモヤもそれは気にはしなかった。

「これまた何だあ！」

さっきよりも先生は声を上げる。

それもその筈、顔面を大きく強打し、気を失っているサスケを見てしまったのだから。

「お前らか！」

悪い事に関しては徹底的に怒る。流石は教師と言った所だ、とレイは素直に褒める。

良い訳も出来なさそうな状況であつたので、トモヤと顔を見合わせ、先生へと近づき足を掛けた。

「うおっ！」

生徒二人も抱えていた先生はバランスを崩しながらも留まる。しかし、緩んだ二人の拘束を外し、そのまま四人、逃亡した。

その後、最終的には捕まり、罰則を与えられてしまった訳ではあるが、サスケを黙らせられた事に関してはなぜかとても嬉しかった。

10話 日向家

この世界には、いくつか世界観を壊しかねないものが存在する。その一つを前に、トモヤは立ち尽くしていた。

「……にしてもでつかいなあ」

目の前には、日向一族の屋敷がある。

日向ヒナタが病欠でアカデミーを欠席し、いつも授業を抜け出している自分が届け役に任命されてしまったのだ。

そして瓦張りの屋根に、恐らくは庭があるであろう大きな私有地。ここまでならば、特別驚きはしなかった。

理解出来ないのはその屋敷の大きさである。

右往左往前後左右、どこをどう見ても尽きる事を知らない。そんな感じがする広大な屋敷であった。

「……まあ、ええわ。とりあえずインターホンや」

ピンポン。

突拍子も無い音が、屋敷内へと鳴り響く。

言うまでも無く、世界観を壊しているものの一つであった。

「誰だ？ 今日客人が来る予定は無い筈だが？」

「そんな事言わんと入れてくれや、ヒナタに届けもんがあるんや」
門の置くから聞こえたムスツとした声に、即座に反応した。

お得意の白眼で確認したのか、門はゆっくりと開く。

現れた人物を見て、驚愕とまでは行かないが、少しだけ驚いた。

「どうした？ 入らないのか？」

無愛想に白い目をこちらへと向けている少年。

分家相応の額にある呪印を時折気にしながら、日向ネジは答えるのだった。

「ああ、入るわ……俺は日上トモヤ、お前は？」

唐突に名前をネジへと訊いた。

正直、間違っている気はしなかったが、彼の親が双子だったので、一応問いかける。

「……俺は日向ネジだ……そうか、お前がトモヤか！」

突然、ネジが声を荒げる。

何か思い出した様なその表情に、トモヤは首を傾げた。

「俺の事、知ってるんか？」

「正確には知らん……が、ヒナタ様から良く噂は聞いているぞ？」

ネジは言うが、勿論ヒナタとは余り会話した事がない。

と、言うよりも、話す話題がないのだ。

登校時、授業中、帰り道、全てに置いて出会う事はほぼないほどである。

「んじゃ、お邪魔してまうよ」

返事を期待せずに、屋敷内へと足を踏み入れた。

木の葉一の一族の屋敷に入るには、何とも足りない挨拶である。

「うわあ、無駄に豪華やなあ。お、この絵高そうやし……くれや」

ピカソ並に何が書いてあるか分からない絵を、トモヤは指差した。先程から部屋を横切る度に高価な物がちらつき、思わず持つて行きたくなる。

「駄目に決まっているだろ？ それより触るな、お前の命では足らん」

絵へと伸ばしていた右腕を、ネジの一言で引っ込める。

そんなものここに置くな、とトモヤはひしと思った。

「にしても俺の噂ってなんや？」

唐突に、ネジへと問いかける。

噂を立てられるような事はしていないと自負していた事で、随分と発見に遅れてしまった気がした。

「知らないとは意外だな」

不適に、ネジは笑う。

傲慢に鼻を鳴らす姿は原作と比べても類似していた。

そうして、ネジが語る。

「アカデミー入学から1年。脱走65回、授業妨害31回、極めつけは遅刻の数だな。146回はありえないだろう」

「……おいおい、細かい数字までどうやって流れとんねん」

能弁で語るネジとは対照的に、トモヤはげんなりとしていた。

自分でも知らない事がここまで噂として出回っているとは思っても見なかったのだ。

「知らん」

ネジの返事は実に清々しいものだった。

真夏の暑苦しい日差しがさんさんと降り注ぎ、汗が頬を垂れる。

「誰何やるか……」

「皆目検討もつかんな」

しいんとした静けさが屋敷内へと広がる。

意外にも人が寄り付かない縁側を通り、ようやく目的地へとたどり着いたのだ。

「上がつてもらって悪いが、ここから先は流石に通せんぞ？」

「まあ、そうやるな」

頷き、先生から渡された茶封筒を渡す。

だが、ネジはそれを受け取る素振りを見せなかった。

「おい、とつとと取れや」

痺れを切らして、トモヤは再度促した。

微妙な空気が淡々と、静けさの中を流れる。

もう一度、トモヤが促そうとすると、ネジの掌底が目の前まで近づいていた。

「……危ないなあ、何さらすんや」

間一髪、顔面へと迫り来る掌底を掴む。

渡そうとしていた茶封筒が、ひらり、ひらりと床へと落ちた。開始の合図、と言わんばかりのネジは左手でも掌底を放つ。

「チィ」

ネジは苦虫を踏み潰した様に舌打ちをした。

両方とも避けられた事が気に食わなかった様である。

掴んだ手を無理やりに引き、ネジは後退した。

「ちょい待てや、何やこの展開は！」

右手の平を前へと突き出し、ネジに静止を呼び掛ける。それを見てか、動きを止め、重い口をネジは開いた。

「……確か、お前のアカデミーでの成績はほぼ最下位だったな。その割には良く避けるじゃないか」

満面に不気味な笑みを、ネジは浮かべる。

自分で墓穴を掘ってしまったトモヤに、それを上手く言い包められる筈も無かった。

なぜか違和感を感じるネジと原作との違いに、時折首を傾げるのみであった。

「強いんだろ？ 来い！」

即座に柔拳を繰り出す構えをするネジ。

低くしゃがみ込み、左手をこちらへと向けた構えは、トモヤの見立てではどこにも隙は無く、正に完璧な構えであった。

（……こいつまだ9歳やろ？ 何でこんなに馬鹿強いねん）

心の中で、トモヤは溜息交じりに呟く。

少し、足を肩幅に広げた。

「ほう、やる気になったか……」

ネジの口元が緩む。

実に好戦的で、嫌な笑みだった。そうして、一言、ネジへと告げた。

「やる訳ないやろ？ バーカ」

「なっ！」

呆気に囚われたネジを余所に、反対側へと駆ける。

すぐさま追って来るネジを横目で確認し、屋敷内を必死に逃げ回ったのだ。

月下一族の……いや、月下一家の住む家。

その家の二階にて、シズク、レイの両名の冷やかな視線を潜り抜け、トモヤは何とか話を終わらせた。

「てな訳で、ネジ何か変やったわ」

「てな訳で……じゃなあい！」

ずんつ、と勢いを強めたレイの手刀が、頭上へと振る。

手加減はしているのだろうが、長話を終えたばかりで油断があったのか、モロに食らってしまった。

「痛たたあ、何すんねん！」

「ほとほと貴方には呆れますね」

痛みに耐え、頭を抑えていると、罵倒が届く。

間違いなく、シズクの物であった。

「だってしゃあないやろ、逃げようとしても追ってくるから戦ったら案外強かったんやからあ」

戦闘の一部が、トモヤの頭を過ぎる。

逃亡を図りながらも隙有らば気絶狙いで首筋を打つが、避けられ、腹部へと掌底を食らい、大庭へと吹き飛ばされたのだ。

「強いつても柔拳も未熟なアカデミー生でしょ？ 逃げ切れないと

は落ちたものだね」

「ああ、人の話最後まで聞けや！ あいつ柔拳未熟や無かったで？
チャクラコントロールも下忍のそれとは別やったわ！」

頭へと上がる血を抑える様に、トモヤは怒鳴る。

混乱しているのは、むしろこっちの方であつた。

「……未熟じゃない？ 9歳の子供が柔拳を？」

普段とは違い、呆然と目を丸くしたシズクが目映る。

手刀を繰り出したレイも、空気の重たさを感じたのか、再び元の位置へと座つた。

「ゴホンツ、話を戻すけどな、確か日向ヒザシって影武者で死んだよなあ？」

「そりゃあね、雷とのいざこざでそうするしかなかった筈だけど、それが何？」

当然の答えが、レイから返ってくる。

日向ヒザシは、雷の国の忍がヒナタを誘拐しようとした時、その忍を兄であるヒアシが殺した。

戦争を盾に、これ見よがしに条約を突きつけ、ヒアシの死体を要求してきた雷の国。

白眼の秘密を他国へ渡らせてはいけないと、ヒザシは自ら影武者として、原作では息を引き取つたのだ。

額に呪印のある分家のものは、死後、目の情報を永遠に封印するのだから……。

「でもな、生きとつたんや……つか、俺らの殴り合い止めたんもヒザシさんやで？」

先程とは違い、本気で二人は首を傾げた。

目は明らかに言葉を信じず、疑いの眼差しであつた。

「それにな、何かネジに兄ちゃんがおつたんや、会ってへんけど、名前は……そう、日向ミヤビや」

なぜかその言葉を聞いた直後、二人の目に生気が戻る。

疑いが納得へと変わり、どこか決め込んだ目つきのまま、シズクは言う。

「多分その方は、私達と同じですよ？」

思わず、今度はトモヤが首を傾げた。

思考を繋げる為、一旦窓の外の青空へと目を向ける。

降り注ぐ太陽、青い空、白い雲。海が無いのがとても残念なくらい、華麗な日であった。

リフレッシュし、もう一度、視点を戻す。

「つまりは転生か？ それとも憑依っちゅう訳か？」

ようやくたどり着いた結論だった。

シズクの顔から判断するに、突き当たるのが遅かったのだろう、再び冷やかな目でこちらを覗いていた。

ふと、レイの方へと流すと、黒い鞘の刀が左脇に置かれていた。

「その刀何や？」

「あ、これ？ 父さんが任務帰りに買って来たんだってさあ、ええと、名前は……」

口籠ったレイへと、シズクは即座に助け舟を出す。

「刀の名称は天風、由来は天をも仰ぐ風の如く、地を這う敵を切り殺すから。風のチャクラを最も扱いやすい金属で加工された物、と言っていましたよ？」

案外、この二人は良いコンビなのだと、トモヤは思う。

言うなれば、駄目駄目な社長とキリツとした美人秘書とでも言うべきか。

世間知らずで物知らずなレイを、シズクが上手くカバーしていた。「ほお、そいつは大変やなあ……まあええわ、話終わったし俺、帰るで？」

一言、それだけ告げて、月下家を出る。

ネジの力を見て、修行に精を出そうと、トモヤは必死になっていた。

月日は流れ、四年。

卒業試験のシーズン一色に、忍者アカデミーはなっていた。

試験の忍術の予想や、今までの期間の感傷などに生徒達は浸る。

「明日はとうとう卒業試験だ、誰一人落ちるなよ！」

イルカからの激励を受け、レイの拳へと力が入った。

「分かってるってばよ！」

ナルトが一人、激励へと応答する。

その声を聞き、レイは微笑するのだ。

殺しに対する楽しみではなく、これから始まる計画の一端を垣間見る為に…。

10話 日向家（後書き）

改稿完了です。少し端折りましたww

番外編？（前書き）

これから偶に番外編として4年間の出来事をさらっと書きます。

番外編？

雲、それは形を変え続けながら動き続けるもの。この話は、雲が大好きな少年奈良シカマルとその親友秋道チョウジと俺の休日の物語。

「あゝ雲はいいよなあゝ」

建物の屋上の椅子で仰向けになりながらそう申すは自称逃げ腰？
1の奈良シカマル、彼は月下レイと共に最近日課になっている雲見をしている。

「同じく、今日は修行もないし、羽を伸ばせるなあゝ」

レイも全く同じ格好でシカマルの言葉へ同意を乗せる。

「修行？ 俺もだ、最近親父が五月蠅くてなあ、あゝゝゝめんどく
せえ」

目を虚ろにしながらもシカマルは片膝を組み替え、ぼやく。

「シカマルも？ どんな術？」

「ん？ なんか影真似の術って言うんだけどよあゝ、昔は影縛りの

術って名前だったらしいぜ」

再び面倒と口に漏らしながらも少年は更に深く雲を見つめる。

影真似の術とは、奈良一族に伝わる秘伝の忍術であり、影を使い敵を止め、拷問としても使える便利極まる忍術。

「シカマルうゝ、レイいゝもつ来てたの？」

そんな時、秋道チョウジは両手に抱えきれないほどの大量の菓子を持ち、二人は首をやや後ろへ傾けてチョウジの姿を目視する。

「ターゲットはチョウジだ！ 行け！」

不意にレイが素早く起き上がり、身を乗り出してチョウジを前方のチョウジを指差す。

「マジかよ？ めんどくせえな」

シカマルは一瞬嫌そうな顔を浮かべたが、ゆっくりと起き上がり、右手で左手を包み込む要領で不可解な印を手早く結ぶ。

影真似の術を発動させ、シカマルの足元を覆っていた黒い影がウネウネと動き出し、チョウジの影と結びつき硬直させる。

「チョウジ、動ける？」

退屈そうにその場を見守っていたレイは影真似の術が即には始まっていると感じ、チョウジへと話しかける。

「う、動けないよお？」

何が起こったかわからない様子で立ち尽くしているチョウジ、シカマルはこの時期には影真似の術を完全に会得している様だ。

「はあ〜しんどい、この術半端なく疲れるんだぜ？」

そう告げながらあっさりと印を解き、再び雲見の体制へと体を寝

かす。

印を解く様子を見ていたチヨウジは術が解けたのと同時にシカマルの元へと近づき、訊く。

「あれ？ 動ける。なんなの今の？ シカマルがやったの？」

「ああ、影真似の術ってんだ。親父に仕込まれてな」

チヨウジの問いに、シカマルは格好もそのままに答える。何とも自らの術にあまり期待も執着も無く、勇ましい限りだ。

「親父さん、もうシカマルに修行なんてさせてんの？」

「よくわかんねえけど、お前のせいらしいぜ？ あーめんどくせえ」

ふと起き上がり、レイを見るや否や、溜息混じりにシカマルは呟く。

「正確にはお前の父ちゃんのせいなんだけどなあ」

「父さん？」

「酒の席でよくお前の自慢してたらしいぜ、その時に親父がな」

ギンはシカクとも仲が良く、いつも暇があれば酒を飲み交わすと良くレイは聞かされていた。しかしまさか自分の自慢話をされるとも思ってもいなかったレイは、嬉しさ半分、恥ずかしさ半分と、何とも言えない心情で聞いていた。

「それなら僕もあるよ？」

今まで口を閉じていたチョウジが徐に口を開く。

「それならって俺の父さんの自慢話？ 全く、困った父親だね」
「そっぴやその酒の席にチョウザのおっちゃんといのいちのおっちゃんもいたって言ってたな」

興味の欠片も持たない、と言った表情でついでの様に付け加える。

「僕もちよつとなら術使えるようになったんだよ？倍加の術って言

うんだ！」

「あ、それは絶対にやっちゃ駄目だよ？ 危ないから！」

「えっ？ 倍加の術知ってるの？」

チヨウジが疑問の色を浮かべ、何故知っているのかを問う。

「え、とね……………そう！ 倍加でしょ？ 十中八九大きくなるんだし」

顎に手を当て、必死に言い訳がましい事をレイは口にする。

「そりゃあそうだ、やったらめんどくせえことになりそうだし、やるなよチヨウジ！」

理に適っていると、シカマルもチヨウジの術の発動を止める。

「……………わかったよ……………そうだ！ レイの術見せてよ」

「確かに、俺が見せてお前が見せないってのは不公平だぜ？」

チョウジはポテチの袋を開けながら、シカマルは再び起き上がりながらレイに言う。

(……話しが剃れてる気がするけど、一つぐらいならいいかな?)

術は見世物ではない、と言う自来也の言葉を無視する様な気がして、少し罪悪感を感じるが、レイはスタスタと二人と距離を開き、振り返り、叫ぶ。

「じゃあ一つだけね、チョウジ！ 落ちてる石、一つ投げて！」
「う、うん。はい！」

チョウジに支持すると、落ちている石をレイに向かって投げる。ゆっくり、ゆっくりと回転をしながら近づいてくる石。そうしてタイミングを見計らい、素早く印を結び、ある術を発動させた。

手元に石が来た瞬間に手を合わせ、瞬間的に風を起こす。すると石がチョウジを超え、さらに後方の柵に勢い良く直撃した。

「すげえな、なんだ？ 今の？」

「石が物凄い速さで飛んでったね」

石はシカマルとチヨウジの間を駆け抜けたので、二人は顔を見合わせながら話合う。

「今のはね、烈風掌っていう術で、主にクナイや手裏剣を用いて使う術な訳だよ」

我ながら言い術だ、と勝手に付け足し、うんうん、と自分で頷く。

「随分便利だな、これ使えば一々手裏剣投げるより効果的じゃねえか？」

「チャクラにもよるけど、大体はそうだろうね」

二人の元へと足を向け、歩き、再び椅子へと座り込む。

「さあて、術の見せ合いは今ぐらいにして雲見てのほほんとしようぜ〜」

今までの事をすべて無き物とし、シカマルが振り出しへと話を戻す。

「そうだね、僕沢山お菓子持ってきたんだ！」

先程影真似の術を解いた時、椅子の端に置きっぱなしにしていた菓子をチョウジは指差す。

「いいね、少し頂戴」

満点の笑みを浮かべ、月下レイはそう問う。彼は何の意図を持ち、何を成そうとするのか。

平和、それはいつの世も犠牲の上に成り立つ。……少年少女のその無垢な笑顔も、戦乱の世を終わらせた多大なる死人達の力によってそれは成り立っている。だから感じていて欲しい、平和とは、破壊を招くものだ。

11話 波乱の卒業試験（前書き）

番外編は改稿しないと思います。
理由は単に面倒だからでww

11話 波乱の卒業試験

忍者アカデミー卒業試験。

現在の上忍中忍、火影さえも通った道。

下忍となる為の最初の試験、今回は分身の術である事は、既に知らされていた。

そうして今も、イルカ、ミズキの両名が見守る中、レイは別室の中央に立っていた。

「よし、試験を始める」

イルカの声で、ゆつくりと印を結び始める。

四年もの月日がありながら、分身の術を教わったのは一年目の始めであり、前日も印を組む練習など皆無で今、卒業試験を受けていた。

（えと、次未だったっけ？ 午、辰？ ああ、もう良いや）

日本人であった頃から、テストの前日にすら、勉強などした事がなかった事が祟ったのか。

うる覚えの印を適当に結び、最後に多量のチャクラで補おうと無理やりに捻じ込んだ。

「——分身の術」

白い煙が回りを包む。

成功したのか、失敗したのか。分身の術は影分身とは違い、影がなく、煙の内側からでは決して確認は出来ない。

ようやく煙が晴れると、周りには分身など存在しなかった。

ただ、足元に転がる無数の分身の残骸が残るのみである。

「……印を組み間違えてますね。あの場合は酉でしょうから」

「ええ、それにチャクラも分身三つ作るには多すぎる」

教師二人の声の大きな密談を、レイは聞きながらも、盛大に焦っていた。

落ちると、この後に言われるであろうシズクの罵声の数々が頭に

浮かぶ。

「……元の成績から判断して、合格でもいいのでは無いでしょうか？ 印は組み間違えてましたけど、チャクラの量は下忍になってもおかしくはありませんし」

迷うイルカへと、ミズキの言葉が入る。

決心をしたのか、イルカは額当ての一つを取った。

「よし、合格だ」

その言葉に安堵しながら、イルカからの額当てを受け取る。

（あー、良かった。お先真っ暗になるかと……）

廊下を歩きながらも、受かった事で次の次を考える。

恐らく一番近いのは、中忍試験であろうが、どうなるのだろう。

『——くだらねえな』

誰もいない廊下に、声が響き渡った様な気がした。

人影が一切見られないのにもかかわらずである。

「なんだって？」

「だから、ナルトが受かったんやと」

今回は、人数が少し多く、時間短縮の為に二つの部屋を使っていたらしかった。

一番最初に呼ばれたのが、自分とナルトは同じ時間帯だった様だ。

「だからあんなに上機嫌なんだね」

シカマルやキバ達へと、ナルトは自慢げに話をしていた。

額当てを持ってないのは、傷つけたくないから、ポケットにでも

しまったのだろう。

「見る見る！ 俺ってば受かったってばよ」

「ああ、それ聞くの四回目だぜ？」

何度も報告をするナルトに、キバはうんざりとした様子であった。それを見ると、今更落ちろ、などとは言える状況ではない。

「……どないするん？」

トモヤは溜息を付く。

事実、ナルトが落ちなければ、ミズキが始末出来ないのだ。

裏切り者を放って置く事ほど、レイの喉元に引っ掛かる事はなかった。

「プランBに移行しようか」

ごく真面目な顔で口にした事で、トモヤは感づかなかった。

意外にも、内容を聞かずに首を立てに振った。

卒業試験が終わると、既に昼過ぎであり、多くの保護者が迎えに来ていた。

今回の試験は三十名中の二十九名という大多数が受かった事に、喜びを噛み締めた生徒達で賑わっていた。

たった一人で、とぼとぼと道を歩く少年、日上トモヤへと哀れみの眼差しを向けながら……。

『なあ、おい。これで本当にええんか？ 何か嫌な予感しかせえへんけど』

先程中古で安く買い取った無線で、トモヤからの連絡が来る。

周りの大人達が何を言っているのかは流石にアカデミー屋上までは聞こえはしないが、トモヤを見てひそひそと語っている所、何か

しらの同情であるだろう。

「大丈夫でしょ？ そのまま移動あるのみ！」

こちらから見ても、トモヤはその言葉に項垂れていた。
なぜか遊び心が広がっていく。

『……人使いが荒いわぁ』

「何か言った？」

『いや、何でも』

甲高い声で、一端連絡を落とす。

ここまで来れば、トモヤであれば何とかしてくれるであろう。

自分は自分の出来る事を、とレイは火影亭を目指して屋根上を移動し始めた。

闇の蠢く真夜中。

忍も急速は必要であり、普段であれば皆、大体は寝静まっている時間帯である。

それでも、今日は違っていた。

森の木から見ても、様々な家に明かりが付き、忍達がしきりに移動しているのが分かる。

ミズキの指示であろうが、それはどうせ無駄足に終わる。

『なあ、まだか？ もう眠い寝んけど……』

白く、大きな巻物を抱えたまま、大きな木陰にだんまりと、トモヤは座っていた。

無論、本物ではなく、偽物ではあるが。

「イルカ先生来るまでもう少しだから、少し待ってっ」

『それよか、朝から気になってたんけど、お前のその服装は何やね

ん。黒いコートに黒いズボンで、明らかに敵キャラやる」

「失礼な、ハガレン御用達のグリードさんを忘れたのかい？ ぼんやりとした記憶を探って作らせた特注品なんだよ？ 十万両もしたんだからね」

冷え切った宵闇に、言葉が通る。

その後の返事は、トモヤからは返って来ずに、イル力が到着していた。

「さて、と……役者がそろったかな、ねえ、ミズキ先生」

目の前の枝には、ミズキがいた。

息を切らし、躍りになったままの目を押さえ、冷静にでもなろうとしているのだろうか。

相手は子供、ばれてはいない、と言いつけているのだろうか？

「レイ、君。ここは危ないよ、トモヤ君が封印の書を持って隠れている可能性が……」

「一足遅かったですね、もうイル力先生が見つけてますよ？」

ここから少し離れた場所の地面を指差した。

イル力がトモヤを叱り付けている絵図だ。

「……そうかい、じゃあ戻って、後は僕がやるから」

ミズキは背中に背負った大きな手裏剣を持ち、身構える。

裏切り者は殺す。

その考えは、とても素晴らしいものだ、と、レイは思う。

実行者が裏切り者でなければ、だが。

「……殺すんですか？」

「ああ、火影様の命令だからね。……君はトモヤ君と仲が良かった、だからいない方が良い」

ミズキが、横を通り過ぎる。

すれ違い様に、気を抜かないのは、中々に忍らしかった。

どんな相手であろうと、食事時や就寝中は無防備となる。それ以上は無防備となるのは、味方の横隣を通る時だ。

それを理解しているミズキは、忍としては立派であつただろう。

(惜しいなあ)

隠してあつた黒刀を取り出す。

それに気が付いたのか、ミズキは速度を速めた。

「——本当に、惜しい……」

眩きと共に、刀が宙を舞う。

喉元を一閃、それが人間を殺すのには一番手っ取り早い。

深く刺し殺す必要も無ければ、態々他の箇所を切りつける必要も無い。

浅く、鋭く。首を跳ね飛ばせば、一瞬で済むのだから。

「くっ」

右手に持っていた大きな手裏剣で、斬撃を、ミズキは防ぐ。

手裏剣は弾かれ、在らぬ方向へと飛び去ってしまうが。

「何をするんだ！ 僕は今、裏切り者をつ」

「……奇遇ですね、俺も今、裏切り者を片付けようとしていたんですからね」

その一言で、ミズキに脅えが走った。

顔は強張り、情けなく後退りをする姿に、先程の評価を大幅に落とす。

「やっぱり、この程度ですか」

戦いの最中、敵に弱みを見せるべからず。

忍には、その様な綻があるのだ。

元日本人である自分に、そんな事が出来るか、今まで不安はあつたが、何とかなるものらしい。

心を冷徹に変え、ミズキへと一歩一歩近づく。

「く、来るなあ！」

ポーチから手裏剣を四枚、両手で繰り出した。

一直線上に並ぶそれを、簡単に刀で打ち落とす。

「ま、待て。お前にも、大蛇丸様の力を分けてもらえる様に頼む。お、俺の部下にしてみても良い！ だから助け——」

首筋に一撃、みねで打ち付ける。

威力としては、ミズキが一撃で気絶をする程であった。

「台詞が小物過ぎる、自分の事しか考えていないのは明白だね」

昼間に頼んだとおり、火影は今を水晶で見ているだろう。

その事を祈りつつ、レイは里へと戻る為に、足を留める事無く、動かす。

もう、始まってしまった物語を、完結へと導くために。

11話 波乱の卒業試験（後書き）

大幅改稿です。

12話 担当上忍

卒業試験から一日。

第一班と称されたレイとトモヤとシズクは、ぽつぽつと担当上忍と共にいなくなる生徒達を見ていた。

特にトモヤの眼光は鋭く光っていた。

昨晩色々あつて戻るのに時間が掛かったのだろう。寝不足であるのは、瞳の下に出来た隈が物語っていたのだ。

「んで？ こうなつた訳？」

誰にも届いてはいないだろうが、窓の近くでレイは呟く。
教室内に残つたのは六人、第一班と第七班。合わされば最も関係がややこしくなるであろう班同士であつた。

静かになつた教室では、一番後ろの席でトモヤは熟睡。
ナルトは黒板消しをドアへと挟め、サクラはそれを止める素振りを見せている。

そうして、一番に面倒であるのが……。

「お、おいつ」

しきりにシズクへと話掛けようとするサスケであつた。

「アカデミーを主席で卒業し、うちは一族のエリートである貴方が、私の様な下衆な女などに、何か用があるのですか？」

嫌味としか取れない言葉の数々に、サスケは凹みながらも次へと会話を繋げ様とする。

「い、いや、あのな。これから任務がある。死が付き纏うだろう、大丈夫か？」

「ご自分の心配を無さつたらどうです？ 貴方の様な天才の血が絶える事を心配すべきです」

愕然としながらも、サスケは近くの席へと付いた。

サクラがこの様子を見ていなかったのは、不幸中の幸いだったか

も知れない。

余計な騒ぎにならずに丁度良かったと、常々思っばかりであった。

「……何でそんなにサスケを毛嫌いしてるの？」

「毛嫌い？」

近場にいたシズクへと軽く耳打ちをするが、ただ首を傾げるだけである。

「何の事ですか？ 私は本当の事を的確に言っただけに過ぎませんし、特別嫌っている訳でもないです」

そうとだけ告げられ、レイは元の位置へと戻り、教室内を再び見回す。

自由人しかない、この教室を。

はたけカカシが現れ、第七班を連れて行つた。

熟睡から目覚めぬトモヤ、壁際に寄りかかったレイ。人数も三人に減り、自然と静けさが増す。

第七班が行ってから、既に何分、何十分、何時間たったのだろうか。夕日が赤々と燃え、沈み掛けている。うる覚えの頭を動かすと、確か担当上忍が来始めたのは昼辺りだった。

カカシが来た時ですら三時程度であつたはずなのに、自分達の担当は来る気配すら見せない。

「……来ませんね」

「……来ないね」

レイとの言葉が重なる。

静かだったからか、気にしているつもりでいても、全く気付けていなかった。

今、自分達はほぼ、二人きりなのだ。

「——ッ、あ、あのですねっ！」

「どうかした？」

自宅内とは何か違う。

そもそも、家で二人きりといった状況は起こりえないのだ。

部屋も別々、アカネかギンのどちらかは必ず居間にいる。更には修行などを考えると、部屋内で二人きりになった事など、今まで数えるほどである。

それでも、ここまで胸が高鳴るのは、学校というシチュエーションのせいなのだろうか。

「か、勘違いしないでくださいねっ！」

「……何を？」

会話が余りかみ合わない為か、レイは不思議そうにこちらをじっと見つめる。

それがまた何も考えていなそうに見えたのだが、それすらも考え深いものにも思えた。

「あっ！　そういう事か！」

ぽんっ、とレイが手を鳴らす。

その衝音と同時に、シズクは体を軽く振るわせた。

ばれなければ永遠にこのまま、かと言ってばれなければ永遠に進展なし。

この場で、もし気付いたのならそれでも良いと、シズクは覚悟を決め、レイの言葉を目を瞑って待つ。「シズクってさ、もしかして

——」

腕を組んで、考えた様子で言葉を繋げて行く。

ある一点まで行くと、思った以上に、レイが溜めるのだ。

何かを決意する様な真剣な表情に、シズクは更に鼓動を早める。

「今日の朝食気に食わなかったりする？」

「……はい？」

いくらか、期待した自分が馬鹿馬鹿しく思えた。

この少年が、そんな事を考えている様子など、見た事がない。それどころが、何を考えているのかも定かではなかったのだから。

「……どうして、その様な回答が？」

「だって今日余り物の卵尽くしだったじゃん？ 卵嫌いなのかなあ、とね」

無垢な表情で、レイは見当違いに言った。

（……貴方の中の私のイメージはそんなものなのですか？）

心では、悪態を垂れ、軽く睨んでやろうとも思うが、その惚けた表情にそんな事をするのも意味を成さなくなる。

「うおおい！ 遅れてスマンな！ ちょっとそこで可愛い子に会っちゃまってよお。全く、木の葉は美人揃いで困るぜ！」

慌てた様子で、一人の男が教室のドアを開ける。

余りの騒音に、数時間熟睡していたトモヤが起きるほどであった。

「つい訳で、俺がお前らの担当の日向ミヤビな。先生でも大先生でも教授でも好きに呼ぶが良い！」

遅れて来て、何ともミヤビは大口を叩く。

先程の事もあり、シズクは黙って聞いていたが、一人、不機嫌だった。

「じゃあ、アホ教師。俺らをそんな下らない事で待たせという覚悟出来とるんやろうなあ？」

教卓へと足を乗せ、余裕のモーションのミヤビは崩れ落ちる。

トモヤが寝起きが悪いとはレイから聞いていたが、実際に見たのが初めてのシズクは違いに驚きながらも、もっと言ってやれ、とい

った絶妙な気持ちで聞いていた。

「あ、アホ教師って君っ！ もう少し労わろーよ、これから任務するんだよあ？」

「知るか」

不良の様に、トモヤはそっぽを向いた。

ここまで来ると、通常時とはもう別人認定でも不思議ではないほどである。

「……じゃあお前ら、自己紹介な。そっちの女の子から」

いきなりの話題変換だが、至って冷静に答える。

「名は、うちはシズク。好き嫌いもないですし、将来の夢はのんびりと老後を過ごしたいです。趣味もないですね」

「それじゃ生きてるだけで夢叶っちゃうぞ？　じゃあそっちの金髪な」

特に自己紹介に触れるわけでもなく、ミヤビは簡単に流す。

もはやきちんとした事は名前しか言っていないが、その辺りはどうでもいいのだろうか。

「……日上トモヤ、好きな物は山ほどある、嫌いな物はお前や。……」

……将来は嫁さんとたこ焼き屋、以上」

「嫌われたもんだなあ、次！」

一過性の物とは言え、トモヤの凶暴さは際立っていた。

目付きは凶悪、座り方は不良。それでいて回答は適当というどうしようもない。

と、言うよりも、自分もトモヤももう、忍でいる必要は無いのではないかとも思える自己紹介である為、最後を締め括るレイへと視線を移す。

「名前は月下レイで、好きな物は凄い事、嫌いな物は血かな、出ると痛いし。将来の夢は世界征服！」

決め顔でレイは叫ぶが、冗談では無さそうだった。

人生設計などは苦手そうな分類ではあるが、口にした事は頑として変えようとしない。

「ガハハハッ、面白いなお前ら、明日第八演習場で演習するぞ？
面倒な説明は抜き、ついでに朝飯も抜きだ。じゃあな」

それだけ告げ、ミヤビは去る。

妙に弱い背中に、白い着物を着込み、額を隠す様に額当てをした男は、角を曲がる前に煙となって消えた。

12話 担当上忍（後書き）

大幅な文字の改稿と、ミヤビの小物臭さを少し抜きましたw
その他はこれといった改稿はないです。

13話 サバイバル演習1

サバイバル演習、それは原作の一部であれば、はたけカカシから表向きには二つの鈴を、うずまきナルト、うちはサスケ、春野サクラの三名が奪うと言う物だった。しかしその裏側はチームワークを示す試験である事を、彼らはそれを知る由も無くあっけなく受かってしまった訳だが。

「……まだレイは起きてないのね。……シズクちゃん！ちよつと起こして来てくれないかしら？」

「はい。叩き起こして来ます！」

（『ちゃん』付けは止めて欲しいのですが……）

アカネに気付かれない様に小さく溜息を漏らし、シズクは階段を登っていく。

レイの部屋へと到着したシズクが目にした物は、あちらこちらへと散らばっている巻物と洗濯物の山だった。

（……本当にだらしがない。何でこんな人を……ッ！、私は何をっ！）

部屋の中で一人、シズクは静かに顔を赤く染めた。

「……何してんの？」

不意にレイが目を覚まし、寝ぼけた目を擦りながら自らの部屋で顔を真っ赤にしているシズクに問う。

「さ、さっさと起きてください!!」

照れ隠しのつもりか、シズクは赤い顔を更に赤く染め、右手を振りかぶり、超速で拳を降ろし、見事にレイの顔面を捉える。

「いだああああああ!!」

この時のレイの魂からの叫びが木の葉中に広がったとか、広がらなかったとか。

「どうしたの!!?.....あらあら」

何事かと駆けつけてきたアカネが聞く必要もなく、頬を押さえながら悶絶しているレイ、そして肩で息をしているシズクを見て、アカネは早々に察した。まさか本当に叩き起こすとは思わなかったのだろう。

「.....あれは無いんじゃない?あー痛いわぁ」

レイが右手で朝食を食べつつ左手で頬を擦る。あれ程の衝撃を受けてものの数分で起き上がるのは、彼が化け物染みて来た証拠か

もしれない。

「……だから謝ったじゃないですか！」

「謝ったってあれはただの家庭内暴力だよ？」
ドメスティックバイオレンス

謝った、と強気で言うシズクにレイは言い切る。

「あ、貴方と家庭を持った覚えはありません！」

（いやいや！そう言うことじゃないから！）

レイは心の中で突っ込んだ。表立って言わないのは、彼がボケ担当であるからだろう。

「二人共喧嘩しないの！」

机上で飛び交う言葉の数々に腹を立てたアカネはクナイを左手で持つ。まるで脅迫の様に。

「……そうだね。これ以上は桐がなさそうだし。ここらで止めとか

ない？」

「……仕方がないですね」

シズクは冷や汗を掻いているレイの中断の提案に乗り、一時休戦となった。

「おい、来てやったで！」

この微妙な空気の中、背後からドタドタと縁側を忍者らしくなく足音を立てながらトモヤが走ってくる。

「あら、トモヤ君。今日の試験、レイの事頼むわね」

今まで左手で握っていたクナイを神速で隣の部屋の壁へと突き刺し、証拠隠滅を図り、ニツコリとトモヤを歓迎する。

「わかりました。……つーかまだ飯食ってたんか？遅れたらきつと五月蠅いでエ？」

トモヤは向こうの壁へと突き刺さったクナイには全く気付かず、話を進める。

「あ、それ嫌だな。今すぐ食い終わる」

空気を和ませる為、そして先生にしつこく突っ込まれない為にも、レイは先程のスローペースのほぼ三倍の速度で平らげていく。

「……私達は外で待つとしましょう。ではアカネさん、行って参りますね」

レイが準備を終えるのに時間がかかると判断したのかシズクがトモヤを引っ張って玄関へ行く。

「行ってらっしゃい。頑張ってね」

先程の脅迫面とは打って変わって満点の笑みでシズクを送り出す。そのギャップにシズクは思わず息を飲んだ。

「早よう準備して来いや！」

襟を引っ張られ、ずるずると縁側を引き摺られているトモヤがそう言い残す。

レイが外へと出ると、二人はもう待ちくたびれた、と言う表情でいた。

「やっと来たんか？」

「ちょっとね、天風何処行っ たか分からなくて結構探したんだよ？」

その回答にシズクはほとほと呆れ果てた様に額に手を当て、天を仰いだ。

「今更だけど何？ その服？ あと額当て額にしたの？」

レイが言うその服とはトモヤが着ている白いタキシード？つばい物のこと。……目立ちすぎだとレイは思う。

「俺が親父の昔着てた服にちょっとアレンジ加えたんや！ それに額当てを額にするのは常識やろ！ お前こそどーしたんや？ 見当たらんけど？」

「俺はポーチに入ればなしだけど？」

「おまつ……それ額当て言わんやろ……」

トモヤは落胆気味に自分の額当てを上下に揺する。

「……そんなことより、早く演習場へ行きませんか？」

今まで黙って聞いていたシズクが左腕に巻いている額当てを気にしながらそつ口にする。

『よし、じゃあ行こう!』とレイが言う前に既に二人は歩き出していた。

「早いわ! こういうのは出発の合図とか掛け声とかあるじゃん!」
「どうでもいいです。早く行きますよ」

レイの講義をシズクは振り向くことなく切り捨てる。レイはガツクリと頂垂れながら最後尾ののそのそと歩き出す。

「……第8演習場? やっけ? 何処にあるんや?」

先頭を歩いていたトモヤが振り返りシズクに聞く。レイに聞かないのは……言つまでも無いだろう。

「ここから結構近いです。真っ直ぐ行けば着きますよ」

再び前を向いたまま無常にシズクは答える。

その後も適当な会話をしながら店の裏側を歩くこと約10分。俺達は「第8演習場」と看板に書かれた青々とした森を発見する。森の中には不気味そのもので、死の森を沸々とさせる。あそこまでは広くないし、暗くもないのだが。

「ここ？　だよね？　じゃああのおっさんは？」

茂みのある程度進み、限が無い感じが漂い始めた時、徐におもむろレイが口を開く

「……何処かで待っているのでしょうか？　一言も言いませんでしたけど」

いつまで経っても人っ子一人いない事に困惑がるシズク。そのまま真っ直ぐ進むと木々に囲まれた広い平地に出た。そこには三人が散々馬鹿にした男が立っていた。

「お！　こんにちは！　先生。どないしたん？」

トモヤがミヤビのあまりの変わり様にそう聞いた。……正確には変わっていない。風貌や見た目に関しては、何にも………唯、空気がいつもよりピリピリとしていた。

「やっと来たか。昨日はすまなかったな。少し取り乱してしまった」

昨日とは違い、落ち着いた様子でキビキビと話すミヤビに三人は驚きを隠せない。

そんなミヤビの変貌に三人の目付きはいつの間にか真剣な眼差しへと変わる。

「先生、試験の内容はなんです？」

「……試験は鈴取り合戦をやる。鈴は一つだ！」

ふと、昨日の話し方に戻るミヤビは兎も角、鈴が一つ、これが三人を最も迷わせた。

暫しの沈黙の後、レイが口を開く。

「鈴は一つ？　って事は一人しか合格ないんですか？」

通常なら、そんな事はいえない。任務とは四人一組であるのがほぼ原則であり、一人の担当上忍の下には三人の部下が付く事もまた、原則である為だ。要するには三人落ちるか三人受かるか、その二つに一つに他ならない。

「待て！今説明するから。……最初に、この試験で見るのは『チームワーク』だ！」

ミヤビがそう告げると、更に三人に疑問が募る。

空にはカラスが飛び交い、地上では小動物がのんびりと暮らしている。……なんとも喉かな所だと、レイはろくに話を聞かずに考えていた。

「？……それってばらしてえんか？」

「ばらすも何も、三人とも。……知ってるだろう？」

不意に先程と同じ鋭い目付き、殺気とは何か違う気迫を受け、三人は身を翻し、身構える。

「やっぱりあんたも元は此処に居た人やなかったんやな？ってもどうせ日本人ややろうけど」

「此処に居ない？ってことはこいつも……」

トモヤの言葉の意図を読み取り、察し、自分達と同じ同郷者であるとレイは判断する。

「ご名答。俺もお前らと同じだ。ま、来た時期は違っただろうがな」

レイのその疑問をあつさり解決するミヤビ。レイの代わりにシズクが聞く。

「……何故、私達のこと気付いたのですか？」

最もな疑問を口にしたシズクの発言、それだけでレイの思考が追いつく。

「……なるほどね、うちはの生き残りの存在。それが分かれば俺達を疑う余地は十分ある訳かな？」

「あー、そういうことやな。本来は一人しか居ないうちはの生き残りが二人居るっちゅう事やろ？」

トモヤの言葉にレイは素直に頷く。要するに自分達だけがこの世界に来たって訳では無い。

自分達は唯、巻き込まれただけに過ぎなく、決して特別な人間では無いのだ、とレイはしみじみ思い知らされる。

「……私の事は分かります。ではレイやトモヤも説明できるのですか？」

「それは感だ！」

シズクの問いにミヤビがきつぱりと言い切った。もつと論理的な答えが来ると勝手に予想していた三人は落胆の色を露にし、再び軽い軽蔑の眼差しをミヤビへと向けている。

「感かい！……いや、それより鈴が一つの意味は？」

「さつきも言った通り、この試験の合否を分けるのはチームワーク。……だが、中途半端なチームワークほど仲間を危険に晒すものは無い！ だからお前達は本気で鈴を取りに来い。誰でもいい、取るこ
とが出来たら合格だ！」

その時の日向ミヤビの瞳には何か、何か見えた。この試験は彼の彼なりの戒めであり、誇りであり、更にはこれ以上何も失わないとする決意の現われにも取れる。

「取れなければ失格、ですか。……面白いですね」

ミヤビの説明にシズクが笑みを浮かべる。彼はこの中で最も厄介で、最も恐ろしい少女をやる気にさせてしまった様だ。

説明を終えたミヤビが平地のど真ん中へ移動する。……半径30m程の平地の円にその先は森。狙ってくれと言ってる様なものだ。

「時間制限とかあるんか？」

「大体二時間ってとこだ！　その前に奪えなければ失格。分かったな？」

トモヤの疑問に即答するミヤビ。無論、二時間以内に取れなければ三人は不合格、だが彼は三人が転生、もしくは憑依のどちらかと気付いていても不思議ではない。

「よいい、スタート！」

ミヤビがさういうと三人とも散る。再び真面目な表情へと顔を戻し、呟く。

「やっぱ最初は定石通り隠れたか、……さて、どう来るかな？」

ミヤビが余裕の笑みを浮かべながら三人が現れるのを待っている。
その笑みが崩れるのは何時になるのだろうか。

14話 サバイバル演習2

『よい、スタート!』その言葉と共に三人は三方向に分かれた。ミヤビは中央で未だに微動だにせず、腕を組み、目を瞑っている。

気配は完全に消しているが、白眼を使えば人間三人くらい、容易く見つけられる。それをしないミヤビに軽い殺意を覚えながらも、レイは見据える。

【じゃあ最初はトモヤ頼むね】

不意にレイは無線で連絡を入れる、その言葉にトモヤは落胆気味に返した。

【えっやつぱ俺から行くんかあ? 柔拳は内臓に来るんやで?】

恐らく彼は日向ネジとの乱戦により、柔拳の特性と白眼の死角を誰よりも知っている。

だが柔拳の特性は知っていても食らえば意味が無く、更には白眼の死角なぞ針の穴ほどしがなく、遠距離の有効な術でなければ狙い撃ちなんて真似は到底出来ない。

【むしろ好都合だね、じゃあ行つてらっしゃい】

無線越しでトモヤには良く分からないが、恐らくはニヤニヤと笑っているであろう、そう思うと、捨て駒感があり、何ともやるせない。そう感じていた。

既に開始から10分ほど経過している中、ミヤビは退屈そうに溜息をついた。もう目を見開き、それでも余裕綽綽なのは変わらず、ずっと前を目視して時を待つ。

「……来たな！」

その刹那、前方から手裏剣が二枚ミヤビを目掛けて飛んでくる。待ち侘びた戦いの狼煙が上がったことにニヤリと笑みを浮かべながら首を軽く曲げるだけで簡単に避け、更に後方から迫っていたトモヤの回し蹴りを片腕を立て、防ぐ。

「あーあ、白眼使っていないから見えてへんと思っと思ったのにい」

トモヤが足を元に戻し、距離を取る。

長く思考を掛けた割りに、単調な攻め。しかも来るのはたった一人、ミヤビは気を落としながらトモヤを見る。

「……あんま悔しそうじゃないな、一体何が」

目的なんだ？、と彼は訊こうとした。

唯、それが出来ないのは、息を付く暇も与えられずに、木々で奥

底が見えない森の中から、一筋の光の様に刃状のチャクラの塊がかなりのスピードでミヤビを目掛け、右往左往しながら迫って来たから。

「あぶねッ！」

ミヤビはそう言いつつ軌道を読み、飛び上がり風を避ける。地面には刀で切り付けた様な跡が残っている。その跡はまるで何かが埋まって行った風に地中へと入り込み、もう奥が見えない。

「なんだあ？ 今の術？」

自分も知らない術が使われた事に疎外感と先程、心の中で気を落としたのを勝手に取り消す。

「今のはカマイタチのちょっとした応用ですよ？先生。」

奥行きの見えない森からスタスタとレイは出る。

ちょうどミヤビの位置から目視すると、彼の右手には先程から鞘に納まっていた刀が握られている。恐らくあれを使っただろうとミヤビは納得する。

「あら？ 出てくるんか？」

当初の計画には無かったレイの動きに、トモヤは惚けた声を上げる。

「作戦変更かな、このまま押し切る！」

遙か後方からそう叫び、ミヤビへと接近する為、全力で駆け、トモヤもその後を追う。

(……体術は兎も角、あの刀。風のチャクラを流している。あれ食らったらヤバイな)

「流石は月下ってどこか？」

走り寄る二人を見て、本気で殺しに来ている事に内心驚きながらも笑みを浮かべる。

天風による数回の突きを体を剃らして避け、右から来る横振りを受け流し、背後に回り込んでいたトモヤの足払いが迫る。

「やるな、生兵法って訳じゃ無さそうだ。……これで終わりか？」

トモヤの足払いを飛び上がり、回避したミヤビは嘲笑いながら問いかける。

「ほえゝ全然当らないや。やっぱ日向は木の葉にて最強ですなあ…
…でも空中じゃ避けられないでしょ？」

小馬鹿にした様子でニヤリとレイは笑う。

すると今まで身を潜めていたシズクが現れ、口元に手を軽く丸めて添え、体内のチャクラを火に変え一気に放出した巨大な火球がミヤビの前方から襲い掛かる。

（なるほど、さっきまでの空中への誘導が目的。この距離の火球を空中で避けるのは不可能だ。普通の上忍なら水遁か他の術で相殺だが、日向の俺では水遁は無いと見たか。ま、凶星なんだがな）

空中で漂いながらも火球を見据え、スウッと白眼を発動し、一瞬の高速回転により出来たチャクラの膜と火球、その二つがぶつかり合い、双方とも消滅する。

「空中で回天とか、規格外過ぎますよ」

空からゆっくりと降りてくるミヤビに呆れた声を掛ける。

死にはしないまでも、黒焦げぐらいにはなるだろうと考えていたレイは、日向の才に最も愛された男を甘く見ていたと痛感した。

「出来ない、なんて事言うてへんかったし出来るんやないの？」

ミヤビが自慢げな顔で地に降り立つが、三人はそれを黙って見ていた。

「追撃は無いのか？」

今までの殺す気満々の攻撃から一転、静かな沈黙が訪れた事により、ミヤビは三人を見回す。

「今は無理です、まずはその殺気をしまって貰えませんか？」

ミヤビの周りを漂う微々たるチャクラと肌にビリビリと伝わる殺気を目視しながら写輪眼にミヤビを映す。

「はいはい、……お前らは人を殺めたことはあるか？」

シズクの要望通りに殺気を閉じ、不意に真面目な顔付きで質問をする。

「なんや？藪から棒に」

「ある訳無いでしょ？俺達是一般の日本人な訳だし」

ミヤビの的を得ない質問に首を傾げながらも、二人は応答する。

「だよなあ、俺はこっちに来てから殺しまくったぞ？」

ハハッと笑いながらミヤビは話し始める。

二人は唯、今は黙って聞く事とした。

「まあ、それは良いんだが……それより俺が問いたいのは覚悟だ！
勿論他国の忍を殺す覚悟をな」

再び笑みを浮かべながら話すミヤビ。

実の所、レイは彼の事が分からなくなってきた。……人を殺す、
日本ではそれは重罪に値する。つまりは死刑または終身刑となっても可笑しくは無い程の重罪。それはこの世界でもう正当化と言っても可笑しくない程広まっっていて、更には目の前の男が簡単に殺してのけた事。

「ちょっと昔話に付き合ってもらおうぞ！……俺がこっちに来たのは第三次忍界大戦の真っ只中。下忍だった俺は戦争に狩り出されてなあ」

考え深く一人腕を組み、空を見上げながら男は語っている。

一応真面目な話であるのに、レイは話が始まった途端に地べたに座り込み、シズクは木陰に寄りかかりながら話が終わるのを待っている。

「分かった分かった、殺せばいいんでしょ？」

手早く終わらせようとレイは退屈そうに言っが、ミヤビの話は続く。

「……口で言うのは簡単だが、その先にある罪悪感^{ミヤビ}は想像を絶するぞ？ 自らの死の恐怖もそれに勝る物がある」
「その程度の事は問題無いです」

歴戦の勇者の様にあっさりとミヤビの脅しを切り捨てる。シズクの精神が異常だと感じたのは、ミヤビだけでなく、レイも例外ではなかった。

「もういい、お前らに話した俺が馬鹿だった。さっきの続きだ！
来いよ！」

ミヤビの黒い短髪が風で靡く中、日向の柔拳の構えを取り、二人のいる方向を見つめる。

「先生ー、俺らは合格ですよ？ 早く帰らせてくださいよ。叩き起こされて眠いんだから」

ゆっくりと起き上がりながらそう言うレイにシズクが少しムツとした顔をしたが、それ以上にミヤビが驚愕の表情を浮べる。

「何言つてやがる！ 鈴なら腰に付けて……な、無い！ 何故だ！ 一体何処に！」

ミヤビは腰の鈴を触ろうとしたがそこには何も無かった。その時、後ろからチリンツという鈴の音が聞こえて振り返ると、鈴を持ったトモヤの姿があった。

「ほれ！ これで合格やる？」

右手で持っている鈴を再び自慢気にチリンツと鳴らすと、ミヤビは頭を抱え、考え出す。

「なッ！ いつの間に」先生が無駄話を俺らに聞かせてたときですよ「おいおい！ それって反則じゃあ……………あ！」

ミヤビは気付いた。自分が『話している最中に鈴を取っては行けない』とは言っていないかったことに。

（畜生！ 一休さんかあいつは！）

怒気を露にし、恐らくは鈴を取るように指示したであろうレイを軽く睨む。

「久々に隙だらけだったんでね」

視線に気付いたレイが親指を立て、営業マンも顔負けの笑みを浮かべ答える。

「忍者は裏の裏を読むべし、ですよ？先生も修行が足りませんね」

ここぞとばかりにシズクもミヤビが先程犯してしまった傷口を抉る。

「つー訳で、合格でええな？」

「本っ当にお前らはいけ好かない………が、ルールはルールだ！
しょうがないから合格な」

腕を組みながら後ろを向き『しょうがない』を強調しているミヤ
ビを他所に、三人は微笑しながらも歡喜する。

「明日からは任務するぞー、各自十分に睡眠を取るように！」

それだけ言つてミヤビは瞬身の術で白き煙に塗れ、消える。
何とも閉まらない終わり方だが、それはそれで先生らしいと、レ
イは微笑む。

15話 Cランク任務

Dランク任務はもうやりたくない。内容は草筆り、犬の散歩、迷子を探す等々。結論から言くと、忍者に頼むものじゃないって事がわかった。要するに、下忍って位はそれほど低いつて事なんだよね。でも今回は違った！ミヤビ 呼び捨ては不味いかな、ミヤビ先生が取り計らってCランクの任務を受けてくれたらしい。内容は聞いていないけど、長期間掛かるということだ。今日十時に里外れの正門に集合との事。正門とは『あ』『ん』と書かれた大きい門のこと。そして今は少し早いので一楽に寄っている最中である。

「うん！やっぱ一楽は最高だね。少し味噌濃いめにしました？」

味噌ラーメンを食べ終わり、水を飲み干して一言の感想。

「おお！分かるか？実は少し味を変えてなあ！この違いが分かるなんてお前とナルトぐらいなもんだ！」

テウチが嬉し泣きをしながら語っている。

この会話から分かる通り、俺はもはや常連である。何とか一楽まで

のルートを覚え、迷わなくなったのだ！ アカデミーへの道は
4年間シズク無しでは迷いっぱなしだったのに？好き嫌いというの
は影響が激しいってこと。

「 そういや昨日『明日はCランク任務に行く！』って言うて
なかったか？」

テウチが真面目な顔でレイに聞く。もう9時半過ぎだ。こんなところ
でのんきにラーメンを食っていて大丈夫なのか心配している。

「ん？行くよ？10時に正門集合だってさ。あー寝足り無いわあ」

レイが欠伸をしながらそう答える。

「ならそろそろ行ったほうがいいんじゃないか？」

そう言いながらテウチは時計を見せる。するとレイの表情が見る見る
青褪めていく。

「 9時50分？ ははッ ぶっしょ？」

「

ここから正門までは2分も掛からない、だがそれは最短ルートで行けばという話。

「もう行く!!おっちゃん正門の方向ってどっち?」

決心をしたレイはテウチに問う。

「正門はあっちだ。それよりラーメン代、今日こそ払っていけよ?」

テウチは暖簾のれんの向こうを指指して言った。今日こそで分かる通り、レイはまだ一度も払ったことは無い。この時も俣然りである。

「ああ、出世払いでね!!」

そついい終わるとテウチが指差していた方向へと全速力で駆け出す。途中にある民家などは屋根の上を走って行く。

「あいつは客だが、金にはならねえなあ」

レイがいなくなった後、テウチが一人苦笑した。

<時は9分後の正門にて>

「おい！まだ超出発せんのか？」

ミヤビにそう尋ねるのは、今はとても貧しい国である波の国出身の橋作りの名人？であるタズナだ。要するに、この任務は後にAランク任務となる。

「ええ、まだ来てないんですよ。一人の馬鹿が」

頭を掻きながらミヤビが存分に『馬鹿』を強調する。

「そやそや！ちよつと待ってや！おっさん！」

本来ならナルト達が受けるはずだった任務。この任務でナルトは初めての実戦を経験し、サスケに至っては写輪眼を扱うきっかけを作る。そのことを知っているトモヤは最初は焦ったが、一つの考えにたどり着き今は切り替えている。そう、『主人公補正があるやろ』と。

「どうやら来たようですね」

二人がタズナを宥めている間、だんまりを決めて込んでいたシズクが屋根から屋根へと飛びこちらへ向かって来ているレイを見ている。

「ぎりぎりセーフ！さあ行こう！」

地面へと着地し余裕の表情で一人で門の向こうへ走っていく。

「おい！　　本当にあんなガキが一緒に大丈夫なのかよオ！」

「恐らく問題だらけですが、何とかありますよ。俺は上忍ですから

「

タズナは走り去っていくレイを指指し言いが、ミヤビの適当な返答に少し不安になる。

「シズク！」

「気付きましたか？あそこの奥の木の枝に二人、レイは気付いていたのでしょうか？」

こちらを監視している二人に気付かれないようにシズクはそつとその二人を見る。

「確実にな、突っ走って行った下忍から片付けたほうがやり易いやろ？俺達は普通に歩いてればええんや 動いたで！」

監視者達はレイを始末するために後を追う。トモヤはただの手柄の横取りだろうと気にも留めなかったが。

「おい、お前ら！さっさと行くぞ！」

何時まで経っても動かない二人にミヤビが催促する。

さあて、この辺でいいかな？俺は見晴らしのいい木の上にいる。あいつらは今は向こう木の上か、確か此処で襲ってくるのは雨隠れの中忍クラスだと力カシ先生が言っていた気がする。名前は確か鬼兄弟？だっけ？でもサスケに簡単に蹴られる中忍ってのはどうなんだろう？ミズキより弱い気もしなくもない。

「何故あんなやつから片付ける？」

「護衛は少ない方がいい、それに俺達が後で相手にするのはあの日向ミヤビだ。用心に越したことはない」

「おっさん達、何の話してんの？」

道を歩いているレイを襲う作戦を練っていると、背後からレイに話しかけられ、一瞬で二手に別れ、別の枝に飛び乗り距離を空ける。

「貴様！何故此处にいる！」

弟が兄かは知らないが、片方が道の真ん中にいるもう一人のレイを指差して言う。

「あ、あれただの分身の術。もしかして分かんなかった？」

そう馬鹿にしながらも、飛び上がりながら印を結ぶ。

<風遁・大突破！>

広範囲に強力な突風を巻き起こす。その突風はレイの前方にいる鬼兄弟を纏めて道の上へと叩き付ける。

「ぐッ

」

一人は気絶したけど、もう一人は意識あるみたいだね。ま、聞くことないから別にいいけど。そう考えながら地面へ降りると向こうから人影が数人見える。

「な、なんじゃいこりゃあ！！」

丁度今ミヤビ達が到着し、タズナが地面に少しめり込んだ状態でいる二人の忍を指差している。

「こいつらが気持ち悪い目で見てたんで始末しました！」

親指を立てながら笑顔でそう言うレイを見てタズナは思った。忍者というのはガキでも只者ではないと。

「良い所取りしやがってよオ！こいつ俺が片付ける予定じゃねーの？」

「先生が力カシ先生のポジションだともお考えですか？」

自分の凄さでも見せ付けてやろうとしていたミヤビはシズクの一言でかなりブルーになった。

「ま、その辺はええやろ？それよかタズナはん。こいつらの狙いはあんた、それは間違いないなあ？」

とりあえず、この件は切り出さないと話が進まないの、トモヤが言う。

「ばれたか、お前なら安心して話せそうじゃ。実はな、わしは超

恐ろしい男に命を狙われとる。海運会社の大富豪のガトーという男だ」

「あの金持ちのね、先生、死んだ金持ちの金って盗んでもいいの？」

真剣に語りだすタズナの話しを半分以上無視してレイはミヤビに問う。

「ん？いいんじゃないか？アジトとしている場所とかは分からんかな」

よし、今回の目標は決まったな。とりあえずおっちゃんにラーメン代を10倍返しにしよう！

「という訳でわしらは高額なBランク以上の任務を依頼することばできん」

タズナの話はまだ続いていた様だ。トモヤとシズクが聞いていたから話してくれたのだろう。

「あーはいはい分かりましたよ。Ｃランク任務として護衛しますからね」

ミヤビがそういうと、話していたタズナが笑みを受けべる。きつと『勝った』とか思ってるに違いない。

なんにしても、この任務でやることは二つある。一つはさっきの通り金を盗む。二つ目は　白と再不斬を殺さないってくらいかな？

15話 Cランク任務（後書き）

波の国へ行っちゃいました。てへっ♪

今回は特に言うことはないですね。一つ言うなら、レイの刀は左の腰に付いてます。侍みたいな感じで

16話 鬼人襲来

「もつすぐ国に着くぞ」

船を漕いでいたおっさんがそう呟く。

「波の国にはたこ焼き有るんかいな？」

「さあ？無いんじゃないの？景気悪いんだし」

不意に下らない質問をしてきたトモヤに適当にレイが答える。

「しッ　静かにしてくれ。ガトーに見つかったら大変なことになる！　それと、たこ焼きぐらいはあるぞ？」

船の後方での無駄話でたこ焼きすら無いほど景気が悪いと思われる

プライドが傷ついたのか。おっさんは後付けをした。

「 どころやら、気付かれてはいないようだな。 だが念のため、マングローブがある町水道を通る」

「お、おい！なんでもいいから 早くしてくれ 気持ち悪い」

船漕ぎのおっさんが振り返ると今にも吐き出しそうな体制のミヤビがいる。

「 全く、だらしないですね。本当に忍者ですか？」

まるで汚い物でも見るような軽蔑の眼差しでシズクが問う。

「 忍者が船酔いしないとは限らんのだよ ハッハ！まだまだ勉強不足だな！！」

無駄にカツコつけてミヤビが言うが、呆れたシズクはため息を突きながらそれを無視する。

「おい、超前言撤回する。あんな上忍で本当に大丈夫なのかア？」

「俺ら下忍が付いてます。御安心を」

「せや、あんなのが役に立つわけあらへん！」

トモヤがミヤビを指差して言うが、此処まで言われてはミヤビも黙ってはられない。

「お、お前らあ 勝手なことを」ああ！喋ってはいけません！酔いが早く回ってしまえますよ！」「うッ やめ」

シズクの良く分からない説得と腹部を思いっきり蹴られる痛みでミヤビの意識が途切れる。

「やっと静かになりましたね」とシズクがくすくす笑って言うたが、船漕ぎのおっさんが流石に残忍だと思いミヤビに少し同情した。

そうこうしている内にマングローブが沢山ある場所を進み、一つの家
の陸地に船を付ける。

「俺は此処までだ、それじゃあな。氣イ付けろよ あとこい
つは持ってってくれ」

船漕ぎのおっさんが未だに気絶中のミヤビを片手で持ち上げる。

「 まだ起きてなかったんですか。本当に役に立たない人ですね」

真顔で見捨てるシズクにお前のせいやる！っとトモヤは突っ込みかけたが、後が怖いので止めておいた。

「早く出発せんと、超夕暮れになるぞオ？」

いち早く船から降りたタズナが言う。

「トモヤ！この人持つて！」

「何で俺やねん！タズナはんは兎も角、レイかシズクが持てばええやろ？」

トモヤが当然の言い分、だがこの二人にそんな常識は通じない。

「私様な弱い乙女が大人の男なんて持てるわけないのですよ？」

「邪魔だし重いし面倒だ！」

二人は笑顔でそう言うので、涙を飲んでトモヤがミヤビを担ぐ事になった。

ミヤビを船から降ろすと、船漕ぎのおっさんは船を反転させ、急いで戻っていく。

それを見届けてから四人は森の道を歩き出す。

「よーし、わしを家まで無事に送り届けてくれよ！」

「はいはい、　　そうだ！ガトーの金少しおっさんにもやる！」

俺の景気のいい話におっさんのテンションも上がる。ま、大金持ちなんだし、10万両位ならくれてやる。　　ちなみに、この世界の1両は日本円で10円ってとこ。

「先生ホンマに邪魔や　　そろそろ起きんかな？」

肩にミヤビを乗せてぼやいているトモヤ。

その時、ブンブンを立ててブーメランみたいに首切り包丁が飛んでくる。伏せろ！とか言わなかったけどおっさんはきちんと避けていた。危機察知能力は忍並だ。

木に刺さった首切り包丁に再不斬が乗る。

「鬼兄弟は失敗したと報告があつたが どうやらミヤビを黙らせるぐらいは出来た様だな。ガキ共、じじいを渡してもらおうか」

一般人なら見ただけで死にそうな顔に目、さらにその奇抜な登場シーン。やるな、こいつ。

16話 鬼人襲来（後書き）

最近は予約掲載にしています。その方が直すのも誰も見ていない間にできますからね。人気のあるナルトの小説を見ると、お気に入り登録は大体1000件以上でしたね。私も頑張らなくては！

再不斬の登場です。本当に登場だけですがね。中忍試験終了ぐらいまでは原作よりにしたいと思ってます。やっぱりオリキャラは受け入れに時間が掛かりそうなので、原作キャラとの絡みは中忍試験からですかね？これから大体5話くらいかけて波の国編ってことで！

17話 無音殺人術

『じじいを渡してもらおうか』その一言でおっさんは目の前に現れた鬼人、桃地再不斬に恐怖している。確か奴は無音殺人術サイレントキリングとか言うの達人。

それにしてもサイレントキリングってカッコいいよね？俺も何か考えておこう。と話はそれだが、一人行動不能のミヤビ先生がいる。

はあ、この状況は面倒だ。

「素直に渡す訳ないでしょ？」

そうは言ったが、内心焦っている。奴は力カシ先生と同程度、少なくともそれに近い実力の持ち主。それにこちらには戦うことの出来ないおっさんもいる。俺の会話中にトモヤが先生を地に置く。

「ガキの割りに威勢がいいな。だが、じじいは殺らせてもらう。そこで寝ている日向ミヤビもだ！」

タズナやミヤビに目をやりながら再不斬は答える。

「そいつは危な過ぎるんでな。俺様が霧隠れの暗部部隊にいた頃、携帯していた手配書ビンゴブックにそいつの情報が載ってたぜ。俺自身も何度か見たことがある」

殺気を出しながら徐に再不斬が語りだす。タズナをミヤビのいる倒れている所まで下がらせ、三人はほぼ同位置で再不斬の話を聞いている。

「忍界対戦の最中、下忍でありながら敵という敵を片っ端から殺しまくった木の葉の兵器。日向ミヤビとな」

船酔いしてシズクに腹を蹴られて悶絶して気絶したこいつが兵器世も末だねこりゃあ。

「さてと お話は終わりだ。ガキしかいねえが、まあいいさつさと始めよーぜ。 命のやり取りをな！」

<忍法・霧隠れの術>

再不斬が刀を抜き、水面に立ちながらそう言った。左手は天、右手を口元で印を結び術を発動させる。すると辺りがどんどん霧の中に包まれていく。

「始まったみたいですね。どうします？」

「霧隠れには霧隠れやろ？此処は俺に任しとき！」

トモヤがそう言うと、再不斬と全く同じ形で印を結び、霧の中へ溶け込む。

「んー、じゃあ俺はおっさんと先生の所。シズクはトモヤの援護な」

一言そう伝えると俺は少し後方へと下がる。シズクはその場に残り、三つ巴文様の写輪眼を発動させた。

（あのガキのあの目、写輪眼か？）

霧の中にいながらレイ達の様子を観察していた再不斬。シズクが写輪眼を発動したことに多少驚いている。

「おっさんは大丈夫？」

深い霧の中、一般人が殺気に当りすぎるって危ない様な気がする。

「わしは超大丈夫じゃ、それよりお前と一緒にいた変なガキと譲ちゃん、あの二人はどうだ？」

他人の心配をするほど余裕があるように思えないが、レイは答える。

「二人は問題ないし！ あいつはこっちに来る可能性がある、姿勢、少し低くしててよ」

タズナの前に立ちながらレイはそう言い天風を右手で握る。

『8か所、咽頭・脊柱・肺・肝臓・頸静脈に鎖骨下動脈・腎臓・心臓』
さて どの急所がいい？ククッ 』

霧に隠れた再不斬が自慢げに急所8か所。狙う場所を指定する。

「どれもやだなあ、痛そうだし。 それじゃああなたにも選ばせてやるよ！ 此処で死ぬのか、 いずれ世界を取る俺の手下になるってのはどう？」

原作の再不斬なら相手を一瞬で細切れにしまいそうな無謀な提案だ。

『フッ 面白いこと言うガキだな、 だがア！』

微妙に予想とは違う反応をした再不斬が俺とおっさんの間へ瞬身の術で入り込む。

「じじいは殺らせてもらおう！」

それだけ言うと、タズナ目掛けて首切り包丁を切り下げる。

キンツと金属音が鳴り響く。

「依頼人は神様ですよ？　そう簡単に殺させはしない！」

レイが振り返ることなく刀を抜き、逆手で背後へと刀を回し首切り包丁を止める。

「ほう、随分冷静な対処だが、此処からどうするつもりだ？」

腰を抜かしているタズナを尻目に背後のレイに問う。

「こうするつもり。 シズク！」

そう言った瞬間、俺の前方から巨大な火球が迫ってくる。

「さあて、どうする？ 黒焦げになるよ？ ま、俺も含めてだけど」

「 チイ 」

舌打ちをしながら右へ大きく避ける再不斬。ところが火球は直進せず、そのまま再不斬の元へ向かう。

（ 火遁の軌道修正、こいつらは何者だ？ ただの下忍程度が出来る範囲を超えてやがる ）

再不斬が迫り来る火球を首切り包丁で振り払う。火球で見えなかった前方を見ると、巨大な水龍が姿を現す。

<水遁・水龍弾の術！>

恐らく、トモヤが霧から放った龍を象った大量の水が火球を振り払った再不斬を狙う。

「なにッ

この術は下忍が出来るような

」

自分が使う術の難易度は自分が最もよく分かる。この時もまた然りである。

距離が近すぎたため術の相殺出来ず水龍に飲み込まれ、遠くの木へと激突する再不斬。

「おっさんは此処離れちゃだめだよ？」

そう言つて俺は再不斬の元へ向かう。気になることがある。再不斬があれくらい避けられない筈がないし、火球を避けるときも瞬身の術を使えば良かった筈だ。判断ミスって言つてしまえばあれなのだが。

「これは、死んでるのでしょうか？」

再不斬の様子をいち早く見たシズク。再不斬の首元には千本が二本刺さっている。そこへ木の上にお面を付けた少年が現れる。

「ありがとうございます。僕はずっと 確実に再不斬を殺す機会をうかがっていた者です」

一礼をしながら答える白。

「あ、霧隠れの追い忍さんやな？ こいつとっと持ってってくれや」

トモヤが再不斬を適当に扱ったため、白が微妙に不機嫌になっているのが分かる。

「はい、 それでは失礼します」

再不斬の元へ移動し、背負い、瞬身の術で消える。

仮死状態になったってことは一週間は出てこない筈だから ガ
トーのアジト探そう！ガトーを殺して金を奪う、当初の目的通り。
ああそういえばガトー殺せば白と再不斬もおっさんを狙う必要
なくなるし丁度いいかも。

「あ！あまり手荒に抜かないでください。本当に死にますよ？」

乱暴に首に刺さった千本を抜く再不斬を白が止める。

「問題ねえよ、白。話を聞いてたか？」

「？ 大体は聞きましたよ。それより、どうして本気でやらなかったんですか？」

レイの予想通り、再不斬は手加減していた。というよりも避けられる筈の攻撃を避けず、さらには追撃もしなかった。

「 世界を取る。あのガキがそう言った。 くだらねーよな？ガキが見る夢じゃねえ。だが、どこかあいつに期待している俺がいた。つくづく甘くなったもんだぜ、俺も」

思い耽ながら語る再不斬の言葉を白は黙って聞く。

「しかもこの俺に手下になれたア？あの顔、それに何もかも信じき

ってるあの目。あいつに良く似てやがる」

再不斬はそう言つと、空高く見上げかつての好敵手を思い出していた。そう、月下ギンのことを

17話 無音殺人術（後書き）

ふう、毎日更新してると凄い暇人に見られそう。

と話は変わりますが、今回ついでに全話に話数をつけました。

18話 世界の王

腑に落ちないけど一応再不斬を撃退した。家に行く途中で一度町中を一度歩いた。

波の国は大名すら金を持っていない、ふとそんなことを思い町を歩くと 本当に現実とは厳しいものだ。店では頻繁に泥棒が、そこらを歩いている人は皆何かを諦めた様な目をしている。

橋の完成、それこそが国民の希望であり、ガトーが最も恐れていることなのだろう。だからこそ、再不斬の様な危ない抜け忍を雇ってまで潰そうとしているんだとはつきり分かった。

貧しいなんてもんじゃない。漫画の時は笑ってみてたけどこんな国があるなんておかしい。いや、あっちゃならないんだ。

「いやー、まさかあの桃地再不斬がタズナさんを暗殺に来てたとはな！三人とも、良くやった！」

つい先ほどまで寝ていたミヤビだが、家に着いたとたんに目を覚ました。可愛そうな事に少し記憶が抜けているらしいのでシズクが適当に教え込んだ。

「先生の教えの賜物ですよ」

サスケが居たならば卒倒してしまいそんな笑みを浮かべ、平気で嘘を付くシズク。

「あんな強い忍者を倒したんじゃ、暫くは安心じゃろう!」

万遍の笑みでそう言うタズナ。

「ん?でも生きてるよ?あいつ」

欠伸をしながら言うレイのその言葉を聞きタズナは驚愕を露にする。

「で、でもその人は死んでたんでしょ?」

立ったまま話を聞いていたタズナの娘のツナミがタズナに代わって

聞く。

「あれは多分仮死状態にただけやな。一週間は動けん筈やし問題ないんちゃう？」

「お前ら、何で止めを刺さなかったんだああああ！！」

「五月蠅いです！過ぎたことをグチグチと！！」

シズクの一喝によりミヤビは黙る。 もうこの人には威厳なんてものは欠片も見当たらない。ま、最初からそんなになかったけど。

「と、言う訳で一週間あります。俺達が探しますってことでご安心を」

ニコッと笑うレイのその言葉を聞き、タズナとツナミがホッと胸を撫で下ろす。

「安心なんて出来ないよ」

そう聞こえたドアの方を見ると一人の少年が立っていた。

「イナリ、挨拶なさい。おじいちゃんを護衛してくれた忍者さん達だよ!」

ツナミがそう言うが、気にせずにこちらを凝視している。

「こいつら死ぬよ　ガトーに齒向かって無事で居られる筈が無いんだ」

指を指しながら訴えるイナリ。非情に暗い!その一言に尽きる。子供がこんなこと思わずには居られないほどガトーが与えたショックは大きいんだと悟らされる。

「俺らを甘く見たらあかんで?」

トモヤが自信満々にそう言うが、まだイナリは暗い表情をしている。
ふう、仕方ないな。

「俺はいずれ五大国を纏め上げ、世界の王になる男だ！こんな所では死なないよ？」

と俺は前々から思っていた夢？を高らかに宣言した。これには他の人が驚くのは分かったが、シズクとトモヤも絶句している。
よし、これからはこれをキャッチコピーにしよう！

「バツカみたい！なれる訳ないだろ！！」

「何処へ行くんじゃない？イナリ！」

タズナの言葉も聞かずに走り去るイナリ。

「あらら、行っちゃったな。つかレイ。あれマジか？」

頭可笑しいんじゃないかねえか？と言った表情で俺を見ている先生に軽い殺意を覚える。

「ええ、マジです！結構前から決めてたんですよ」

「おもしろいじゃん！俺も手伝ったる！」

「じゃあ早速頼まれてくれる？ 勿論シズクもね」

俺達の様子を見ていたシズクがやれやれと言った表情をする。

「その辺はいいんだが、明日からはガトーのアジト探し、ちゃんとやってもらうぞ？ ツナミさん、晩飯を宜しくお願いします！」

気絶してたこの人のどの口が言うんだかね？

「ええ、ちょっと待っててくださいね」

意地汚い先生の言葉をきちんと受け取り、台所へ向かうツナミ。

「すまんのう

昔はもつと笑う子だったんじゃ

」

徐におっさんが言う。確かイナリは父親？がガトーに公開処刑されて変になったんだっけ？　ならガトーが死ねばいいのかな？そんな単純じゃない気もしくもないけど

「ホンマか？

ところでたこ焼き屋って何処にあるんや？」

トモヤの空気の読めなさに苦笑しながらも、タズナはきっちりたこ焼き屋の場所を教えた。

ガトーのアジト。そこに今回俺の求めるものがある。

18話 世界の王（後書き）

19話更新です。今回は文字数が少ないですが、次話からはもっと長くなります。 それにしても今回はグリード的な部分がちらつと出てきました。そろそろ皆さん気付いたんじゃないですか？私がハガレンも大好きなことにww

祝！お気に入り登録400突破！！ ボルテージが上がりまくります！これからも頑張るんで、応援よろしくお願いします！

19話 スカウト

翌日、俺達はガトーのアジトを探すことになった。と言っても一人置いていくのだが

「　　って何で俺が留守番なんだよお!?!」

タズナ家の玄関にて、置いてきぼりにされる男。ミヤビがそう叫ぶ。

「　　先生は邪魔だからです」

ミヤビの悲痛な叫びはシズクの一言で粉碎する。

「　　こつ言っんは子供の方が動き安いんやて」

玄関の隅でガックリと頂垂れているミヤビの肩に手を置き、慰める
トモヤだが、こいつも内心は来るな！って感じだとは思う。

「先生の仕事は皆さんの護衛。でもガトーにまだ凄い手下が
いるかも知れないし、凄腕の忍者に頼みたかったんだけどなあ」

「

妙に凄腕を強調して言ったレイの言葉を聞き、ミヤビはピクツと動
く。

「仕方ないか。トモヤかシズクを置いて「ハッハッハ！そう
言う事なら先に言いたまえ！」じゃあお願いしまーす！」

何とか快く？引き受けてくれたか。これで邪魔は消えた。

結局は全員、ミヤビを邪魔者としてしか見ていない様だ。

「んじゃ、頼みましたよ？」

レイがそれだけ伝えると、三人は外へ出て戸を閉める。

「やっとあいつらは俺の力を認めたかあ！そーかそーか！」

頷きながら一人で勝手に納得しているミヤビ。彼は残念な扱いしか受けていない。もはや煽てれば良い、という位置づけになっている。
っている。

「そーいや昨日イナリ君が怒鳴ってたな。仕方ない、凄腕の俺がフォローを入れてやる！！」

余談だが、この後調子に乗ったミヤビが、海を眺めていたイナリに話しかけるが、何度も無視されたそうなの

「町へ来たのはいいのですが

」

人ごみの中、シズクは頭を抱えている。家を出て数分。即ち問題が発生した。一人、迷子が出たのだ

本当に彼は良く分かりません。とても頭が良さそうに見えるのに方向音痴。戦いを面倒と言うのに強さを求める。理解するのは時間が掛かりそうですね。

「探すんは多分無理やろ？　かと言って待ってても来る筈ないやろなあ」

トモヤもシズクと同様に頭を悩ませている。もはや彼に会うには成り行き任せに他ならない。

「　とりあえず、一旦戻りますよ？」

「　やっぱりそれしか無いんやな。しゃあない、今日は戻るか？」

ほぼ共通の結論を出し、歩き始める二人。今回は無線を持ってはいない、と言うよりも持つていても使える範囲に居なければ意味が無いのだから諦めるしかない。

ガトーのアジトか 何処にあんだろ？その前にこんな所にアジトなんてある訳ないよね？

未だに二人が居ないことに気付いていないレイ。彼はひたすら真っ直ぐに木の枝から枝へ飛び移りながら森を直進している。

「なあシズクー、この辺に あら？」

振り返りシズクに何か問おうとした時、レイは思わず絶句し足を止める。後ろにはシズクは愚か、トモヤすら居なかったのだ。

「ふうー、もう飽き飽きだ！」

不満を撒き散らして見るも、何一つ帰ってこない。完全無欠な方向音痴。これは忍にとつては致命的だろう。本当の話、地図でもあれば何とかなるのだ。

「あーあ、白眼でもあればなあ」

無いものねだりを呟きながら再び枝から枝へと飛び移る。進む他道が無いからだ。

風遁使つて森を吹き飛ばす　駄目！自然は大切に。木を切り刻んで進む　変わらん！口寄せ　そんなものは使えん！
結果、町を発見するしか方法は無い！

打つ手無しとは正にこのことだろう。自力で進む他は無い。そう考え、前へ前へと進むこと数分後。

「ん？これは？アジト？　　って感じじゃないよなあ？」

レイが見つめる先には奇妙な家がある。どの辺が奇妙かというと、まずは形だ。もう円錐と呼んでもいいくらい見事だ。次に場所。辺りを木で囲まれた平地の真ん中にある一本の大木を軸にしているらしい。ガトーがいる気はしないが、何か手がかりがあるかも知れないと言う事で入り口を探して中に入る。

「　　再不斬さん、具合はどうですか？」

少女に見えるほど美しい少年が、椅子に座りながらそばにいる今はほぼ寝たきりの再不斬に聞く。

「まだだ。流石に仮死状態からだ、一日やそこらじゃ回復はしねえか」

レイが見つけた怪しい建物の中にいた白と再不斬の会話。

「でも再不斬さんは凄いです。常人ならまだ喋れませんか？それに手足も少しずつ動かせるようになってるじゃないですか」

白が言いながらくすくすつと笑う。

「んーと、此処かな？——失礼します！」

刀を肩に当てた状態でドアを蹴り開け、入ってくるレイに白は千本を持ち、一瞬で身構える。

「！ッ、君はあの時の！」

彼は再不斬さんと戦っていた　　もしかして、再不斬さんが死んでいないことを見抜き、殺しに来たのでしょうか？でも僕を見てからも彼は殺気を出さない　　彼は一体？

「なんだ、ガトー居ないの？」

「　　おい、ガキ。なんの様だ？」

再不斬さんは彼を見て、唯一素早く動く右手でクナイを構えている様ですね。　　油断はできません！

「あれ？ザブさんじゃん！」

そう言いながら刀を鞘へ仕舞うレイ。一方再不斬はレイの一言に青筋を浮かばせている。

「ザブさん??彼は何を――?」

再不斬さんに聞こうとしたのだけれど、再不斬さんも状況を把握していない見たいです。 僕の思考も追いつかないほどの何かが起きているのでしょうか?

「ガキっ!もう一度聞くぞ?何の様だ!」

再不斬はさっきより怒りを三割増しにして再度問う。

「えーと、ガトーって親父を探しに来たんだけど知らない?」

「聞いてどうするっ?」

「勿論殺す♪そして金を奪う！」

笑みを浮かべながらガッツポーズし、そう答えるレイに、警戒しているのが馬鹿らしく思ったのか、再不斬は大声で笑い出す。白も警戒心を解いている。

「お前は本当にガキかあ？考えることがえげつねえなあ」

たっぷり二十秒ほど笑った後に再不斬が未だに笑みを浮かべながら問う。

「ま、もう一つあるんだけど——一度言っただけで俺の手下にならない？」

と言うよりもなって貰わなきゃ困るんだけど。

「本気でこの俺を下につけるつもりかあ？」

「勿論！本気も本気。力も申し分無い。それに貴方は抜け忍だ、断ればどうなるかな？」

刀を抜いてちらつかせながらちよつとした脅し。ま、そんなの無くても来てくれるだろうけど一応念には念をつてやつ。

「俺を脅すか？ 面白い乗つてやる」

何とかザブさんを引き入れることには成功した。白も来てくれるとありがたいんだけど、どうだろ？

「あの、なら僕も宜しいですか？」

「えっ！君は確か白君だっけ？い、いいよ勿論！」

白の申し出に言葉を詰まらせる。流石ザブさんの武器になりたいっなんていう訳だ。白は白でどうして名前を知っているのか疑問に思ったが、再不斬の一言でかき消される。

「おい、組織の名はなんだ？」

不意な再不斬の問いに訳が分からないって言った顔をする。

「組織って？」

「お前が此処に来たのは誰かの差し金だろう？」

いきなりのザブさんの勘違い。うーん、なんて説明しようか？

1、俺が親玉でーす！^{リーダー} 呆れられる。ただのガキの口車に乗るほど甘い相手じゃない！

2、実は今はいないんです！ 何かこの人がトップになりたいとか言いそうだから却下！

3、俺は。。。の使いの者です！ おっと！一番じっくりする。これで行こう！組織名は よし、決めた。

「いやあ、ばれましたか？実は俺は最近出来た組織『真王^{まおう}』の使いの者でしてね」

ちなみに真王って名前は、偶然浮かんだリンのブラッドレイに言った『貴方は真の王にはなれない！』から取ったのだったりする。

「真王？聞いたことない組織ですね」

白が真剣に考えている。それはそうだろう。今作っただけだから。

「ちなみに、頂^{トッ}点の名は秘密ですよ？他言禁止なんでね」

その言葉を聞いたザブさんがチィと舌打ちをした。そのままドアの方へ歩いていこうとしたが、そういやガトーの居場所っていつ当初の目的を忘れて帰るところだった。

「ザブさん、ガトー何処にいる訳？」

「さあな、あいつは仕事の時だけ連絡を寄越す、後は奴の気まぐれだ」

ザブさんと言う名はもう定着した。と、それよりどうやら接触は難しそうだなあ
原作では橋で戦ってる最中に来たし
あ、
そうだ！

「物は相談なんだけど、ガトー殺したら困る？」

「あいつが死んだ場合は、俺の存在を霧隠れに伝える様に部下に言うてあるそうだから俺達はいいつを`まだ`殺せないがな」

フムフム、部下が知らせるか なら、いい案がある！

「ちょっと二人とも、作戦がある！一つ頼むよ」

二人にある作戦を説明した後、レイは何とかしてタズナ家へたどり着いた。作戦の実行。それは約一週間後。

19話 スカウト（後書き）

何だかんだで20話です。今までは、と言うか中忍試験までは原作に乗っかってこうかと思っています。自分的には一部と二部の空白の三年を早く書きたいなあと思ってます。

番外編？（前書き）

今回は軽い日常辺です！

番外編？

これは波の国に行く少し前のお話。

部屋で久々にのほほんとしていた所、ガチャン！と言う何か割れたような音を聞き、一階へと降りると放心状態になっている父さんがいた。

「
いいか？これはシズクには知られてはならないぞ？」

何時もはチャラチャラしている父さんの真剣な眼差しを見る。

さらに父さんの足元に落ちているうちの家紋が入っている花瓶が見事な位家紋以外の部分は木っ端微塵、それとそれに刺さっていた薔薇。

幸い？シズクは母さんと共に買い物中。ってか俺はこの件には全く関係ないのだが？その辺はどうなのさ？

「あーあ、それってシズクが持ってきた奴でしょ？ やっちゃったね父さん。 じゃ俺はこれで——」

待て！—と言っ声と共に肩を掴まれる。

「何か？」

「現場を見たお前は既に共犯だア！ 逃げられんぞオ——！？」

振り返ったレイのこれでもか、という冷たい視線を感じつつもギンは切り出す。

その答えを聞いたレイがはあ、とため息をつく。

「 で？ 具体的な策は？」

「なあい！ だから考えて下さい——！！」

華麗に土下座を繰り出す父を見ると、もはや哀れとしか言いようがない。

それにこんなになった物を直す手段？そんなものあるのだろうか？何にしても風遁じゃ話にならないのは確かだ。

「仕方ない。当てがあるから多分大丈夫」

その言葉を聞き、ギンの目に光が宿る。

花瓶の欠片を拾い集め、風呂敷に包む。当てがあるのは確か。でもたどり着けるかどうかって問題があったりする。

「じゃあしぶしぶ行って来まーす」

「で、出来るだけ早く頼む！」

部屋の墨で未だにブルブルと震えている父を尻目に早速出発する。
それほど時折見せるシズクの裏は恐ろしいものだ。 うっ、考
えただけで寒気がする。

べ、別に家に帰ってきた瞬間に無数のクナイが飛んできたり、朝起
きたら頭が外に出ていたりする訳じゃないんだからな？

「 兎に角、行つて見るかな？」

一人そう呟くと素早く地を蹴り、屋根を走る。 きつと何とかしてく
れる。 そう言った期待から来ているのだろっ。

「今日も買い物付き合ってくれてありがとうね、シズクちゃん！」

大量の袋や箱を持った状態でアカネさんが私にお礼を言っている。

勿論、私もかなりの量を持たされているのだけれど

「いえ、私は居候の身ですからね。これぐらいは当然です」

シズクは笑顔でそう返す。それも当然、以前シズクを預かっていたおばさんが亡くなった後、もう誰も現れないとさえ言われていた。それもそうだろう、イタチは一族を裏切った。そんな一族の末裔を養うほどに木の葉の住民はお人好しでもないのだから。

「居候ねえ、それにしてもレイとの仲が怪しいんじゃない？」

「なっ、い、いきなり何を言っんですかっ!!?」

アカネのニヤニヤしながらの問いに赤面しながら否定するシズクだが、アカネにはむしろ肯定に聞こえる。

「そう?」

「そうですっ!無関係!あんな人は関係無いですっ!」

毎回の事ながら、何故アカネさんはこの話をネタにするのでしょうか?分かっていながら過剰に反応してしまう私も一体

そう考えると、シズクは深く、そして意味有り気なため息をつく。

「あら?レイ?何やってるのかしら?」

屋根の上を走る息子を見ながら、アカネは首を傾げる。と同時にまたも良からぬ事を考えている様子。

「んーそうねえ、レイはまた迷子になりそうだし、付いて行ってくれる？」

「ええ、でもお荷物が」

あの人の何時もととは違う、真剣な眼差しが見える。
気にならないと言えば嘘になりますね

「そんなのは良いから、言ってきなさい！」

何気に命令になっている発言を聞き、行かなければならないという使命感に襲われるシズク。

「わ、分かりましたっ！」

荷物を手早く置き、もう通り過ぎているレイの後を追うように飛び去る。

「これは面白くなりそうねえ
♪」

屋根から屋根へと飛び移るシズクを見ながら、アカネは静かに微笑した。

「何とか着いたか」

俺は今、日向家の前にいる。勿論、当てとは先生ではないよ？

そう考えながらもインターホンを押す。そっぴや日向に来るの初めてだっけ？身分証明とか要るのかな？

「ど、どちら様でしょうか!？」

門の奥から何故かビクビクした様な声。これはヒナタだね、間違いない。

「もしもし、ヒナタ？レイだけどちょっと中に入れてくれない？」

「えっ！？レイ君？う、うんちょっと待ってね！」

そう言つと門がゆっくりと開く。どうしても良いけどこれは押しボタ
ン式なのかな？それとも手動？

「まさか日向に用事？一体なんなのでしょう？」

その様子を遠くから見ていたシズクがそつと呟く。

「いきなりで悪いんだけどヒアシ様いる？」

それを伝えるとヒナタはあたふたしている。

本当にいきなり

すみせんねえ。

「ち、父上ですかっ！？も、勿論ご在宅です！」

勿論って付けると凄い暇人っぽいからやめたほうがいいんじゃないかなあ？でもそれをヒナタに言つとまたあたふたしそうなのでやめておこう。

「そりゃ良かった。面会って出来るかな？」

「うん！大丈夫だと思う　多分」

妙に自信なさ気なヒナタを無視してスカズカと勝手に日向家へ足を踏み入れる。

「あ、でも今父上は今「大丈夫大丈夫！」ま、待ってよ！レイ君！」

とつとと先へ向かおうとするレイを必死になって追うヒナタ。

そう、彼女は必死だった。自分の開けた門を閉めることすら忘れるほど。

「どうしましょう？入るべきか入らぬべきか」

開けっ放しの門の前で腕を組んでシズクが悩んでいる。

『れ、レイ君！そっちは駄目っ！！』

『あー間違った！じゃあこっちな？』

中からの楽しそう？な声を聞き、シズクは乗り込むことを決意する。

「こ、これは調査です！うちはと同等以上の古い歴史を持つ日向の調査。断じて不法侵入などではありません！」

言葉で自分を騙し、意気揚々と日向本家へと侵入する。

なんだか騒がしいな、何かあったのか？

前では弟のネジが日向流の構えからの柔拳を何発も打ち込んで来ている。

「てえいつ！」

最近思うんだが、この掛け声はどーなんだ？俺はハア！とかの方がカッコいいと思うんだがなあ。

そう考えながらミヤビはネジの掌底を避け、腹への掌底を寸止めにする。

「今日の稽古はこんなもんか？」

「はい！ ところで兄さんが担当になった下忍にトモヤがいるというのは本当ですか？」

「ああ、いるぞ！ついでにうちの小娘と月下のガキもなあ！」

そのことを聞き、ネジは嬉しそうにしている。

無理もない、ネジが出来た初めての普通の友人だからな。

それにしてもあー思い出しただけで悲しくなる。

あのサバイバル演習の日、何故あんなに無防備に話をして仕舞ったのだろうか？

お陰で鈴を取られ、さらにはあいつらからの尊敬の眼差しなんて微塵もない。

「そ、そっちは今ネジさんとミヤビ兄さんがっ！」

ヒナタの声が聞こえたかと思えば、ガラガラと音を立て、修練場のドアが開く。開けた奴は 噂をすれば何とやらか？

「お、ミヤビ先生じゃないですかあ？」

わずかな笑みをミヤビに向けたレイが言う。

「ってお前は何してんだ？つーよりどっから入った？」

「ヒナタが簡単に入れてくれましたよ？」

「え！？で、でもそれはレイ君が」

「へえ、家内に入れた君よりもお客様が悪いと言うのかね？」

まず良い悪いの問題ではないのだが、レイの良く分からない言い分にヒナタは顔を赤くし、もじもじしている。ネジに至っては展開に着いて行けずに啞然としている。

「んなこたあどーでもいい！それより何の用で来たんだあ？」

「おっと！そうだった。先生！ヒアシ様は何処ですか？頼みたいこ

とがあるんだけど？」

話しが終わらない気配を感じ取った先生の問いに当初の目的であったヒアシ様の居所を尋ねてみる。

今更ながら、俺はこの世界の偉い人にはきちんと様やさんを付ける様になっている。

ヒアシ様！？という日向家の当主。そんな人に頼みたいことがあるなんて、どんな用事なのでしょう？

一人、屋根裏で様子を伺っていたシズクは思考をフルに使い、レイの不可解な行動の先を読もうとしていた。

「 月下レイ、か 何のようだ? 」

座禅状態でそう冷たく言い放つのは日向家当主である日向ヒアシ様だ。

先生に聞いてようやくたどり着くことが出来た。

本来ならヒナタに聞けば良かったのだが、あの困った顔を見るともつと困らせて見たくなっちゃった訳で! と言うか何で名前知ってるんだろう?

「はい、ヒアシ様を見込んで、一つ頼みがありましてね」

ニコニコと愛想を振りまきながらの話し方にシズクは天井裏で苦笑

している。

「 ほう、私に頼みか 何だ？話してみる 」

なんて言うかあれだね、超堅物なキャラだ。とそう考えながらも、
今までポケットに突っ込んでいた花瓶の欠片が入っている風呂敷を
降ろし、中身を見せる。

あれは花瓶の！ 読めましたよ 帰ったら覚悟しておくこと
ですね！

屋根裏で一部始終を見ていたシズクは笑みを浮かべながらレイを眺め
ている。

殺気！？ど、何処だ？ 勘違いかな、左右上下を見渡すが、そ
れらしき人物はいない。それよりも今はヒアシ様にこの件をどうに
かして貰わねば！

「単刀直入に聞きましょう。これと同じのありません？」

その言葉を聞き、ヒアシ様は大分呆れているご様子。俺だつて薄々気付いてたよ？日向にうちのは物があるわけないって事ぐらい。でもこの人は木の葉にて最強の日向一族の当主なんだよっ？何とかしてくれると思つたって良いじゃないか！！

「はあ、やっぱり無いんですね？」

「そんな物はない！　　と言いたいが、確か倉庫にそれらしき物が一つあった。持つて行け」

あなたは神だ！『日向は木の葉にて最強』とか言う癖に何で戦わねえんだよ！とか思つてたけど、なるほどっ、なんとなく分かったよ。あなたは木の葉に無くてはならない存在だつて事が。

「でもこれはないんじゃないのかなあ？」

倉庫に着き、大量のダンボールが積み上がっている状態。倉庫と言っても、流石は日向家、相当な広さだ。

此処から探す？ご冗談を、ヒアシ様に聞いて来よう。
そう思い、外へと向けた足が偶然に一番下層のダンボールへとぶつかり、雪崩の様に崩れる。

「だ、誰かいないのかなあ！！」

ダンボールは普通に重い。両手も塞がり印も結べない。しかも俺の

悲痛の叫びは誰にも届かなかった様だ。 っ てこれ詰んだんじゃないの！？死ぬ！忍とか戦争とか全く関係ない所で死ぬのは嫌だあ！

そんな意思が通じたか分からないが、僅かに足音が聞こえる。先生？ネジ？ヒナタ？ヒアシ様？ 誰でも良い、それよりも――

「助けて下さあーい！！」

世界の中心で愛を叫ぶが如く、ひたすらそう連呼した。すると開けっ放しの倉庫のドアから漏れる光がこちらに届く。ダンボールを除けてくれているみたい。

「 全く、貴方は本当に人騒がせですね」

声の主、それはさっき考えた誰でもない。何時も聞く、そしてこれからも聞いて行く声。

「シズクさん？何故に此処にいらっしゃるのです？」

ダンボールの間から顔を除かせる状態でシズクが現れた事に助かる喜びと、ばれたんじゃないかと言う恐怖に駆り出される。

「私が何処にしようと私の自由です」

だ、そうです。

「ああそうですか、兎に角これ除けてくれない？ あとダンボールの上に乗らないで 重い 」

その一言でシズクはさつと不機嫌になる。不味い、怒らせた？ああ、助かる希望が失せて行くう！

「本来なら此処でほうって置きますが、仕方ありませんね」

そう言う一人、ダンボールを除けていく。

「貴方は何時も人に迷惑を掛けすぎです！デリカシーに掛けますし、人の意見を容易くは受け取りませんし！」

ちよつとしたお説教です。毎度の事で慣れっこだったりする。

スラスラと台本の様に俺の悪い所を言うシズク。

少しそうしているとようやく腕を動かせるほどの重さになった。腕に乗っているダンボールは二、三個と言った所だろうか？よく見えないけど。

「ゆっくり、落ち着け俺！ よし！抜けた！」

「あ、あまり揺らさないで——」

下さいと言おうとしたシズクだが、腕を抜いた時の振動で前へと倒れこむ。

ガンッと鈍い音がしたと思えば、レイの額にシズクの頭が突っ込む様な形で落下する。

「こ、これは何の冗談ですか!？」

そう聞いたときには既に遅い。全く警戒していなかった額への一撃。それはレイを気絶させるには十分な威力だった。

「引きずるのもあれですし、此処は」

考えた結果背負うほかないと思ったのだらう。徐にレイを背負い、日向家を後にし、我が家へと歩き出す。

きつと花瓶を割ってしまつて代わりを用意しようとしたのでしょう。
あんな花瓶なんてどうでも良かったのに

そう考えていたものの、割ったのがギンだと知れた瞬間、彼の安否
を知るものは居ない。

番外編？（後書き）

今回は番外編にしては長かったですね。本当にこれは番外編なのでしょうかね？過去編としても良いかもです。何にしても感想お待ちしております！

20話 完全犯罪

『襲撃の用意は良いか！

おい！再不斬！聞いてんのか！』

簡単な無線機からのガトーの連絡を小船に乗っていた再不斬が踏みつけ粉々にする。

「あいつの話しだと、これでいいんだろ？」

「え！？踏み潰せなんて言っていましたっけ？」

白のそんな疑問を気にするなと一蹴りする。

「これでガトーが来るんでしょうか？」

少し心配になった白がそう呟くが、再不斬はそれを聞いてはいなかった。

俺は只今水面歩行で海のと真ん中にいる！簡単なことだけど、船が沈没するのに理由なんて無い訳で。不慮の事故として扱われる筈、なのでとても泳いでは陸に着けないほど距離が離れたところで待ち伏せ中。此処まで来ると、正規の歴史？何それ？状態になる事はもう覚悟している。

「 暇あ 」

一人な事と、周りを見渡しても海しか無いという現実。はつきり言
って暇。それ以外の言葉は出てこない。

あーあ、ザブさんと白も連れて来れば良かった。この際先生でも可
さっさと済ませて帰りたいなあ。

そう言えば、イナリに何にも干渉してないけど良いのかな？ 思えば
此処に来た瞬間からもう原作なんてグチャグチャじゃん。それにナ
ルトやサスケはどうなってんのかな？

先へ先へと物事を考え、少し いやかなり面倒になって来たと
感じているレイ。

んー組織を創ったのは良いけど、数少なすぎるしねえ。他の里から
の引き抜きとか無理っぽいしなあ。

あ、その前に大蛇丸に殺されたら全く持って話にならなくなっちゃ
う訳で。

あれ？大蛇丸って俺を殺そうとしてるんだっけ？分かんなく
なってきた。

そうこう考えている内に、前から謎の武装集団が大量に乗り込んで
いる船が近づいてくる。

「　　チツ、橋が全然壊れてねえじゃねえか！　　やはりあいつらもろとも始末するしかないな　　」

双眼鏡で橋の様子を見て、未だに原型を留めたままであることを怒りを漏らすガトー。

「ボス！あれを　　」

「な、なんだ！あいつは！」

一人の手下が指差す方向に目をやると、水面の上に立ち、天へと刀を向け、振りかぶる少年の姿が見える。

<風遁・カマイタチの術！>

振り下ろされた刀からの刃状の風が、船を縦に切り裂く。
船が沈むぞ！とか化け物だ！とか聞こえるけどスルー。

見ていると、ガトーだけは積んであるボートで逃げようとしている。

部下を置いて逃げるとか、どうしようもないなこいつ

「ひ、ひい！ば、化け物！近寄るなあ！」

ガトーが杖を振りながらじたばたする。哀れだ、悪党の最後っつぱり哀れだ。

「残念、あんたにも少しでも善意があったら、金を奪っただけで勘弁してやったのに」

それだけ言々とレイは天風でガトーの首を跳ね飛ばす。首から血が綺麗に飛び散る。

よし、証拠隠滅だ。ボートを逆様にし、体ごと沈める。

えっ？初の殺しがあっさりし過ぎだって？流れとか勢いでどうにかなるんだよ。

向こうの船も大方沈んだみたいだし、橋の下に居るザブさんの所に行くか。

鞘へと血塗れた刀を仕舞いながら、早足で橋の下へ向かう。

「と、言う訳で始末したよ？」

橋の下の小船で一部始終を話したら、ザブさんは呆れ、白なんか目を瞑りガトーの冥福を祈っている。

何？俺が悪いんですか？あーそうですか！

「小僧、どうやらお前の言っていた事は本当だったようだな

」

いつの間にかガキから小僧に昇格です！

「まあね、それより君らに頼みがある！」

「僕らに頼み？」

「簡単な事だよ？組織の名を広めてもらいたい。
とか立てないでよ？」

でも悪い噂

「はい、再不斬さんも分かりましたね？」

白の脅迫気味の笑顔を受けたザブさんが押し黙る

ってザブさ
んはこんなキャラだっけ？

「そんじゃ頼みましたよ？」

とつと帰ろうとすると、ザブさんに止められる。

「おい、お前の名は何だ？」

徐にザブさんが言う。あ、そう言えば言っ
てなかったね？

「あー言い忘れてたね、名前は月下レイ。只の木の葉の下忍です！」

月下、それを聞いた瞬間にザブさんの表情が変わる。

「月下だと？ギンの倅せがれか！？ あの野郎ガキなんて作って
やがったのかあ？」

「ザブさん、父さんと知り合いな訳？」

「腐れ縁だ、気にするな」

少し迷った表情のザブさん。白に目を向けても、首を横に振られた。

どうやら良いたく無いようですね

みたいだね。ザブさんの過去なんか詮索しないけどね

「おい！聞こえてるぞ？」

おやおや、鬼人さんは地獄耳みたいです！つと油を売るのはもう良
いかな？そろそろ帰らせてもらおう。

「じゃあ先ほどの件、きちんとお願いしますよ？」

それだけ伝えると、俺は水面から飛び立つ。そういえば組織の目的
は 戦乱の世を終わらせる？とかでいいかな？ちなみに、ガト
ーをあつさり殺してしまったので、アジトの場所も分からず、金が
ゲット出来なくなったのはまた良い思い出。

20話 完全犯罪 (後書き)

21話更新。波の国とつとと終わらせて、原作絡みの中忍試験書き
たい！！

21話 帰還

ガトーを殺してから3週間、とうとう橋が完成した。

ちなみに、ガトーカンパニーの船の一部が流れ着いたとかでか
なりのニュースになってたけど、俺のせいじゃない よね？その
せいで一度橋作りが中断してしまっただけで時間が掛かってしまっただけ、
決して俺のせいじゃない！

橋の名前はタズナ大橋になった。一番の功労者って事での町人から
の推薦だね。

イナリの方も、先生の馬鹿のお陰で大分元気になったらしいし、
そして今は木の葉へ向かって歩いている。

「いやー波の国のたこ焼きも馬鹿に出来んわあ」

「にしても食い過ぎ。栄養片寄るよ？」

こいつのたこ焼きへの執念は何処から来るんだか、しかも今現在も食い続けてる。 胃袋も金銭もどうなっているのだろうか？

レイは未だにたこ焼きを頼張っているトモヤに冷ややかな視線を向ける。

「関係あらへん！たこ焼きの為なら俺は死ねるで！」

自信満々に言い放つが、誰も何の反応も見せない。只単に呆れている。

「 それにしても、船が沈没とは。運が良かったですね」

シズクのこの発言からわかる通り、ガトーの事は話してない。勿論白とザブさんについても誤魔化して誰にも言っていない。むしろ其れが最良だと思っている。

「あ、今回の報酬って上がるの？」

船の沈没の話から離れたかったレイは無理矢理話題を変更する。

「まあ、忍との戦闘があつたからにはBランク設定にはなるが、波の国の財政が財政。恐らくは報酬はCランクになるんじゃないか？三代目なら融通効かせるだろ」

「これだけの長期任務でCランクの報酬ですと、物足りなさを感じますね」

シズクが溜息混じりにボソッと呟く。時々頭を押える素振りを見せている。

「忍は金だけで動くんじゃないやねってこつたあ！ガハハハッ！」

大笑いしながら一人木々に挟まれている道を暴走するミヤビに暖かい視線を向けるものはいない。皆凍てつく様な冷たい目を向けている。

「あれやな。先生ってあーやってるとホンマに雑魚っぽいんやがなあ」

「あんなユニークな阿保が一人ぐらいいないと面白くないでしょ？」

木の葉の上忍つて言うと、紅先生以外は何かとギャグ過ぎる気がする。紅先生には絶対にギャグは通じないオーラを感じる。そんな人がアスマ先生とくつつくんだから、世の中は不思議ですよ？別にアスマ先生を馬鹿にしてる訳じゃなく。

「下らない話をしている間に着いた様ですよ？」

彼女の視点では、俺とトモヤのツーショットトークの殆どが下らないだろう。

逆にトモヤとシリアスな話をする方が無理だろうけど。

話を戻そう。シズクが指差す方向には、木の葉の正門がある。

先生はもう着いたんじゃないかな？

「やっと帰って来たぞお！我が故郷に！」

ミヤビが一人正門の前で叫ぶ。

「ミヤビ上忍？下忍の子達はどうしたんです？」

門の前で両手を挙げ、叫んでいたミヤビに黒髪で丸メガネを掛け、ちゃんとベストを着たいかにも真面目です！な中忍と思われる一人の忍が冷静な突っ込みを入れる。

「あ、そろそろ来るんじゃないか？」

あ、忘れてた！と言う様な軽い返事に『何て適当なんだ』、と中忍が三人に同情の念を抱いていた。

「ところでミヤビ上忍！火影様がお呼びですよ？何でも中忍選抜試験の推薦の件で」

本来は鳥を見て上忍が集まるのだが、彼は今まで長期任務に出ていたでその存在を確認していない。

「ってもうそんな時期か？時が流れるのは早いもんだ」

それだけ言っと、瞬身の術で火影亭へと向かう。

「やれやれ、あの人が担当となると、部下は大変そうだなあ」

「 本当ですよ、何か恥ずかしいエピソードありません? 」

「 ああ、あるとも! ミヤビ上忍はね、昔紅上忍に き、君達
はっ! 」

眩きに返事が来たことに疑問に思った中忍が振り替えると、そこにはミヤビの部下である、月下レイ、日上トモヤが聞き耳を立てていたのだ。

「 どーやら、ネタがある見たいやなあ 」

「 教えて下さいよお、先輩イ? 」

ニヤニヤしながら問いただす二人を見ているシズクが、分かりやすく大きな溜息をした。

「
ほう、今年は新人^{ルーキー}が揃ったようじゃな？」

ミヤビ、カカシ、紅、アスマの順に中忍選抜試験へ推薦したことに
より、心無しか嬉しそうな火影。

何故か今回はイルカが止めに入らないが、それは皆が優秀だからだ。

「なんだよ、カカシン所も出すのかあ？止めといた方がいいんじゃないか？」

ミヤビが業とらしくカカシを煽る。

「ま、うちの奴等は出さなかったりしたら五月蠅い奴が二人いるし、お前の所の奴等より強いよ。あいつ等は」

ミヤビの挑発を軽くカウンターするカカシ。どうやらそれに耐えられる程ミヤビは大人ではないらしい。

「なあに？言ってくれるじゃねえか！」

いきなり柔拳の構えになるミヤビに冷たい視線を浴びせ続けるカカシ。ガイは『青春してんなあ』と一人で盛り上がっている。

「止めんかミヤビ！」

火影の言葉により我に帰ったミヤビは構えを解く。

いくら日向の分家と言えど、此処まで人を敬わず、喧嘩を吹っ掛ける様な異端が生まれたことを疑問に思わない奴はいない。

「　　だがなあカカシ！俺の部下はお前の奴等と違って俺を尊敬してるんだぜ？お前にも見せてやりてえよ」

ミヤビがまたもカカシに言うが、カカシは『そうか　』とだけ言
って他になんの追及もしなかった。

一方、その尊敬している部下達は

「くっ　　ハッハハハ！それマジですか！？」

「そ、それやったら先生バカみたいやん！」

地面にひれ伏し、爆笑中の二人を尻目に中忍が続ける。

「うん、あれは本当にビックリしたよ。　　失礼、自己紹介がまだだったね。僕は死しやき八木サクマ。去年中忍になったんだ。宜しくね」

「死って 随分縁起悪い言葉じゃないですか？」

「だろ？よく言われるんだ。 君達の事はミヤビ上忍から聞いてるよ。刀を持った子が月下レイ君、独特な話し方の子が日上トモヤ君。そして向こうに居るのが―」

ボタン、と言う音が聞こえたかどうかは定かではないが、サクマさんが目を向けると、シズクが倒れている。

その様子を三人は目を点にして凝視している。

「やだなあ、シズクさん！何ボケてるんですかあ？」

全員呆気に囚われている中、レイが一番に話しかける。

「そやそや、キャラ崩れが半端ないで？」

トモヤも笑い話で済まそうとするが、
起きない。これは演技
の域を越えてないかな？顔も赤いし息も苦しそうだし。

試しに額を触ってみると無茶苦茶熱かった。これはもしや――

「まさか熱までも自在に呼び起こそうとは
シズク、恐ろしい
子！」

「さ、どうでもええ話が終わったんや。とつとと帰ろうや」

アハハハと笑いながら数メートル歩いて振り替えると、シズクはまだぶっ倒れていた。

マジですか？

「ちょ、大丈夫かシズク！ サクマさん医者を！我が家に医療忍者を！……！」

医療忍者はいらんやろ、とトモヤは思ったがややこしくなるだけなので言わない。

「わ、分かった！ギン上忍の所だね！」

今まで呆然としていたサクマが我に帰り、そう言い残し飛び立つ。

「ど、どうすんだ！ガン？肺炎？脳震盪？クモ膜下出血？何でも良い！シズク死ぬなよ！」

頭を抱えながら自分がわかる出来る限り重い病気を言うレイ。

「あーあ、こりゃあ明日の任務は無理やな。先生伝えとくで？」

凄まじくテンパっているレイに対し、冷静にそう言うトモヤ。

「あ、ちよつとまー」

俺が言い切る前にトモヤが言ってしまった。無論食い欠けのたこ焼きを持ったまま。

どうする？目の前には病気の美少女。辺りには誰もいない。

すなわち！人に助けは求められない！と言うことは俺が連れていくしかない。

そうなるとやっぱり背負うことになるんですか？確か波の国に行く前の時シズクに背負われたらしいしおあいこなんじゃ

いや待て！女↓男ならまだ良いだろう。しかし男↓女は不味いんじゃない？

部分的な事を言うと　胸である。

いや待て！これはそう言うイベントかもしれない。

だがもし途中で起きたらどうする？全く持って言い訳の仕様がなし！
！実際言い訳なんてしなくて良いんだけど　でも今は緊急事態。
一分一秒が生死を分ける！

この時は気が動転していて、選択肢を一つ見失ってしまっていた。

——お姫様抱っこである！無論、そっちも色々あれだけど。

俺がひたすら苦悩と葛藤を繰り返していると、シズクが咳き込みさつきより苦しそうだ。

「ええい！仕方なくやるぞ！」

恐らく聞こえていないだろう。

「し、仕方なくなんだからな!」

大切な事なので二回言い、シズクを背負う。

平らだ

少なからず期待していた事にショックを受けつつ、頂垂れながら家へと歩き出す。

と少し歩くと、道の真ん中でなんだか人が沢山いる。ってあれ？ナルトにサクラにモエギにウドン（だっけ？）。向こうにはテマリとカンクロウ。そしてカンクロウに胸倉を掴まれている木の葉丸がいる。

ん？なんか見たことある気がする。ちなみにサスケは木の裏でその様子を見えています。

「サクラー！何やってんの？」

とりあえず、現状を確認したいので手っ取り早くサクラに聞いてみる事にした。

「レイ？実は大変な事に　　ってシズク？どうしたのよ！？」

レイの後ろで背負われているシズクを見てサクラが叫ぶ。

「すっげー顔赤いつてばよ！」

と俺の質問を無視して質問で返されてしまった。

「ちょっと急病患者を運んでる途中でね」

あ、この後サスケが出てくるんだっけ？思い出した。石ぶつけるんだよ確かね。

なら放って置いて良いだろう。そう思ったのも束の間だ。

「邪魔　です　ね」

何時の間にか目を覚ましていたシズクが俺にだけ聞こえる様にボソツと呟いた。

「お、意識を取り戻した？流石はシズク。じゃあ別の道でも通っ」

「邪魔ですよ

ねえ？」

さつきとは違い殺気をも込めた囁き。この言葉だけで俺の心は恐怖に支配された。

間違いない、頭が少し遣られて敵味方の区別すら出来なくなったのだろう。断れば俺もただでは済まない。そう感じるには十分な脅迫だった。

「お、お前ら！うちの姫様がお通りだ！悪い事は言わない！道を開けるんだ！」

指を指して全員、いや主にテマリとカンクロウに対して言った。

「なんだ、お前もム力つくじゃん。じゃあ、このドチビの後はお前にしてやるよ」

カンクロウが木の葉丸を殴ろうとする。そう言うのは良いからとつとと退けてば！ただじゃ済まないよ？

「役に立ちませんね。降ろして下さい。私が殺りますから」

やるの字絶対意味違うよね？こんな所でカンクロウは死ぬのか？

そこへ原作通りに石が飛んでくる。ナイスだサスケ！後でお前の嫌いな甘いもの奢ってやるからね。

「よそんちの里で何やってんだてめーは！！」

原作より三割ほど怒りが増している。しかも石を当てたカンクロウを見ずに、レイを睨み付けているサスケ。

「クツ ム力つくガキがもう一人」

「失せろ！俺は今機嫌が悪いんだ！」

おーサスケの登場でシズクも殺るのは辞めたみたいだし良かった
でも何でサスケは俺を睨んでるの？

「おい！無視するな！」

レイのとぼけた目線とサスケの視線が火花？を散らしているので、無視された事に対して怒るカンクロウ。

「俺はお前見たいなスカしたガキが一番嫌いなんだよ」

そう言いながら背負っていた物を地面に立てる。

「おい！カラスまで使う気か！？」

テマリの静止も聞かずに術を発動させようとした刹那。

「カンクロウ 辞める。里の面汚しめ」

不意にサスケの隣に逆様になった我愛羅が現れる。カンクロウとテ

マリはビビりまくっている。其処でレイはサスケの投げた石を拾って我愛羅へ投擲する。

すると瓢箪から微量の砂が現れ、石を止める。

「　　なんだ？」

不機嫌そうに呟く我愛羅。流石に石をいきなり投げられて機嫌が良
い奴なんていないだろう。

「いや、ちょっと興味本意で　　どうか気を悪くなさらずにね」

レイが我愛羅に謝罪する。サクラが砂がいきなり出てきた事にびっ
くりしているが気にも留めない。

「君達、悪かったな　　」

俺とのやり取りをすべて亡き者として、サスケにそう告げ、下へと
降りる。

（あのカンクロウにいと簡単に石つぶてを当てるとは　できる
な　コイツ）

（あ、あの我愛羅に石を投げるなんて良い度胸じゃん。気に入った
ぜ　）

同じ兄弟でも、考え方は全く違う様だ。

「ん？でも何で他里の忍がいるんだってばよ？」

まさかナルトからこんな言葉が聞けるなんて。

「中忍選抜試験ってのがあって、それを受ける為に来てる筈だけど
？」

かなり説明が長いし、覚えていないので俺は適当に教える。

「へえ、あんた意外に物知りね」

アカデミーでの俺の座学は酷いものなので、誰も頭が良いとは思っていないだろう。

「おい、その瓢箪！ 名は何て言う？」

いつの間にか木の上から降りたサスケが我愛羅へと聞く。

「砂漠の 我愛羅 俺もお前に興味がある。 名は？」

「うちは サスケだ」

我愛羅とサスケが睨み合い、今にも戦闘が始まりそうな沈黙。それを破ったのはナルトではなかった。

「おい！その刀！名前なんて言うじゃん？」

いきなりのカンクロウの参加に俺は非常に驚いた。だから言ってや

ったんだ。

「月下　レイ　俺はお前に興味はない。だから名乗らなくていいよ?」

「分かったじゃん。俺の名は　　えっ?」

多分この時のカンクロウの恍け顔は一生忘れないだろう。

それだけ言つとポカーンとしているカンクロウを通り越して速足で家へと向かう。

我愛羅達もその後直ぐに瞬身の術で白い煙を出し消える。

「アハハハツナルトの兄ちゃんノーマークだコレッ!」

「仕方ないってばよ。　　でも、サスケ!お前にや負けねーぞ!」

このナルトは原作より少し謙虚な様だ。

「急になんだてめーは！」

ナルトの発言にサスケは気味悪がっている。さっきレイがシズクを背負っているだけでイライラしているサスケは爆発寸前だった。

「どう思う？」

別の木からその様子を見ていた一人の男が言う。

「まあ 大したこと無いけどさ、木の葉の黒髪と刀野郎。それと砂の瓢箪は要チェックだよ」

「
どうなんですか？」

一人和室で寝ているシズクの診察が終わったメガネを掛けた医療忍

者にギンが聞く。

「
今流行の風邪です。2、3日すれば良くなるかと」

「
はあ、それは良かった！遠い所から態々どうも」

ギンは深々とお辞儀すると、元の部屋へと戻っていった。

「
いやーサクマさんが本当に医療忍者呼んでくるなんて思いませんでしたよ」

家の外で帰ろうとしていたサクマさんに業と聞いてみる。

「おいおい、僕だって忍者なんだよ？ そうだ、レイ君多分
中忍試験に出るんだよね？」

「勿論ですよ？何？アドバイスでもしてくれるんですか？」

「違うよ。僕はその中忍試験の試験官をやるんだ。不正は見逃さないからね？」

あ、そんなことね。不正 勿論ですよ？バレない様に忍らしくね。

「わかってますよ、その位 サクマさんも頑張って下さいよ」

それを聞いたサクマさんは右腕を軽快に挙げ、去って行く。

あんなにいい人でもこの戦争で死ぬかも知れないんだ 大

蛇丸 やっぱり俺程度じゃ勝てないのかな？

それでももう刻々と迫って来ている。そこで人生が終わるとしたら
そこまでだったって事だ。

そう決意を改めると、レイは家へと入る。生きて他を危険に晒すか、
自らの命を持って終止符を打つか、彼にはその選択権がある。

21話 帰還（後書き）

22話更新です。次からは中忍試験に入ります。ちなみに、三次試験予選で戦わせたいキャラとかがいますか？まだ誰が通過するかも決めていないんですが、もしいたら教えてくださいね。出来る限り要望に応えます。

22話 束の間の休日

「 此処は 」

シズクが目を覚ますと何時もと同じ部屋に居た。まだ顔が赤く、熱も下がっていない様だ。

（私は確か正門で倒れて っ!!）

昨日の事を考えながら首を左に向ける。するとほぼ添い寝状態で熟睡しているレイの姿が目映る。

「 なっ！ な、 な！ 」

言葉を詰まらせながらも熱で赤い顔が更に赤らめていく。

「何をしてるんですかぁ！！？」

シズクの叫び声と共に振るわれた最強の右腕が生み出す鉄拳はとも病入とは思えない速度でレイの頬を捉え、叫ぶ事すら出来ずに戸へと突っ込む。

もはやこのネタは鉄板になって来たかも知れない

「 申し訳ありませんでした 」

シズクはひたすら頬を摩っているレイに深々と頭を下げている。

「 もうそれ3回目だよ？俺が悪いんだって 多分ね 」

「 いえ！流石にあれば私のせいです！ 夜中まで看病してて寝
ていたとも知らずに 」

それだけ言つとまたシズクが苦しそうに咳き込んだので、肩を貸して布団に寝かせた。

「その様子だと中忍試験には間に合いそうだね。ほい、これ志願書」

レイが微笑んだ後、シズクの枕元に志願書を置く。

「それは大丈夫です。それよりもあまり一緒に居ると移してしまいますよ?」

俺に悪そうな顔でシズクはそう告げる。

「問題ないよ?馬鹿は風邪引かないし 待てよ?俺って馬鹿な訳?どうなの?」

「貴方は馬鹿ですよ?大馬鹿です!」

俺の僅かな疑問をシズクはくすくすと笑いながら切り捨てる。

今更ながら、シズクのこの身体能力は何なのだろう？とても女とは思えませんよ？あ、綱手姫と同じ原理かな？ あれ？だった

らさっきので俺死んでるよな？それに写輪眼、火遁、奪った忍術、写輪眼での幻術 馬鹿はどっちなのさ？俺なんて風遁と刀だけ

悲しきかな、才能の差

レイは一人色々と考え、浅い溜息をした。

「ば、馬鹿と言うのは別に頭が悪いと言う意味じゃ——」

レイの溜息を見てそっちを気にしたと思ったシズクが必死に弁解する。

「いや、そっちじゃなくてね 氷囊 は無いか 仕方ない。買って来るとしよう」

そうして俺は早々と縁側を歩き出す。

もし死んでしまったなら、シズクと話したり、トモヤと馬鹿やりたり、先生を陥れたり。何も出来なくなる。それ以外にも父さんと修行したり、母さんの料理をも食べられなくなる。ナルトといがみ合う事も、シカマルと雲を見る事も、チョウジと菓子食うのもその他諸々。今やっと自分の心が理解できた。俺は死ぬのが怖いんじゃない。死ぬのが嫌なんだと。

「ネージー君！遊ぼうや！」

「何だ？今日は任務じゃなかったのか？」

トモヤの声を聞き、渋々ネジが門から姿を現す。

「アクシデントで中止になったんや。 それよか、中忍試験
出るんやろ？」

「ああ、確か六日後か？ ヒナタ様も出るらしい 御怪我
が無ければ良いのだが 」

雲隠れとの一件が無いこの世界では、ネジはヒナタの保護者の様な存在と化している。

「ほいじゃ、今日は木の葉丸々、隠れ鬼体術合戦や！」

ネジの心配を完全に無視しながら話しを進める。木の葉丸々隠れ鬼体術合戦とは！木の葉全土での隠れ鬼で、見つけたら体術合戦が始まると言う隠れ鬼をする意味がいまいち分からないゲームだ。

「おい！人の話を　　隠れ鬼だと？」

ネジはトモヤの発言を疑った。何故なら自分にはこの白眼があり、この種目では絶対的に有利だからだ。

「勿論！白眼は無しやで？」

浅はかな考えを読まれ、釘を刺された事に対し、ネジは舌打ちをした。

「　　フンッ　　まあいい。それでも俺の勝ち揺るがないのだから　　」

「よつ言つなあ。今までの対戦成績忘れた訳や無いやろ？」

「15勝15敗20引き分けた。忘れる筈が無いだろう?」

ネジの不気味に笑いながらのその回答を聞き、トモヤはニヤリと笑う。

トモヤが負ける事は大体は頭を使う事なのだが。

「ネジが鬼や!始めるで!」

それだけ言つと屋根から屋根へ飛び去っていくトモヤ。一方ネジは律儀な事に後ろを向いてきちんと数を数えている。

「9 10!フツ 白眼を使わずとも見つけてやるぞ!トモヤ」

ネジも意気込みながら早足で駆け出す。

「此処でええか？ っ てシカマル何してんねん！」

「何って雲見てるに決まってるだろ？」

トモヤが身を隠そうとした屋上の椅子では、シカマルが仰向けにな
って上を向いている。

「任務無い日に他にやる事無いんか？」

「あーチヨウジと菓子食ったり親父の修行とか色々あるが、こつ
い天氣の良い日はこれだな」

自分よりも下らない休日過ごし方をしている奴がいるという事
実と将来 いや、今現在でもIQ200の超天才だという事
実。世の中は不公平だ。そう感じざるを得ないトモヤだった。

「見つけたぞ！案外近くに居たんだな！」

トモヤがどうでも良い事を考えていると此方を見かけたネジが一目散に駆け寄る。

「誰だ？」

いきなり現れたネジを見るや否や間髪入れずにシカマルが問う。

「ストーカーや」

「人聞きの悪い事を言っな！」

トモヤの悪ふざけをネジが真っ向から否定する。
案外良いコンビだ。

「見つけたからには決着をつけるぞ？」

「はいはい、やりゃあええんやろ？」

二人の会話が終わると、双方が独特の日向流の構えをする。

「めんどくせえな、喧嘩なら他所でやれよな」

シカマルが立ち退きを提案するが、二人はそれを聞きはしない。

「口出し無用！」

ネジはそれだけ言つとトモヤとの距離を一気に詰め、日向流からの掌底を繰り出す。

「わっ、ちょっと待てや！チャクラ流すなや、おい！」

左右の手からの掌底を避けながらも懸命に説得するが、ネジはその後幾度と無く掌底を打ち出す。

（柔拳やし、受け流すんも危ないよなあ？ 攻めるしかあらへんな！）

トモヤは決心すると、顔面に迫っていたネジの右手の掌底を避け、此方からも攻撃を繰り出す。だが、日向流の構えから打ち出したそれは柔拳ではなく、剛拳だった。これは日向家に通っていた時にトモヤが思いついた戦術だ。しなやかな動きで敵の攻撃を受け流し、

剛拳での外部的損傷を与えるというスタイルを確立した。

ネジに放たれた右拳は寸での所でネジの左手に阻まれる。

「くッ
いつ見ても厄介なやり方だ」

「よう言つわ。あんだけ柔拳叩き込んで、当つたらどないすんねん！」

トモヤの質疑にネジはフンツと鼻を鳴らした。トモヤがネジに軽い殺意を覚えたのはこれで29回目である。

（ あーあ、何か激しい戦闘してやがるし、めんどくせえなあ。
完全に俺場違いくせえ 降りるか）

ネジとトモヤのやる気に当てられ、めんどくさがりのシカマルとしては耐えられなかったのだろう。これから起こる壮絶な戦いを見ぬまま、彼はさっさと屋上から道中へと降りた。

「おーシカマル！良い所に居るね！」

今降りてしまったのは彼にとって最大の汚点かも知れない。再び厄介事に巻き込まれるのだから。

「なんだよ、レイ。何か用か？」

「実はシズクが熱出してさ と言う訳で氷嚢売ってる場所教えて！」

「何がと言う訳だ？ めんどくせえけど近いから教えてやるよ」

シカマルにサンキューと軽く礼をした後、レイは歩いていくシカマルの後を追う。

「今時期に熱って中忍何とかにお前らも出んだろ？大丈夫なのか？」

「心配は御無用だ！シズクの生命力を舐めちゃ駄目だよ？」

「なんだそりゃあ？ま、追求はしねえけどな」

シカマルが苦笑しながらも人ごみの中を早足で歩いていく。

「この店だぜ ってマジかよ 」

店の前に着き、振り返った時にはレイの姿はもう見えなかった。はつきり言うとしカマルが会話をやめてからまだ10秒も立っていない。それだけの短時間で何処かへ消えれると言うのは忍者にとって都合の良い？才能かも知れない。

「 流石にほっとくのもあれだな めんどくせえ 」

シカマルは深く溜息をしつつ、先程通った道の近くを探して見ることにした。まだそう遠くには行っていない筈だから

一方、レイは

「シノにキバ！何してんの？」

レイは先程の道のほぼ反対方向にある公園の林の中にいる。此処へ向かっていたシノとキバを追ってきたのだ。

「あ？シノが今日虫取りに付き合えつうんだよ。面倒な話だぜ」

虫取りを構え、欠伸をしているキバ。

「キバ、それは違うな 何故なら、赤丸の散歩も出来ると張り切っていたからだ」

「いや確かにそう言ったけどよ！面倒なのは事実だぜ？」

何時聞いてもこの班が一番争いが起こりそうな予感がする。ほぼシノとキバだけだ だからこそ、俺は一端引く。

「へえ、そうなんだ。じゃあまた今度な！」

レイが手を振りながら帰ろうとするとキバに静止を受ける。

「ああ、中忍試験に出んなら、俺達とあたねえ様に祈るんだな！」

「
まだ中忍試験が戦闘と決まった訳ではない
」

「分かってんよ！うるせえなあ！」

シノは突っ込まなくて良い所でも突っ込むからなあ。まあ、喧嘩するほど仲が良いって言うし。頑張れ！キバ！

レイはキバに軽い同情をしながらも、再びシカマルがいると思われる道へと戻ってきた。すると後ろから何かに乗られる様なズッシリとした重さを感じ取る。

「レイくん♪こんな所で会えるなんて運命かしら♪それとも家に

用事イ？」

レイの背中にかぶさる様な形でいのは乗っかっている。

「あ、いの？ 取りあえず降りて 重い 」

「もう！レディにそう言う事言っちゃ駄目でしょ？」

そう言いながらいのは膨れながらも背中から降りる。良く見ると此処は山中花店の店の前だった。

「やっと見つけたぜ、たくつめんどくせえ事しやがって」

シカマルはいのと話しているレイを見つけてそう言い捨てた。

「やっと見つけたぞシカマル！もう逸れるなよ？」

「 なんつーか めんどくせえ 」

心底面倒そうにシカマルは呟いた。

おい！俺の渾身のボケをそれだけで済ませますか？此処は『お前が逸れたんだろ？』とか『なんでやねん！』が王道なのに　シカマルは笑いを分かってない！

「つーより、氷囊買うんじゃないかったのか？」

「そうだった！案内頼むよシカマル。　いの、そういう訳でまた「氷囊！？誰か風邪でも引いたの？」実はちよっとシズクが」

とレイが其処まで言った瞬間にいのから凄まじい量の殺気が飛び交う。（様に見えた）

「シズクですってエ！！もしかしてレイ君が看病してるのオ！？」

「え、もっ勿論そうですねどうかなさいました？」

いのの圧倒的な存在感に当てられ、気付けばレイは冷や汗ダラダラで敬語で話していた。

（前はレイ君に興味無さそうに答えてたけど、やっぱり油断なら無いわ！　シズクなんか絶対負けないんだから！）

いのは一人拳を握り締めながら強く、強く思うのであった。
その間にレイはシカマルに引っ張られて行ってしまったのだけれど。

「な、なかなかやるやないかあ」

「つ、強がりには止すんだな。もう限界なんだろう？」

二人とも呼吸が切れ切れで更にはボロボロになりながらも決して勝

ちを譲ろうとはしない。シカマルが居なくなっただけから、屋上から屋上から飛び移りながらもかれこれ20分ほど戦い続けている。いくら忍と言えど体術を20分もぶっ通しで続けられる下忍はいないだろう。

リーを抜いて。

「ハアアアアアアア！」

少し空いていた距離を二人は走りながら一気に詰める。そしてネジはトモヤの腹部に掌底を、トモヤはネジの顔面に右拳を突き出す。

双方の攻撃はクリーンヒットし、トモヤは隣の民家の屋根の上まで飛ばされ、ネジは屋上から落ちて行くと言う痛み分けでこの戦いは終結した。

「さっきはナイスだったね。シカマル！　ん？」

親指を立てながらシカマルへと礼を言っていると突然自分の周りだけが暗くなる。不思議に思い空を見上げると白い服を着た少年が此方へ向かって落下してきている事だけは容易に理解できた。

「お、おい！大丈夫かよ？　ってこいつさっきの？」

レイを押しつぶす様な形で落ちてきたネジを見て、さっきトモヤと

争っていた男を思い出したシカマル。そう、通称ストーカーを。

「　　チィ　　今回は　　引き分け　　か　　」

空を見ながら清々しい顔をしながら空を見上げ、そう呟き終わるとやりきった様に気絶する。

「　　お・も・い・わあ！！！！いきなり落ちてくるなあ！！　　」

ネジを除けながら怒りを露にして起き上がる。

「なあ、こいつ誰なんだ？何つーか、ヒナタに眼が似てる気がするんだが」

シカマルのちゃんとした質問のせいでレイの怒りの大半が収まってしまっていた。　　最初から其処まで怒ってはいなかったが。

「名前？は日向ネジ。一期上の一応先輩って立ち位置の人」

凄まじく適当で冷めた紹介に大した奴じゃないんだらうとシカマルは思った。

「日向か　通りで似てる訳だな。知り合いなのか？」

「いや？一回会っただけだけど？」

「そついうの知り合いって言うんじゃないか？」

二人は気絶したネジを見つめながら会話している。辺りにはどうやら人が群がって来た様だ。

「おい、とつと氷嚢買ってこいつ運ばうぜ。めんどくせえけど放置する訳にもいかねえだろ？」

「仕方ない。運んでやるとしよう。　　ヒアシ様から何か貰えるといいな♪」

考えている事は違えど、二人は氷嚢を買い、ネジを持って日向家へと足を向かわせた。

「ねっ、ネジ兄さん！ど、どうしたのですか！？」

担架が無かったので、レイがネジの足を、シカマルが頭を持った状態で現れた事でヒナタは困惑がっている。

「簡潔に説明すると

降って来た？」

レイのその一言にヒナタは更に困惑している。シカマルは確かにな、と苦笑。

「今回はネジが世話になった様な」

日向家当主であるヒアシが畳の敷いてある部屋にて俺ことレイを呼びつけている。

「いえいえ御当主、彼が勝手に降って来ただけですから　で
も貸しは付けときますよ？」

ヒアシ様はそれを勝手にしろ、と捨て去るので、勝手にさせて貰う

事にしよう。

「だが何故ネジがあればほどの怪我をしている？　まるで誰かに殴られた様な傷だったか」

ヒアシ様の疑問は最もだ。シカマルの話しではネジはトモヤと戦っていたらしい。　あいつは何やってんだかね？

「それに付いては決闘？　と言う話でしたよ？　俺としてもいまいち良く分かりませんがね」

微笑みながらも疑問符で返す。

「そうか　下がって良いぞ？」

「それでは　失礼します」

レイは小さく礼をし、部屋を後にする。

「　ネジは若い頃のお前に似てきているな　」

「マジですかあ？俺なんかに似られても困るんすけどね」

縁側で話を聞いていたミヤビが答える。

「そう言うな　一族一同、お前には感謝しなければならない。
お前は日向の憎しみの運命を変えたのだ　私には出来なかった
宗家だの分家だの、そんな事を決めて何になる？と最初に意見
したのもお前だったな　」

ヒアシは考え深そうに語る。

「今度はお前の部下の番だろう？お前は人が良すぎる。何時も劣等の素振りしか見せず、誰も気付かぬかも知れん、だが恐らくお前は
」

何時もの陰しい表情では無く、終止笑みを浮かべながら告げる。だが最後の言葉はミヤビによって遮られる。

「買いかぶりすぎると碌な事にならないかも知れませんか？
カカシも、ガイもいる。　でもま、期待は裏切りませんが」

苦笑気味にミヤビは告げ、その場から立ち去る。

「シズクー！生きて 起きてるー？」

レイがドタドタと階段を走りながら部屋の戸を開ける。

「 ええ、何とか 実は昨日の事、あまり覚えていないので
す。 一体何が――」

昨日のこと 『カンクロウ』、『役立たず』、『殺る』、『殺気』 様々な言葉が俺の頭の中で乱回転し、一つの結論にたどり着いた。

「何も無かった！全然何も無かったから！」

そう、教えないのである。

「？ そうですか、それなら良いです 」

レイが言い掛けの言葉を完全に否定した事に多少の疑問を感じながらもシズクは気にしないで置くことにした。

「それよりさ、氷囊頭に付けて早く良くなってくれないと困るからね」

満点の笑みを見せながら告げるレイに、まだ何かした訳でもないのに顔を赤らめるシズク。

「ん？また熱上がった？」

そう言いながら顔を近づけて行くレイ。

「えっ？ち、違います！だ、だからちょっと待って——」

コツンツとシズクの額にレイが額をぶつけ、あれ？あんまり上がってないなあ？と言った瞬間。更に真っ赤になったシズクは爆発する様にして煙を出しながら気絶した。

「
？」

ちよつと強くぶつけ過ぎた？いやでもそんなには
や。俺も少し休もう。

まあいい

シズクが気絶したのを良い事にレイは座り込み、壁に寄りかかった。
そうすると疲れが溜まっていたのだろう。直ぐに寝息を立てる。

だがトモヤは今現在屋根の上に居る事に気付いている者は居ない。

22話 束の間の休日（後書き）

看病シーンは少し 大分掻い摘みましたけどね 。今回は結構キャラが出てきました。

次回からは一次試験に入れると思います。やっと原作絡みが始まり
そうで自分も嬉しい限りです！更にはお気に入り登録500件突破
！これから頑張ります！

実は今一話から大修正中です。大筋は変わらないので、暇があれば見て下さい。
という訳で、感想待ってまーす！

23話 中忍選抜試験

「……あーあ、やつちまったよお」

再び彼はそう呟く、見渡す限り山、山、山。そして今自分がいる場所こそそれらすべてを見渡せる程大きな山の山頂。

別に修行の為に孤高の旅をしている訳ではない、むしろ逆、唯試験を受ける為にと気合が空回りした結果である。

もう日は昇り始めている。いつもはアカデミーに行くのなんて1時間あれば着く。

「ヤッツホ〜」

気分転換も兼ねて、レイは徐に叫びだす。

するとその声が山彦となって戻ってくる事から、幻術では無さそうだ、と時折来る山風に髪を靡かせ、誰も居ない所で格好を付ける。それでもどうにもならないので、木の葉があるであろう方向へと歩き出した。

もしこの場が火の国の国境より向こう側だったなら、抜け忍登録されているかもしれないと、レイは身震いした。

朝六時、いつもうちはシズクが起床する時間帯、更に驚くべき所は、ギンもアカネもそれ以上早く起きて活動を開始していると言う所。

ギンはいつも通りに庭での鍛錬、アカネは朝食作りに精を出している。

「おはようございます……」

眠気を抑えきれずに欠伸び、まだボサボサの髪を触りながら、シ

ズクは朝の挨拶を済ます。机の上には既に簡易な朝食が出来上がっており、レイがどれだけ規則正しく生活していないかが容易に伺える。

「おはよう、今日はちよつと遅いわね……あつ、今日中忍試験でしよう？　頑張つてね？」

アカネはそう告げるが、中忍になる為の大事な試験を『頑張つてね』で済ます親はどれ程居るだろうか。

この人たちは別格だと、シズクは常々思う。

「はい。……さっき部屋を訪れたのですが、どこへ行つたのですか？」

椅子へと座りながら不安そうに話すシズク。勿論、何処へ行つたか聞いているのはレイの事。一度目を離すと居なくなるので困り物だと語る。

「大丈夫よ、あの子は昔のギンさんに似てやんちゃだから……シズクちゃんに私達の出会いの話をしたかしら？」

「……五回目です」

素っ気無く言うシズクに『あらそう……』とだけ告げて語り出す。まるで答えなど聞いていなかった様に。

「ギンさんとの出会いはね、私が中忍に初めて昇格した時にね、とある任務でギンさんが体長で四人一組フォーマンセルが組まれたの！」

女優の様に一人で語りだすアカネを朝食を食べつつシズクは相槌を打っている。一度目の話しは赤面しながら聞いていたシズクだが、流石に五度目では冷めてしまった。

「そしてね、その時とっても大きな包丁を持った霧隠れの抜け忍さんに出会つてね、あ！　あの人も格好良かったわ、それでね――」

この先永遠と続くであろう言葉の数々をただ聞くのみである。

「こんな所に小屋があるなんて……」

山を一応は下っている最中のレイの目の前には小さな山小屋がある。

中からは人の気配があり、恐らくは盗賊だろう。

一般人だった場合が不味いので、流石に小屋ごと吹き飛ばす様な真似はしない。そうして小屋の扉を乱暴に蹴飛ばす。

すると内部には口を包帯で覆い、首切り包丁を構えた男、そして特殊な面を付け、千本を構えた少年の姿があった。

「……あれ？ ザブさんに白じゃないですか、奇遇ですね、どうしてこんな偏狭な地に？」

内部に居た招かれざる客に相好を崩す。

侵入者の気配を察知してか、武具を構えていた二人は警戒を外す。

「あア！？ お前こそ何でこんな所に居やがる」

「迷子です！」

と叫んだ言葉が響く。

何やら痛い視線を二人から受けた。

「……まあ……難だ……入れ、茶ぐらい出すぞ？」

そう告げた再不斬は白に茶を入れる様命じ、自らの刀を壁へと立て、ソファに沈み込んだ。

「ほー、これはまたご馳走やなあ」

正午、日向家へと勝手に上がり込み、家族水入らずの昼食へとトモヤは入り込む。

「あ、トモヤ兄様！」

「え！ と、トモヤ君っ！」

トモヤが現れたとほぼ同時にヒアシの娘であるハナビとヒナタが叫ぶ。

壁へと付いていた手を離し、しゃがみ込んだ。

「よ、ハナビもヒナタも元気そうやな、いやー何より何より」

「……外には見張りの者が居た筈だが？」

若干の嫌な顔をしたヒアシ。

すると縁側をドタドタと走ってくる足音が聞こえ、また五月蠅くなるのか、とヒアシは誰にも見えない様に少し溜息をした。

「……ヒアシ様！ 見張りがトモヤがここに来たと」

「おう、ネジ！ どないしたん？」

驚きの余り目を丸くしているネジに軽快に右手を挙げて答える。

「柔拳を食らってたった六日で回復しただと？」

「正確には三日や」

トモヤは六日前に柔拳を食らった箇所を摩る、だがそこには傷跡は見当たらない。その現状を見るや否や、ネジは再び飛び出して行った。

ネジは握り締めた拳を開く事無く、日向家を後にする。リーとテンテンとの待ち合わせ場へと急いで。

「……何や？ あいつ急に居なくなっただけ？」

髪を掻きながらネジが走り去った方向を見ると、急にズッシリとした重さを感じる。

「きつとトモヤ兄様に怖気づいたのです！ 流石は兄様っ……！」

「……ハナビ、食事中だぞ？」

後ろからトモヤの背中にぴったりと張り付いているハナビ。その様子を少し羨ましそうにヒアシは静止を掛ける。

「ええ！でも父上ー、トモヤ兄様は今日から暫く居なくなってしまうんですよお」

「少しの間だけやから、我慢してな？ …… それと、俺は兄や無いで？」

愚図りそうに頬つぺたを膨らませるハナビをトモヤはあやす。

「分かってます！ わ、私と兄様は、その、許嫁ですいいなすけからね」

トモヤから降り、ポツと頬を赤らめて恥ずかしそうに話すハナビ。そんな言葉をいつ覚えたかとか、両人の総意が無ければ成立しないなどとは言ってはられない。

…… その時、空気が凍った。トモヤは活動を停止し、ヒナタは箸を落とす。

…… そして最も恐ろしいのは。

（ま、待て、冷静に考えるんや、俺！ …… ハナビの言う許嫁ってのはきつとお父さんと結婚する！、見たいなもんや、きつとそうや

…… ヒアシ様もそれぐらい承知やろ？）

恐る恐る振り返ると、そこにはヒアシの姿は無く、ヒアシの皮を被り、鬼の形相でこちらを睨んでいる化け物の姿があった。

「…………… そうかトモヤは中忍試験に受かる自信が無いのか…………… 仕方ない、向こうで稽古してやろ……………」

ゴゴゴゴツと少年漫画に良くありがちなオーラを身に纏い、トモヤの裾を掴み、ずりずりと引き摺っていく。

「ま、マジかア！ ヒナタア！ ハナビイ！ ネージー！ 助けてくれ、アアアアアア！」

トモヤの言葉は日向家中に響き渡り、そして今日、七月一日は中忍選抜試験の始まる日時であり、更には木の葉崩しが起こる事から、この叫びは後に「神のお告げ」として日向家で崇められたそうな……………

「……唐突なんですけど、仕事の方はどうですかね？」

「上々だ、だがあんな事で良いのか？」

結構結構、とレイは白から出された茶を飲む。

実際この場に時計は無く、今が何時かも定かではない。

「むしろ最善の手ですかね、あの場で貴方達二人を引き入れられて良かったと心底思いますよ？」

ゆつくりと湯飲みをテーブルへと置く。

「……それより、二人は何でこんな所に？」

「今から木の葉へ向かう所だったんです」

本当に引き入れて良かった、と一人安諸しながらも、一つ気になった事があつたので訊く。

「ここから木の葉までつてどれくらい掛かる？」

「三日だ」

即答で答える再不斬を見て、レイは目を丸くする。

……終わった、そう思ったのはこれで何度目だろうか、レイは自分の人生にあつた悔いを今思い出し、呆然と立ち尽くしている。

「……そこを何とか……三時間ぐらいで」

「はあ？ 三日の所を三時間だと？」

「流石にそれは……」

再び呆れ顔で再不斬と白は間接的に『無理だ』と語る。

「……あア！ 神は俺を見捨てましたよ？ 今さっき！」

フツと再不斬へと目をやると、少し残念そうな表情を見せた。

「……お前に死ぬ覚悟があるなら、一つだけあるぜ？ 三時間で木の葉へ着く方法がな」

再不斬のその言葉を聞き、ぱああ、とレイの顔つきが明るくなり、藁にも縋る思いで問い詰める。

「何それ！？ いや、説明は良い！ 兎に角急い……ッ……！」

語り始めたレイの首筋に再不斬は手刀を落とす。すると瞬く間に

レイの意識が途絶えたのだ。

「——ん？　ここは？」

どれくらい経ったかも分からないが、レイが目を見開くと、ありえない光景が視界に入る。

「すごッ！　何これ！？」

興奮気味に思わず叫ぶ、レイの視界には永遠と続くような氷の滑り台があり、そして更に驚くべきことは、自らが樽の中へと拘束されていた事だ。

「随分と早い目覚めだな、……起きたんなら始めるぞ？」

ニヤリと笑いながら再不斬ドンツと樽へと足を置く。樽の前にはストッパーが一つあるだけ、蹴飛ばせば簡単に永遠と転がっていくであろう事は容易に想像出来た。

「……あのお、ザブさん？　良く見えないんですけど……冗談ですよね？」

レイはハハハツと誤魔化し笑いをするが、再不斬の顔には冗談な節など微塵も伺えなかった。

「……生きてたら……木の葉で合おうぜ？」

不用意に生きてたらを強調する再不斬にレイの顔は青褪め、静止を掛けようとしたが、時既に遅く、もう再不斬は振りかぶっていた。「うわあああああああああ！！」

再不斬の蹴りと共にレイの口から発せられた叫び声は、いつもは冷静なレイの声とも、人を簡単に脅迫する時の声とも違い、純粹な恐怖から来ていた。

23話 中忍選抜試験（後書き）

サブタイトルに中忍選抜試験って書いてあるのに、まだ入っていないわ
せんww

一応これからも修正は続けるので、また更新遅くなるかもです。自分
分はストックがある訳ではないのでww

兎に角、お気に入り登録してくれる皆様やここに登録していなくても
も見て下さっている皆様、そして感想をくれる皆様の期待に沿う様
にこれからも頑張らせていただきます。

お知らせ

本来なら活動報告に書けばいいのですが、出来るだけ沢山の人に見てもらおうと思い、独断でこちらへ書き込みます。

……何やら重い始まり方ですが、『書くのやめます!』とかじゃないので悪しからず。

この小説は1ヶ月以上更新できませんでした。

こちらの原因としてはリアルが忙しくなってしまったことと、小説の勉強的な事をしていたからです。

昔の自分の文章を見ると、視点やら無駄な改行やらで泣きたくなりました。

次からはもっとマシな文章が書けると自負しています!多少……いやかなりラノベ風ですが。

もうひとつは改稿についてです。

はっきり言うと、この改稿をだらだらとやっていたせいで更新が出来なかった部分もあります。

なので改稿については完結まで放置の方向で行かせて頂きます。

とりあえずこんな所です。

一応まだ少しテストやら講習やらで忙しいので再来週を目処に更新を再開したいです。

長らく休んでいてストックの一つもなくすいませんね〜

と、言うわけでお知らせでした。わからないことがあったなら、活動報告にでも感想にでも書いて聞いてください。

これから頑張らせていただきます！

24話 最悪の出だし（前書き）

改行がほぼ無いので、縦の方が読みやすいと思います。

24話 最悪の出だし

「レイがまだ来てねえだとお!？」

中忍試験が行われる3 - 1教室前で、日向ミヤビが声を上げた。

忍装束とは名ばかりの白い和服の様な物を身に着けた男を見据え、動きづらくないのだろうか、と少女――シズクは考える。

「ですから、さっきからそう言っているじゃないですか」

「朝から居ないっておまつ、マジだったのか!？」

驚き半分絶望半分といった表情を男は浮かべる。

「なぜ私が先生に冗談を言わなければならぬのです？」

少女は落胆しているミヤビを見た。何事にも流されやすく、部下に軽くあしらわれ、その癖任務ではほぼ役立たず。こいつは本当に強いのだろうか、と誰でも思ってしまう。

「……だああ! 今もう3時50分なんだぞ!？」

不意に頭を抑えミヤビが叫びだした。

受付は4時、段々と日が沈んで行く。先程までは人がこの扉を頻繁に潜っていったが、今はもう誰も通らない。

それはすなわち、自分達以外は既に申し込みを終えたと言う事。

「終わりましたね、我々の中忍試験」

憎らしいと思えるほどにこやかな笑顔のまま、ポンっとミヤビの肩へと手を置いた。

崩れ落ちているミヤビの顔を覗くと、涙やら何やらでくしゃくしゃとなっていた。

(そこまで大事だったのですか?……何やら罪悪感が)

いつも馬鹿にしているとは言え、一応自分達の上司であり、先生である。

特に何も教わっていないかろうと、その事実是不変ならない。

部下一名の遅刻で中忍試験を受けられなかった、などと言う不名誉な看板をこの男が一生背負っていくと考えると自然と悲しくなる。

「おーい！」

声を聞き、振り返ると中途半端に逆立った金髪の少年が走ってくるのが見えた。

右頬には絆創膏を張っており、何があつたかを追求したくなる。「やつぱ駄目や、どこにも居らんで。少なくともこの辺りにはやけど」

息を切らしながらトモヤは言う。

「だ、そうですよ。せん……せい？」

再びミヤビがいじけていた方向を向くと壁を止まる事無く蹴っていた。

涙はもう止まっており、何かブツブツと呟いている。

「なんや？ あれ」

「知らぬが仏、とても称しましょうか」

同じ行動を繰り返している男を指差したトモヤにそう答えた。

表情が先よりも暗くなり、淡々と下を向き、壁を蹴る。

一体何度壁を蹴ったか分からなくなった頃、

「しゃあない、二人で突入しよか？」

とトモヤが切り出したのだ。

「えっ！」

ミヤビの暗い表情が嘘の様にぱあっと明るくなる。

無造作に動いていた足を止め、素早くトモヤへ近づき、両肩へと手を置いた。

「お前は天才だ！ 流石俺の部下、発想の転換だな！ うん！」

「でも、確か試験は三人一組でなければならぬのでは？」

「知るか！ 入っちまえばこっちのもんなんだよ！……確か今回の試験管はイビキだったか？——いいか？ 見つかるなよ」

イビキと言う人物がどんな人なのかはシズクは知らない。それでも人数を数え間違える様な事があるだろうか。

本来三人一組であるのだから席に座った途端気付かれると思うが、

今のミヤビはそれすら聞き入れる様子は無い。

刹那。

「俺の名はうずまきナルトだ！！ てめーらにゃあ負けねーぞ！」
声が聞こえた。

酷く品の無い宣戦布告、ナルトが言っているのだろうが、二人の顔を見るとはつとした表情をしている。

「やべ！ このイベントの次は確か試験管が来るぞ！……ほら、お前らとつと入れ」

扉の前で教室内の声を聞いていた二人はミヤビの人蹴りによって教室へと突っ込まれた。

「ぐふっ、いきなり何すんねん。あのアホ！」

シズクとは違い、上手く着地できなかったトモヤがぼやく。

周りは既に多くの受験生が犇めき合っている。どうにも殺気立った人間が多い。

「ん？ トモヤにシズクも何やってんだってばよ？」

目の前に居た新人の^{ルキ}ほとんどがこちらを向いていた。扉を蹴破られ、試験管が来たとも思ったのだろう。

「つーかお前らギリだぜ？」

シカマルが時計を指差した。

時刻は3時59分。

あと1分で試験が始まってしまう、シズクはレイの参戦は絶望的だと予測した。

「おっと、今年の新人は十二人^{ルキ}だったね、僕は薬師カブト、宜しく」
「ええ、こちらこそ——」

差し伸ばされた手を握ろうとした時。

一人の音忍が飛び上がった。衣服に『死』とプリントされた何ともダサイコスチュームの忍が身を翻してクナイを2本、カブトの足元へと突き刺したのだ。

そのクナイへと目をやり、再び視点を戻すと、カブトの側へと頭を包帯で巻いた音忍が迫っていた。

何やら右手で印を結び、カブトへと拳を降ろそうとしている。

シズクからして見れば、大した速度ではなく、誰でも避けられるうと高を括るつもりでいたが、言葉を遮られた事にいささか腹が立っていた為、左足を軸に回転し、右足の踵で音忍の顔を蹴り飛ばした。

「……誰だ」

上手く体制を立てなおした音忍は問いかける。

「お前さんにはこの家紋が見えない様やなあ」

いつの間にか起き上がったのか、トモヤが入り込む。

「このお方はな、うちのはまあまあ有能な血を限界以上まで吸い尽くし、残虐な事件をもあつさりと乗り越え、いずれはS級犯罪者を全員下僕にすると豪語しておられるお方やぞあ！ お前さん等も殺されたくなかったら『シズクの姉さん^{あね}』とでも呼んでおけや！」

沈黙。

ある者はシズクを恐れ、ある者は大した事ないと嘲笑う。

トモヤの不用意な言葉でこの場は一瞬で無法地帯と化した。

「何ですか今の！ 人の自己紹介を勝手に！」

「だってその方がおもしろいじゃん？ 俺ら二人で作ったんやで、感謝しいや」

胸倉を掴み、問いかけようとも、トモヤはVサインを作り、軽快に笑みを浮かべた。

「本当なら、レイが序盤を言っただんやけどな」

「知りませんよ、そんなの！」

トモヤの軽いノリに大々的な殺意を覚える。

いつもそうだった。トモヤはシリアスなムードでも一瞬でギャグへと流す。

そんな所が人々を引きつけ、シズクを怒らせるのだ。

「静かにしやがれ、どぐされ野郎どもが！！」

扉とは反対側の黒板近くに白い煙が宙を舞う。

声と共に煙玉でも使ったのだろうが、無駄な演出である。

煙が段々と晴れていき、目を向けると、試験管の様な風貌の人が大勢現れていた。

「待たせたな……中忍選抜第一の試験。試験管の、森乃イビキだ……」

多くの受験生が震え上がる中、シズクはイビキと言った男を見た。顔に付いた多くの傷、頭を額当てで覆っているが、恐らくは傷があるであろう。

「木の葉のお前！」

ビシッと黒い手袋で指を指す。

無論、その指の先とシズクの目線は繋がった。

「……？　なんででしょう？」

「暴動を抑えた事は評価しよう、だが次今の行為をしたら失格だ。

……音のてめえらも分かったか？」　不適に笑みを浮かべたイビキ。落とす事がそれだけ楽しいのだと思わされた。

突如、試験管側の窓ガラスが割れた。

高速で回転し、イビキより後ろに居た試験管数人を吹き飛ばし、壁へと激突し、何かが割れた。

「ん？」

イビキが振り返る。

割れた木の破片から出てきて存分に目を回し、クラクラと歩き回っているレイの姿が見える。

「うわああ、気持ち悪っ。吐きそう……」

「……何だ？　こいつ」

いきなりの来客にイビキは対処仕切れない。

いつも通りの奇抜な登場になぜか心が落ち着いた。

レイの登場は最初の編入の時なんて序の口であり、それから多々、遅刻の度に馬鹿をやる。

一階から打ち抜いて来た時は長時間における説教があったと、シズクは思い出し、微笑む。

「レイ君！　どうしたんだい？」

「サクマ、知り合いか？」

サクマと呼ばれた眼鏡を掛けた青年がレイへと駆け寄る。レイは未だに千鳥足でフラフラと歩く。

「はい、今回の受験生の筈ですが……」

サクマの表情が暗くなる。

「こいつの連れ！……失格だ」

イビキから予想だにしない言葉が発せられ、微笑んでいたシズクの顔はどんどん青褪めていった。

24話 最悪の出だし（後書き）

久々に書けました。

今回は行空けが無いので、結構大変でした。

これからはこんな感じで行きたいと思っています。

中々描写が難しいですね。次話ではもっと明確に書きたいと思います。

キャラ視点で書いているのですが、おかしい所は無かったでしょうか？

25話 無断

中忍試験会場にて、柄の悪い忍達がしきりに黙りこくっている。それもその筈、まだ試験が始まってすらいらないのに、失格者が出たからである。

ようやく目眩が治まり、地べたへとペタンと座り込んでいたレイは事の重大さを理解した。

「イビキッ！ 俺の部下が失格とはどーいう見だ！」

「……どうもこうも、状況を見れば分かるだろう？」

音の下方向へと目を向けると、ミヤビが再び扉を蹴破って侵入していた。

しばらくはミヤビががやがやと文句を言う姿に見入っていたが、フツと立ち上がる。

「イビキさん、アンタはそれでも忍か！」

不意に声を荒げ、叫んだ事により、周囲の視線がレイへと集まる。殺気、興味、苛立ち、心配。

様々な感情を持った忍達の視線の中、レイは自信満々に言い放った。

「忍者とは、裏の裏を読むべし」

「それがどうした？」

予想通り、冷たい返答が来た。

レイの脳裏に思い出される。

再不斬と白によってここまで運ばれたのだ。

たとえその他の方法では間に合わないとはいえ、自分に落ち度がない様に振舞う。

「忍なら、事の裏を読み、それに順ずる答えを出すべきだ！」

「つまりは見逃せと言う事か？」

ギクツと冷や汗を垂らす。

イビキの冷徹な視線や言葉は留まる事を知らず、レイは押し黙っ

た。

「……遅刻の理由はどうであれ、これを見る」

イビキがそつと視線を流す。

そこには割れたガラスの破片と吹き飛ばされ、負傷した数人の試験管が居た。

高速回転していた樽へとぶち当たった試験管達だった。

「……怪我人がいますね……全く、俺達の目指す中忍として情けないなあ」

惚けた声が響いた。

静まり帰った試験会場には100程度の人間がいるとは思えない程。

沈黙から数秒後、背後からシズクに頭を殴られたのだ。

「痛ッ！……もう少し力加減考えてよっ。この馬鹿力！」

瞬時に頭を抑え、蹲る。

「うるさいです、それに何で喧嘩口調で話しているんですか？ 一方的に貴方が悪いですっ！」

地へとひれ伏した状態で冷たい罵倒が響く。

そんな中、イビキが

「もう試験開始時刻だ、出て行って貰おう」

冷え切った言葉を高らかに叫んだのだ。

「追い出されたなあ」

「追い出されましたね」

シズクとトモやはこちらをじつと見ながら嫌味を続けた。

「はうつ、何やら視線が痛い……」

四人は第二試験会場である死の森の外に居た。

目の前には薄気味悪く広がる森。

一寸先は闇とはよく言うが、本物を見たのは始めてだった。

「大体初っ端からなんやねん、この運の無さは異常やろ」

「運とかのレベルなのですかね、私には約一名のせいだと思つのですが？」

再びシズクからの軽蔑と怒気の混ざった言葉が刺さる。

ここに来るまでの説教ですっかりと心を折られた。

「最終手段を使う事となろうとはな…… お前等は」

最終手段。それは言わずもかな、死の森への無断侵入である。

同意書、巻物、試験管の激励など、その他諸々すべてを無視して勝手に試験へと参加しようと言うのだ。

普通の受験生より数時間早く潜り込み、そのまま三次予選へと駒を進めようとする何ともセコイ作戦だ。

「でも本当にこんなんで大丈夫な訳？」

「問題ねえ、本来、中忍に必要なのは卓越した技能、戦術、体力、精神力だ。ここで力を見せつけければ、火影だつてこの異例をすんなり通してくれる…… 筈だ！」

自信の無さそうにミヤビは叫ぶ。

言っている事はどれも正しいのに、この男が言つとどうにもシャレにしか聞こえない。

「ま、お前等が合格したら、俺が耳打ちしといてやるよ」

「なら最初からそれでええやんか」

馬鹿にした様なトモヤの声が聞こえる。

この際ならば今の現状を火影に伝えるなり何なり出来そうなものなのだが、この男——ミヤビにはその様な考えは無い。

「細かい事は気にするな！ 中忍選抜第二の試験開始だ、ほれ、行け」

締りのない声と共に三人は駆け出し、スッと森の中へと枝を伝つ

て入る込む。

4 時少しとは思えない暗さはこれからの三人の安命を示している
のかも知れない。

25話 無断（後書き）

正直な話、NARUTO世界の住人の活躍の無さが目立ちますねww
実際こういう風に皆集まっている様な所だと活躍なんて欠片もさせ
られません。

自分の技量のせいではありますが。
もう少し経てばもっと個人個人の活躍の場が設けられると思われま
す。

26話 太陽と月

第二の試験が始まったところ、第一班は死の森を歩いていて、風も吹いていないのにざわつく茂み、日も沈みかけた夕方であるからこそ、不気味さが遙かに増す。

「あーあ、虫除け持って来れば良かったなあ」

近寄ってくる蚊を払いつつ、ぼやいた。

先程から蚊以外にもグロテスクな虫が多く、気持ち悪くて仕方が無かった。

最も、シノであれば喜んで採取するだろう。

「この場で言う言葉がそれですか？ 観点がずれてませんか？」

背後を歩いていたシズクがあくまで冷静に言った。

その動きはどこかぎこちなく、しきりに辺りを見回している。

「怖いんじゃないの？」

先頭にいるトモヤの惚けた声が響く。

「だ、ただだ誰が怖いものですか！」

「あ、そうなん？ じゃあええわ」

どうでも良さそうにトモヤは呟いた。

全く、と軽く咳払いをしたシズクは崩れかけた表情を戻した。刻々と進む時間の最中、人の叫び声が轟く。

「うわああああああつ！」

「ッ！」

声質からして、ただ事でない事が分かる。

叫びに反応し、声にならない悲鳴をシズクは上げた。

そしてレイの首元へと両手を通し、抱きついたのである。

「わっ、し、死ぬって！ 首！ 首絞まってる！」

テンパったシズクはむしろ抱きつくと言うよりも首を思い切り引っ張るという形となっていた。

何かぶつぶつと聞こえない声量で必死にシズクが唱えている。
頼りにされているのは嬉しいが、正直死にかけたのが現状であつた。

「だって、今の、人の叫び、人の……」

と言いかけて気絶したのだった。

首から肩までを掴んだまま、随分と器用なものだった。

「シズクってこう言うの弱いんだっけ？」

「ホンマに意外な弱点やな」

トモヤの言葉に素直に同意した。

自分達の出会いはあの墓地の様なうちは一族の住む場である。

あんな所に入ったりするくらいなのだから、すっかり平気なものだ
と思っていた。

「ま、多分人云々やのうて、暗いとか苦手なんやろな」

「そうみたいだね」

どうにも納得の行かないまま、しがみ付いたまま動かなくなった
シズクを抱き上げる。

「やっぱ行くんか？」

先程とは打って変わって真面目な声。

黒い目が鋭く光り、薄暗い森を照らす。

森に住まう野獣達も、今だけは静寂と化したのだった。

「……いつから？」

どうやら感づかれていた、とレイはここ四年間のトモヤに対する
評価を改める。

いつでも阿保みたいに笑い、適当に物事をこなして来たトモヤと、
目の前にいる少年とはどうにも別人の様な感触すら覚える。

「さあ？ なんとなくや」

目の前の少年はゆったりとはにかんで見せた。

どうしようもなく無垢な笑いにこちらでも思わず苦笑してしまう。

レイは分かっていた。ばれる、ばれない以前に少年には嘘が付け
ない気がしていたのだ。

「付いて来る、とか言わない？」

「言う訳ないやろ！ まだ死ぬの嫌やし」

さり気無く、死を宣告された。

なるべく目を背けていた現実は今更突きつけられたのだ。

「さて、シズクは任すよ、本当は二人共気絶させておこうと思ったんだけど、手間が省けたからね」

抱きかかえた状態にあったシズクをゆっくりと受け渡す。

二人を気絶させた場合、獰猛な生物がウヨウヨいる死の森では危険過ぎるので、かえって良かったかも知れないと思えた。

「おっと、そうそう。地獄を見るお前に激励してやるわ」

と駆け出し、向かおうとした際に言われ、振り返る。

「死ぬ気でやって来いや、死なん程度にやけどな」

聞き覚えのある言葉が聞こえた。

そうして一部分、来い、と言われたのが脳内へと浸透していった。トモやは生存を……否、勝利を信じている。

戦況がどう転ぶかは分からないが、シズクを抱えた少年が上げた右腕は、とても大きく見えたのだ。

暗中にさまよい、レイは必死に大蛇丸を探す。

原作ではあれだけ派手に暴れていたのだが、こつも様々な箇所では戦闘が行われていると幾らなんでも探し出す事は出来なかったのだ。

ただ、勘だけを頼りに大木の枝から枝へと飛び移る。

「ふう、ここ、じゃないかな」

クナイや手裏剣。はたまた生々しい血痕が残っていた場で立ち止まる。

すかさず辺りを見回した。

刃物で傷ついた木も、どう考えても下忍同士の戦いを模索させる。

（……違う、じゃあ——ッ！）

突如、殺気に襲われた。

背後から強者独特の強い殺気、更にはまるで蛇にでも睨まれた様な感覚を、瞬時にレイは感じ取ったのだ。

「やっと来た……待ってたよ……アンタをね」

いつも通り、戦いの中で必死に冷静さを保つ。

スツと目を瞑り、意識を集中させる。初撃で首元を狙う。

最初から決めていた事だった。一下忍として見られている今ならば、たとえ三忍と呼ばれている大蛇丸と言えど、油断はあると、そう思っていたからだ。

ガサガサと、茂みが動く。

大木の枝の上に自分がいるというのに、その音は何とも大きく聞こえたのだった。

ヒュン！

訊きなれたクナイの飛翔音、風を引き裂く音を僅かに感じ取り、間近で天風で弾き落とす。

茂みから現れた黒い影に、即座に風のチャクラを流し、切りかかろうとしたのだ。

「——ッ！ 貴女は」

ピタリと、女性の首筋で天風を留める。

少し不気味な瞳に、男の様にがさつなやや紫色の髪を後ろで束ねていた。

そうして薄黄色なコートを身に羽織った人は、確かに間違いない

女性であつたのだ。

「へえ、怪しい奴がいるから思わず飛び掛っちゃったけど、下忍の割にはやるわね」

刀を首筋に当てられているにも関わらず、女性はニヤリと笑みを浮かべた。

すっかりと風のチャクラを引つ込めた天風を首元から除ける。

「んで、私に用？ 言っとくけど年下には興味ないわよ？」

「……………」

空気が凍る。目の前にいる女性は、第二の試験の試験管であり、元大蛇丸の部下であつたみたらしアンコであつたのだ。

「何よ、黙っちゃって…………あ！ そんなにシヨックだったの？ じやあ話しぐらい聞いてあげるから」

状況が読み込めていないアンコが口々に誤解を発する。

既に戦闘モードへと変貌していたレイには、これを態々訂正しようとはしなかった。

「…………みたらし、アンコさんですよ？ どうしてここに？」

「どうして？ それは君には教えられないわ…………それよりも、君の名前も顔も同意書も見なかった気がするんだけど、気のせい？」

どくん、と心臓が唸る。

それを悟られぬ様にフウと深く息を吐いた。

「そんな事よりも、貴女がここに來た理由って…………大蛇丸、ですか？」

アンコの表情が変化した。

先までの温厚さは消え失せ、代わりにキツく光る眼光だけを残して…………。

「…………ご名答、アイツはある意味有名人だからね…………でも解せないわね、どうして里の重鎮でも知らない様な情報を一介の下忍である君が知っているのかしら」

当然の疑問をぶつけられたのだ。

当たり前な事に、答える訳にはいかない。

そう考え、必死に会話を逸らそうとした刹那。

「……まあ、いいわ。私はアイツのベツトリとした嫌なチャクラ、良く覚えているのよ……微弱だけど、向こうね。君も命が惜しいなら——ってちよつと、そつち行つちや駄目！」

アンコの伸ばした手を振り解き、そのまま向こう、と言われた方向へと一目散に駆け出した。

これほど自分の方向音痴を恨んだ事はない。

これほど自分の無能さを恨んだ事もない。

アンコが言った向こうとは、先程自分が来た方向、つまりはトモヤとシズクのいる方向だったのだ。

27話 裏側

死の森の大木の枝を、数段飛ばしながらレイは直進していた。顔には冷や汗を垂らし、碧眼を唸らせ、血を巡らせる。

会ってもいない相手に怒りすら覚え、力任せに前へと踏み込んでいた。

「やあ、レイ君……」

目の前を凝視する。

スツと、目から力を抜いた。

黒い漆の髪に、眼鏡を掛けた死八木サクマが枝上へと立っていた。

「どうしてサクマさんが？」

「ミヤビ上忍の事だ、どうせ諦めないんだろうと思ってね」

ギクリ、と心の臓の鼓動が早まる。

チャクラを込めた風が舞い、サクマの表情が少し苦く変わる。

身内に危機が迫っている為、長々と立ち話をする訳にも行かず、急かした。

「……サクマさん、単刀直入に言います。……退いて下さい」

少しでも怒気をも混ぜ込む。

ただ事ではない、と判断したのか、サクマは大きく溜息をした。

「どうしてだい？」

ニツコリと、サクマは満面の笑みを浮かべた。

それを見て、苛立ちながらレイは口を動かす。

「言えません」

「そうかい……時間が無いのは分かる。だけど、昔話に付き合ってもらおうよ？」

素性を知らない人間が、不法侵入した下忍をすんなりと通す筈がない。

レイは感じながらも、話を聞いた方が早いと考える。

「どうか短めをお願いしますよ」

「ああ、余り時間は取らせんさ」

風が止んだ空間へ、サクマの言葉が木霊する。
そうして、話が始まったのだ。

「僕はね、戦争孤児だった。元は木の葉の忍ですら……いいや、忍の血筋ですらなかったさ……」

妙に重苦しい空気を纏い、サクマは続ける。

「でもね、人生のどん底にいれば、必ず助けは来るものだ……僕は
ある人に助けられ、忠誠を誓い、木の葉へと向かい入れられた。あ
の方の事だ、大した才能の無い僕は、利用価値なんて無い事くらい、
即知っていた事だろう……」

「それが、何ですか？」

話に興味を持っている自分に、レイは腹が立った。

ただ、訊かなければならない気がしていたのだ。

何を知りたいのかも分からない。

何をしたいのかすらも分からない。

心のどこかで、向こうへ行かなくてすむ、と安堵しているのかも
知れない。そんな自分に、余計にレイは腹が立つ。

「それでも、僕は役に立ちたかったんだ。唯一出来そうな術を何度
も修行し、今ではあの方以上に使いこなせると自負しているよ……
レイ君、一体どんな術か、わかるかい？」

時折、眼鏡をクイツと上げながら、サクマは話す。

どんな術か、その問いは、レイには検討も付かなかった。

「全然分からないです、そろそろ行かせて——ッ！」

何が起こったか、レイは口籠った。

左胸から溢れ出る血。

背後から人影も無く刺さった剣。

そうして、レイの目に入ったのは、右手の中指と人差し指を曲げ、何かを操作するようにチャクラを込めているサクマの姿だった。

「クツクツク、アハハハハッ、どうだい？　これが僕の——大蛇丸様から唯一受け継いだ術だよ」

不気味な笑いを込めるサクマ。

その姿を見ながら、レイは枝から落ち、地面へとひれ伏した。

「……さ、くま、さん——何で？」

地に手を付き、どうにか上を向く。

近くまで降りてきたサクマが刀を抜いたのだ。

「……心臓一突き、もう終わりだよ。君を行かせる訳にはいかないからね……」

「な、ぜ、こんな事を……」

振り絞る様に、レイは言う。

死が間近に迫っているというのに、自分でも信じられないくらい、目へと力が入る。

「なぜって？　　うちはシズクは大蛇丸様の第一のターゲットだ。君の様なモルモット風情が——」

言葉を、最後まで聞き取れなかった。

そこでレイの意識は、闇へと落ちたのだ。

「なんや、お前」

シズクを背負った状態のまま、トモヤは目先の敵を見る。

木の葉の額に灰色の短髪、そうして時折光る眼鏡が印象的な、薬師カブトが目の前に現れたのだ。

「まあまあ、待ってくれよ、僕は君と争いに来たんじゃない」

手を交差して、必死にカブトは講義する。

が、トモヤは知っている。

カブトが誰の部下で、何をしようとしているのかを。

「そか？　じゃあ邪魔しないでくれや」

それと無く会話を会わせ、カブトの隣を通る。

背負ったシズクを少し気にして、カブトとの距離を開けて通った。

「その子、どうしたんだい？　それに君達は確か第一の試験を不合格になった筈……」

トモヤは足を止める。

早く立ち去りたいと思っているのに、中々通してはくれなかった。

カブトは言う。

「……なんてね、猫を被るのはもう良いかな？　君は気づいているみたいだし」

刹那、トモヤは少し飛び上がり、カブトを蹴り飛ばした。

そして、カブトを大きな大木の中心へとたたき付ける。

「痛ててて、酷いね。いきなり蹴り飛ばすなんて……」

「黙れや、本性表したお前なんかにつき合ってられへん！」

トモヤは怒鳴り上げる。

カブトを置き去りに、再び木の枝から枝へと移動する。

枝に付く葉に当たり、目に水滴が入るうとも、駆けた。

シズクを安全な場所へと置かなければ、カカシを『貴方如き』と評するカブトと対峙するのは危険すぎた。

（あるいはレイが戻れば……）

高望みだった。

大蛇丸相手に、勝つ見込みの無い相手にそれ程早く戻ってこれる

筈が無い事くらいは分かっている。

そして今、もつとも聞きたくない声が轟いた。

「もしかして、レイ君が戻ってくるとか、考えているんじゃない」

目の前には、先程と変わらず、カブトが立っていた。

余裕綽々な顔付きで、いるカブトに、トモヤは舌打ちをする。

「せめてその子が起きていればね……まあ、無理な話だよ」

「何やと？」

不適に笑うカブトに、トモヤは突っかった。

危機的状況に付き、大分沸点が下がってきている様だ。

「その子、一度高熱に掛かったろう？ それに今の気絶、もしかして、偶然だと思っているのか？」

瞬時には、理解は出来なかった。

辺りを見回し、逃げ出せる状況を確認する。

そんな事を知ってか知らずか、カブトは続けるのだ。

「レイ君の家に訪れた医者つてのが、僕だったらどうする？」

「ッ！ お前エ、何をしたんや！」

「何を？ 少し細工をね、それよりも妙だとは思わなかったのかい？ 波の国への任務後、すぐに倒れたその子、そうして、偶然門前にいたサクマ。……最後に僕が医者だった」

「だから何を言いたいんや、お前！」

精一杯、トモヤはカブトを睨み付ける。

力差。

そんなものは関係なかった。

目の前にいる男から目を離しては、絶対にいけないと、感じる。

「まだ分からないか……じゃあ、君達三人と常に一緒にいた人は？
そしてここ、『死の森』に送り込んだ人物は誰かな？」

トモヤはすぐに風貌を思い出す。

忍装束とは思えない白い和服を着込み、日向家独特の目、白眼を瞬時に発動する。

そして額当てで呪印を隠し、性格は馬鹿で、どこか憎めない、あ

の——日回///ヤヅを……。

27話 裏側（後書き）

ふう、今回は少し遅れました。

ラノベ新人賞に、小説更新に、改稿。そして学校に部活に大会に忙しいこと山の如しですが、頑張ろうと思います。

28話 心に巣食うもの

闇。

その存在をどれくらいの間が信ずるのだろうか？ 言葉では何とでも言える。

邪悪で強き者、冷徹で悲しい者、非道で恐き者。だが、それらは闇とは言わない。

少なくとも、今はそう思っていた。

「ここどこよ？」

レイの惚けた様な声が、暗黒へと響き渡る。

冗談ではなく、本物の暗黒であった。

自分の手足すら目視出来ず、衣服を来ているのかすら感じられない。

目を開け、辺りを見回しているのか、それとも目蓋の裏を見ているだけなのかも分からなかった。

ただただ暗い。

そんな空間が広がっている様に、レイには映ったのだ。

「……そう、だ。俺、サクマさんに殺されたんだ」

自分に言い聞かせるみたいに言う。

思い出したくもなかった、数秒前か、数年前かも分からない過去。

少なくとも、今の現状とは大いに関係がありそうだった。

『全く、ひでエ死に様だったな』

と、暗黒は言う。

『仲間だと、そう思ってた奴に裏切られ、殺される。ふ、ハハハハッ、中々そいつも意地が悪いねエ』

「……うるさいなあ、今考えてんだよ」

暗黒に向けて、レイは発するのだ。

声だけ。

影も、形も見せない闇のくせに、なぜか自分が一番分かってい
ると言った風な口振りだった。

『考える？ 何をだ？ テメエは死んだ、自分で納得してたじ
やねエか』

「そう、そこなんだよ！」

どう足掻こうが、人間がどうにも出来ない事がある。

それは、死。

神の摂理を犯す位の事をやって退けなければ、それらは着実に
人間を蝕む。

この時、レイの声を聞いた闇が、呆気に囚われた様に見えた。

『そこだあ？ 何が』

「だからさ、ここが地獄なんじゃないかなーって思ったけど、何か
違うんだよ。死んだ人間の魂は現世をうろつかないし、どうにも死
んだ感じがしない……つまり、俺はまだ、生きている。違う？」

云々と説明を終えると、闇が大声を上げて笑いだした。

侮辱の笑いではない、もっと純粋な笑いだった。

『正解だ』

突如。

パチンツ、と何かのスイッチが作動する。

今までの暗黒が一つのシャンデリアによって照らされ、ホテル
のスイートルームも真っ青な部屋が現れるのだ。自分の姿を確認す
ると、刺される前の傷付いていない黒いコートをちゃんと羽織って
いた。

『よう』

奥のソファで声がする。

悠々と柔らかい羽毛にうずくまり、悠々と薄型テレビを眺めて
いる人物がいた。

『それにしてもさみいな、今時期は外に出る気しねーぜホント』
くるり、と人影が振り返る。

淡い水色の髪をシャンデリアからの光によって光らせ、上下を黒

尽くめ、上から黒いコートで覆っていた。

鏡に映した様に自分そっくりな姿が、目の前に現れたのだ。

「……えーっと……お前何？」

『何とは随分な事を言うじゃねえか……分身みてえなもんだ、さして問題ねえだろ？』

「ぶ、分身って、明らか口調違うし、目付き怖いよ？」

自分と同じ碧眼を唸らせた人物は、フンツと鼻を鳴らした。

「それに精神世界にしては随分明るいじゃん？」

『俺は封印された訳じゃねエしな』

どんよりとした声が広い空間に響く。

その回答により、謎は更に深まった。

『大体目覚めた時からここにいるしなあ、外に出る気もさらさらねえし、のんびりしようと思ってたのによ』

天井の閃光が一度消え、また点く。

それを繰り返して、さっきより一回り弱い光となった。

「ほえ？」

『おつと言い忘れたがよ、ここにいる時間も時間は経過してるぜ？ もしあの光が完全に消えれば、テメエは死ぬ』

衝撃の事実を、目先から伝えられた。

ここまで適当な御託を並べられ、信じる人間など希少であるだろう。

ただ、

「そう？　じゃあ早く戻してくれない？　速攻で皆殺しにするから簡単に信じてしまう自分はどうかしているのかも知れなかった。感づいたのか、呼応する様に、そいつは微笑したのだ。

『お前本当に面白いな……止めておけ、テメエじゃ無理だ』

「無理？　俺が？　面白いのはそっちだよ……確かに大蛇丸は無理かも知れないけど、それ意外ならどうとでも——」

自分でもなんて小物なセリフを吐くのだろうと、レイは自問自答

する。

拳を握り締め、何か言葉を発しようとしている自分の影を見た。殺しを正当化したい訳ではなく、もっと混ぜ込まれた感情が、露になる。

嫌だ、逃げたい、死にたくない。

何とも惨めな感情が、壊れかけた心をボロボロに崩す。

『……分かってるだろ？ ガトーって親父を殺した時もそうだ、躊躇なく殺し、あの二人の所へ行つたつもりか。白と再不斬、だっけか？ 二人は気づかなかつた様だが、表向きには隠せても俺の脳内には直接届く、正の感情も、負の感情もな』

つらつらと、心身の表面を抉られる。

言葉の一つ一つは確実にレイの急所を捉える。

「黙ってるよ、さつさと出口を教えろ」

苛立ちを隠せずに、相手の胸倉を掴む。

精一杯の睨みも、涼しい顔で、影は不適に笑うのだ。

『ほらな、真実を突き付けられたくないんだろ？ 今のテメエの考えすらも俺には筒抜けなんだぜ？』

ただの挑発口調をもまともに聞き入れない、聞き入れたくない。認めてしまえば、自分の弱さが抜き出してしまう。

何も出来ない無力な人間への劣化だけを、必要以上にレイは恐れた。

『どうだ？ 俺に体を明け渡さないか？』

殺伐とした空間を、卑しい勧誘が轟く。

するりと、胸倉を掴んでいた手を話した。

『テメエじゃ何も出来ない。俺が代わりにこの世界を変えてやるよ』
どう見ても、こちらに軍配は無い。

力、度胸、頭、恐らく全てを向こうは上回っている。

個人の差など、一目見れば大体の事は分かるものだ。

そうして、シャンデリアの光が薄まり、狭まって行く。

『さあ、どうする？ 俺が出れば傷は治る、テメエが出ればすぐにあの世行き、決断しないって手もあるが、それでも死ぬことに変わりはねえ……とっとと明け渡せよ』

甘い誘惑が、レイを誘った。

自分が出て行っても、致命傷を負った兵士など役立たずでしかない。

仮にでもこいつが行けば、皆が助かる確率は格段に上がる。

「嫌だ」

それでも、レイは断った。

ここに来て初めて、そいつの顔が歪んだ。

『……ほう、だが今行っても生きられる時間は精々30秒だ。行っても無駄だぜ？ なぜ足掻く』

シャンデリアの光が、更に狭まる。

言うとおり、30秒もあれば、消えてしまいそうな勢いであった。出口と思われる方向へと足を動かしていたレイは、振り向く。

「……この体に約束したんだ。この世界を生きる筈の無かったのに、俺はここにいます。資格なんて無いのは分かってる！ 魂一つ占領してこの場にいるんだ、無駄死になんて絶対にしない」

高らかに宣言し、明るく光る扉を開ける。

最後に見えたそいつの顔は、挑発した時の表情などまるで無く、澄んだ瞳を、こちらへと向けていた。

28話 心に巣食うもの（後書き）

何とか更新です。

恐らく今回が一番否が多いでしょうが、何とか乗り切りたいですw

29話 才の無いもの

木々に栄養にでもなるのか、辺りは水遁系統の術で水浸しであった。

地面は沼の様に歩きづらく、だが、それほど広範囲の術を使えど、カブトには当たらない。

「へえ、良く避けるじゃないか」

薬師カブトが微笑する。

時に吹き荒れる旋風に灰色の髪を揺らし、木の葉の額当てを闇に光らせた。

「はあ……くっ！」

かすり傷だらけ身体で、最も酷いのは右足だった。

最初に蹴りを入れた時から、恐らくチャクラにて神経の一部を断ち切られていた。その為、回避行動が段々と鈍くなり、当たる回数は増えるのみ。

両手はチャクラのメスを常時流し、上忍顔負けの体術を駆使し、狙い来る。

トモヤはそれをシズクへと当たらぬ様に避けるには限界があつた。
「……まるで僕の術がどんなものか知っている風だな、一度でもまともに食らえば致命傷。分かってなければそんなに必死に避ける術では無いからね」

これ見よがしに、カブトは笑う。

余裕、侮蔑の眼差しに、ただ耐える事しか、今は出来ない。

両手はシズクを抱えていて使えず、右足はほぼ動けない、残るは左足だけ。

足一本で逃げ切れるのであれば最初から苦労は無い、とトモヤは自分の運命を呪う様に考えた。

「なんで、シズクや……サスケがおればそれでええやろ」

うーん、とカブトは考える素振りを見せる。

顎に手を当て、目を瞑る、それでも隙がある訳では無く、きちんと神経を張り巡らせていた。

——無理だ、逃げるなど。

直後に脳裏に浮かぶ言葉。

格下で、ハンデもある。それなのに相手には油断はない。

あるのは程好い余裕と絶対的な実力、一端の上忍ですら、カブトには恐らく適わない。

ようやく、カカシを如き呼ばわりした理由が、トモヤには分かってきた。多分……否、病室で勝負を続ければ、カカシは負けていただろう。

天賦の才の無い自分では、こんな巧妙な相手には、決して勝つことなど出来ない、現実を押し付けられそうになった。

「……本命は恐らくサスケ君だろうね、才能もあるけど、第一にあるイタチの弟だ。そんな所かな？」

そして、笑みのままカブトは続ける。

「——それに、その子の試験前の一連の動作、才を感じざるを得ない。レイ君は戦闘は見ていないけど、明らかに強さは際立っている……君だけは違うけどね」

どくん、肺の動きが活発になる。

心臓から血液が高速で送られ、手、足、頭を回り、再び循環する。それがどんどんと早まり、腕が震えた。

ある程度予測出来た事ではないか、トモヤは自分に言い聞かせる。うちは一族の残虐すら乗り越え、有り余る才能と力で全て、捻じ伏せ様とするシズク。

名のある家に生まれ、異常な速度で自分に追い付き、それでも尚、先を見据えるレイ。

並んで歩けると思っていた。ずっと共に歩み、先へと進むと考えていた。

ただ、それは勘違いだと気付く。
シズクは生きる為、レイは何かを成す為に行動している。それなのに、自分は何の為にいるのか。

同様に生きる為、など何とでも言える。少なくとも、トモヤはこの先を生きる、と言った絶対的な考えなど持ち合わせてはいない。

レイと馬鹿をし、シズクをからかい、共に笑いたいだけ。
なんて甘い考えだったのだろう。

「少なくとも、君には才は無い……でも、ま、ナルト君よりはマシかな。……君がこのまま生きながらえても、惨めさを感じるだけだよ？ レイ君も死んだ事だし」

再び、カブトの声が聞こえる。

先程よりも大きく、カブトはチャクラを腕へと込める。

長い青色のメスが完成し、恐らくは真っ先に首筋を一閃。それで終わってしまうだろう。

もう、良い。

ミヤビすら自分達を裏切った。だから、もうどうでも良い。

このまま死のうと、後悔は無い。

後悔は……。

「死んでへん！」

暗黒の死の森の中で、気付けば大声で叫んでいた。

これほどの敵が、レイが死んだと言っている。嘘を言うメリットなど皆無な状況であるからこそ、言葉はより鮮明にトモヤの耳へと届いた。

それでも、信じられない、認められない、大きな変革を起こそうとする奴が、そう簡単にくたばって良い筈がないのだ。

王になると、宣言したレイだからこそ。

「ほう、ここに来て、どうしてそう思えるんだい？」

カブトの問いかけが、間髪入れずに訪れる。

さつきとは違い、カブトの声は苛立ちを表していた。

「あいつは百回殺したって死ぬ筈ないんや、それは俺が一番良く分かっている！」

不意に、頭を様々な記憶が過ぎる。

走馬灯とでも言うのか、それでも記憶のほとんどはシズクがレイを迎撃している姿だった。

傍観者の自分、逃げるレイ、しどろもどろに殲滅を繰り返すシズク。

もしこの四年間、レイが死んでいたかも知れない回数を数えれば、決して百、などでは足りない。

「……ああ、そうかい。じゃあ君が確かめて来るんだね」

ごうっ、カブトの右腕のチャクラが増す。

左のチャクラを消し、節約し、右へと移したのだろう。先程とは比べ物にならない洗練されたそれ。

（……悪いなあ、一緒には行けへんわ）

考え深く、シズクをそつと少し離れた地面へと置いた。

巻き添えを食ってもらっては困る、少なくとも自分より、生きようとしている少女には。

「さあて、死ぬのはどつちやろうなあ」

不適に、トモヤは笑って見せた。

強がりなどでは無く、手早く、印を結ぶ。

（もう対してチャクラも残ってへん、こいつで死んでくれや……）

応用を加えた、分身大爆破の術。

本来は、影分身にでもやらせるべき道連れ術をこの場で、本体でやる。

「随分余裕だね」

「余裕はそつちやる？ 戦闘中にそんなでかいメス出して、舐めとる証拠やないか」

軽い挑発の言葉を交え、睨む。

あくまで冷静なそいつは、鼻で笑い、返すのだ。

「余裕？ 違うよ。これは敬意だ。ここまで良く耐え凌いだ君への敬意、どうだい？ 死への供物として、不足はないと思う……よ！」
語尾を強め、カブトはこちらへと飛んだ。

痛む両手を無理やり胸前で、最後の印を組む。

後は直前に全てのチャクラを注ぎ込み、終いとなる、終いにする。

『——不思議だよね』

突如、脳裏に再び走馬灯が走る。

とある修行の帰り、二人、ベンチでたこ焼きを食べていた出来事であつた。

『何がや？』

『俺らがここにいる事だよ、だって漫画の世界だよ？ 未だに目を疑いたいね』

少し、頬をつねり、『夢じゃないし』と笑って見せたレイ。

そうして、続けた。

『……たまに考える。何でいるんだろうって、何で俺らなんだろうって……数ある人間の中、選ばれたなんて大層な事は言わない。——でもさ、意味が無いとは思えないんだ……俺にも、お前にもね』
どこぞの教主の様な論し方に、巧みな言葉でレイは笑う。

（意味……か）

ふと、トモヤは我に帰る。

気を抜いた隙にカブトは既に圈内へと入っていた。

（不味いつ！、遅れた——）

完全にチャクラを加えるタイミングを逃した。

どこまで行っても三流は三流なのだと、無力な自分を呪い殺して

も足りない。

時間を稼ぐ事も、少女を守る事も、敵を道連れにする事すら、出来ない自分の意味など、無意味以外の何も無い。

キンッ。

軽い金属音が鳴る。

目の前にチャクラの膜が現れ、長く鋭いメスをいなししていた。カブトごと弾き飛ばした膜を、何か判別する事は、すぐには出来ずに朦朧としていた。

29話 才の無いもの（後書き）

今話が暗いですね。それに短かったです。
今暫くシリアスが続きます。

それより、章分けをしてみました。どうでしょうかね？

30話 制限時間

唯一光を放つ扉を通り、再びレイは死の森で立ち上がる。

不思議と心臓部分の傷は消えており、それでも衣服に付着した血痕を見て時間の経過はそれほどではなさそうだった。

「……生きてる？」

ひっそりと、レイは自らの両手をまじまじと見つめ、咳く。

心身にガタが来て、強烈な吐き気と共に地面へと蹲った。

「ぐっ、があ」

呻き声としか聞こえぬ声を発し、左胸をしきりに抑える。

心の臓器を貫かれた痛みなど即には無い、それとは別の湧き上がる感情、虫の知らせ、不吉な予感。

何でも良かった、生き返れたのなら、それで……。

『良い忘れたがよ、蘇生じゃなくて延命だ。テメエの体の自然治癒じゃ傷は治らねえし、俺がした最良の処置でも十分、それ以上は持たないぜ』

生き返った喜びに浸る瞬間にとんでもなく落胆させられた。

勝っても負けても死しかない、それでどうやってやる気を出せと
いうのか。

(……違う)

自分の考えを即座に自らで批判した。

自分は生きられない、でも、他の人は、三人は生きられる。

様々なものに感化され、レイは大きく飛び立った。向かう方角など決まっていらない、自分で考えて進む訳でもない、ただ運命に従い、ひたすら前へと進んで行く。

大きなチャクラの膜、それが今、術を失敗したトモヤの目の前を覆う。

カブトのあれほどのチャクラのメスをいなして弾く質のチャクラ。下忍や中忍のそれとは違う。

もつと洗練された達人の術。

「――ッ、何者だ！」

弾かれたカブトはその勢いのまま大木へと吸着し、こちらを見据えている。

右腕の溢れるチャクラを押さえ、駒の様に回転する人物を、自分と同様正体を探っていた。

「……何者って言われてもなあ」

惚けた声を、駒は回転しながら言った。

聞き覚えのある声、時折見切れる白い着物。

忍者とは到底思えない格好を自慢気に着こなし、同道と木の葉の里を歩く姿は既に風物詩となりつつある。

一般女性やくの一には何度でもナンパを繰り返し、振られ、ガイに慰められている。

「一応、先生ですけど？」

カブトを馬鹿にした様に、それは言う。

そんなふざけた教師など、木の葉には一人しかいなかった。

「――ミヤビ……先生、か」

無駄な安心感からか、トモヤはヘナヘナと座り込む。

我ながら腑抜けた座り方であった。

「トモヤ君っ、早くそいつから離れるんだ！」

安心したトモヤへと叫び声が滞る。

黒髪を垂らし、カブトと同じ様に目眼を掛ける。外見は中々に酷似していたが、こつちの方は木の葉の忍者御用達の緑色のベストを着用していた。

「——サクマさんか」

確認する様に、囁く。

それを聞いたミヤビの顔は、少しだけ歪んだ。

「……日向ミヤビ、そいつは裏切り者だ。木の葉の機密文書を盗み、この死の森で大蛇丸と密会しようとしていた。……君達をここへ送り込んだのもそいつなんだよ！」

珍しく、死八木サクマは怒鳴った。

裏切り者が自里の下忍のすぐそばにいる。そういう焦りなのかと、頭を一瞬過ぎる。

「トモヤ君！ 説明は後でする、シズクちゃんを連れて早くこつちへ！」

サクマが遠くからこちらへ手を差し伸べる。

どちらを取るのが良いのか分からず、トモヤは軽く頭を抱えた。

向こうではカブトがその様子をじっと眺めている。どうでも良いように、何でも無いような表情で。

「——行くなよ？」

広い死の森に、その言葉だけが響く感じがした。

カブトと睨みあったままのミヤビが、力強く、言ったものだった。
「……わかつとるわ」

サクマがどれだけ御託を並べようと、その一言には及ばない。
たとえどれほどの理屈でミヤビが裏切り者と言われても、今はミヤビ信じる事が出来る。

「早くするんだ！ 殺され——ッ」

サクマの声が不意に途絶えた。

目の前にいた筈のミヤビは消え、サクマのいる方向を、トモヤは見た。

一瞬、自分には見えない速度でミヤビは移動し、木の上で叫んでいたサクマの顔面へと裏拳を食らわせていた。

「おい、お前等」

木へと叩きつけられたサクマと依然吸着したままのカブトは同時にミヤビを見た。

「……俺の部下に手を出したって事は……死ぬ覚悟は出来てんだろ——殺すぜ？」

ぼうつ。

囁く最後の一言を発した直後、あり得ない量と質のチャクラがミヤビを中心に漏れ出した。

カブトの余裕の笑みをしまい、臨戦態勢に入る。

常時とは比べても飽き足りないほど、ミヤビは怒りの形相を浮かべていたのだ。

夜が段々と濃くなる暮れ、レイは一人の男と対峙していた。
長身長髪の黒髪に、着物を着た姿は本当に男なのか問いてしまうほど。

『……おい、コイツか？』

闇の声が届く。

どうしてこいつは意識から消えないのか、とレイは思う。
もう体は渡さないと宣言した。

つまり、彼が自分の中にいる必要はほぼ無く、更には後十分で自分は死ぬ。

弔いでもしてくれるのか、とレイは不適に笑った。

(……こいつが)

何の術でも無いのに、風が舞う。

『「大蛇丸」』

闇と自分の声とが、現実において被る。

大蛇丸には闇の声は聞こえてはいないが、聞こえた自分としては妙に頼もしく感じた。

「……バレてみたいね」

不気味な声が木霊する。

ほんの一回、会話しただけ、それだけで足が震える。

逃げろ、死ぬ、死にたくない。惨めな感情が再び露になる。

(どうせ十分、それで死ぬ。……心を決める……)

慰める様に、レイは心中で自分に話す。

そうして左腰の天風へと手を伸ばした。

「——刀での勝負を望むみたいね」

そう判断した大蛇丸も、口から草薙の剣をゆっくりと出す。

一部始終を見終え、こちら黒刀を鞘から抜いた。

「アンタも不遇だね、俺は死ぬ気でやる。チャクラの残量なんて関係ない、いざとなれば道連れでも良い。接近に気付いてたなら逃げれば良かったのにな」

白光りする草薙の剣の一振りを構えた大蛇丸へと問う。

制限のある自分が、なぜ話を繰り出したのかは本心にある。

——逃げてくれ、帰ってくれ。

祈る様に頼むのだ。木の葉へと手出しをしなければ、こちらも手を出したくは無い。

否、出せない、と言った方が正しいだろう。

『今になって、命が惜しいか？』

沈黙の中、闇の言葉が鼓動を早める。

その言葉に返す勇氣は、レイには無かった。

認めてはならない、認めてしまいたくない。

もし、死を恐れる事を認めてしまえば、何も、守れなくなる様な気がした。

「……そうねえ」

先程の質問に、ようやく大蛇丸は考え始める。

見た所、隙だらけ。それでも、切り込もうと思えない圧迫。

息が詰まりそうな静けさに、レイは気が狂いそうであった。

「貴方の力を見たいから、かしらねえ。サクマも殺すのを失敗した貴方の」

ぞわっ、と寒気が増す。

余りの殺氣に足を少しだけ後方へと下がらせ、黒刀を木の幹へと刺し、自分の動きを止めた。

「……………へえ、じゃあ見せてやるよ！」

大きな大木の枝の中央で、黒刀と白刀とで切り結ぶ。

キンと高等な金属音を一回打ち鳴らし、紛れも無く刀と刀を添え合わせた。

古くから決まっていたであろう死闘の狼煙が、今、上がったのだ。

30話 制限時間（後書き）

三日間一日更新できました！
明日からはちょっと大変そうですが。

31話 気付く思い

一太刀を交え、レイは早々と距離を空けた。

風のチャクラを流した天風で草薙の剣に切りかかっても、こちらが折られそうな衝撃を受けた。

連撃を食らわすなど、とても無理がある。

「風遁……」

レイは黒刀を宙へと投げた。

回転する天風を横目に、手早く印を結ぶ。

大蛇丸の背後の黒闇には影分身が待機していた。

本来、チャクラを半分まで減らす影分身を戦闘の最中使うなど、余程の馬鹿か膨大なチャクラの持ち主以外はいない。

今回は残量など皆無で首を取りに来てる為、始まる前からそういう心算だった。

「——大突破！」

広範囲に広まる風が死の森の大木達を揺らす。

全力で放ったそれに、大蛇丸は不気味に笑うのだ。

「……やるわねえ」

長髪を揺らし、薄らに余裕を浮かべていた。

呟き、神速で印を結ぶ。

一瞬だけ垣間見た印は、間違いなく同術であった。

ヒュンッ！

間違いなく同術であったそれは、広範囲に広がる自分のとは別物に、暴風の中を突き抜ける。

風切りの様な応用にレイは下を巻きながら上空へと飛ぶ。

（やっぱり、同じ大突破でもこれ程の威力と変形……）

空中で刀を取り、大木の枝へと着地し、大蛇丸を見据えた。
未だに旋風で葉が舞う中、影分身が動く。

「流石は伝説の三忍か……」

スツと大蛇丸を上空で見据えたまま、レイは囁いた。
一度の手合わせで感じてしまった。力、剣技、殺気、どれを取っても勝っているものなど何もない。

「これで終わりかしら？」

背後から気配を消し、襲い掛かった影分身が、大蛇丸の逆手に持った草薙の剣によって消されていた。

薄ら笑いから、恐らく気付いていたのだろう。

「終わり？ 面白い冗談だね」

会話を続けながらも、レイは必死に考える。

先程の風遁でまった葉が自分と大蛇丸を遮る様にふわり、ふわりと落下していた。

（あと何分？）

闇へと、心言でタイムリミットを問う。

もう、大蛇丸の力は、大部分理解し得た。普通に戦ったのでは、勝ち目など欠片も見当たらないが、レイは一つだけの方法を、踏み出せずにいた。

『三分、それ以上はないぜ？』

闇からの通達。

むしろ後押し、と言っても良いかも知れない。

心を決め、大蛇丸へと問いかけた。

「なぜ、シズクを狙う。うちはサスケがいれば良いんじゃないのか？」

聞かなければならない。

もし、自分が失敗すれば、シズクは確実に向こうへと渡る。

そうなる前に、どうしても聞きたくなったのだ。

「なぜ？ 随分と簡単な質問ねえ……」

「ならもつと難しくはしょうか？ シズクを連れて行って何をするつもりだ！」

先よりも声を、レイは荒げる。

不思議と手に持つ刀へとも力が入り、カタカタと振れる。

そんな怒りの問いかけすらも、大蛇丸は顔色一つ変えはしなかった。

「そうね……人体実験に薬の投与。禁術の実験にも付き合ってもらうかも知れないわあ」

ふと、全身を何かが通り抜ける。

頭から足の爪先まで、まるで雷が当たった様だった。

ただいつもの自分とは、別の感情が溢れかえっていたのだ。

「——もういい、話さなくて」

静かに、レイは囁く。

そうして、ゆっくりと刀を上へと伸ばした。

「……何をする気？」

大蛇丸からは不気味な笑みが消え失せ、真剣な眼でこちらを見据えていた。

「見ていれば分かる。これはある種の暴走でね、まだ完成していないから、使いたくは無かったんだけどさ」

自分でも驚くほど、砕けた口調で話す事が出来た。

切り替え、息を吐き、目を閉じる。

全神経を集中させた緑色のチャクラを、薄皮一枚で体を覆う感覚……。

「——風帝ッ！」

叫びと共に、本物の風がレイの体を包む。

生温いそよ風とは違い、より純粋な風を纏っていた。

「……フフツ、面白い……面白いわ」

爆風を受け、顔を腕で覆いながらも、大蛇丸は笑う。

明らかに空気が変わった事を、レイは見過ごさなかった。

「自然の風と自らのチャクラを纏い、純度の高い風へと昇華……初

成功だけど、後一分くらいは持つか」

力加減を確認する様に、刀を持たない手へと力を入れる。予想以上の出来に、笑みを零した。

「風遁・大突破！」

再び爆風を生む。

大木を根の部分からなぎ倒し、吹き飛ばしながら進む姿は、最初に放った術とは似ても似つかない風貌だった。

「——フフッ」

それすらも、大蛇丸は上空へと避ける。

大突破は性質上、横幅に広く奥へと突き進むが、縦にはほとんど効果は無い。

だが、大蛇丸は相殺せずに避けた。無理と判断したのか、無駄と判断したのかはわからない。

それでも、隙が生まれた事には変わりは無かった。

「——これで！」

宙へと浮いた大蛇丸の右側へと、レイは即座に移動する。

刀を横に構え、今にも振り下ろそうとし、純粹な風のチャクラを天風へと流した。

常に高温な金属音を、刀は発する。

身動きの取れない大蛇丸へと、それを思い切り振り下ろした。

『おっ！ 良いねえ、惜しいじゃねえか』

激励か何かか、闇が途中に言った。

——惜しい？

レイは振るう際に頭を疑問が過ぎった。

一抹の不安を払い、両手へと力を加えた所、左胸へと激痛が走る。
「ッ！」

天風は大蛇丸に届く事なく、風のチャクラが消える。体全身に力が入らなくなり、そのままレイは地面へと落下したのだ。

「——がはっ」

受身も取れずにかなりの高さから墜落した為か、血反吐を吐き出す。

必死の思いで痛む左胸を見つめると、黒いコートが血で染まりドロ黒く変色していたのだ。

「ど、どういう事だ……まだ、後三十秒はある、筈なの、に」

独り言などではなく、延命をした闇への問いかけだった。

「……お前のあれ、自分の力以上の代物を使い過ぎたな。俺がせつかく直してやったってのに締めやがってよ。——それに、もしあのままやってても、大蛇丸には通じなかっただろうがな」

痛みを必死にこらえ、地面へと降り立った大蛇丸を見据えた。

風帝に驚いた様子は見せても、必死さは感じなかった。単なるハツタリだとも考えたが、大蛇丸の余裕な笑い顔を見て、満更間違いではないと判断する。

「……残念ね。さっきの術、貴方の最後の賭けだったみたいだけど……あの子はもらって行くわ……」
ぞくつ。

また、溢れる。

風帝を使おうと思った時も、今も。危険に合わせたくはなかった。シズクは誰よりも強く、そして誰よりも弱い。

それが分かっているのに、何一つ、自分は出来なかったのだ。

「——ま、てえ」

振り絞る様に言葉を震わせ、立ち上がるが、既に大蛇丸の姿は無い。

虚ろになる眼で辺りを霞ませながら、再びレイは倒れこんだ。そうして、弱い拳で精一杯地面を殴る。

「く……そがあ！」

自分が弱いから、サクマなどに足元を救われた。

自分が弱いから、闇の勧誘に乗る勇気が無かった。

自分が弱いから、道連れなど選べない。

考えれば考えるほど、反吐が出る程甘い。

ずっと前に誓った、シズクを必ず守ると誓った筈であった。

『何だお前、あの女に惚れてんのかぁ？』

これ見よがしに、闇が茶化す。

心を全て見透かしている、などとほざきながらも、聞いてくる闇にレイは聊か腹を立てた。

(……ああ、そうかもね……)

もはや話す力など残らない。

心の中の弦きを拾ってもらう他なかった。

『素直じゃねえな』

(お前には言われくないよ。……それより、一つ頼まれてくれな
いか？)

レイの意識すらも朦朧としてきた。

思考を伝える速度も、段々と遅くなっていく。

(……返事が来ないって事は、OKって事で進める。……代わりに
行ってくれ)

『はぁ！？ 一度断っておきながら良くんな事が言えるな、おい。

それに俺には何の見返りの無い話じゃねえか、するかよ、ただ働き
なんざあ』

(……勘違い、するなよ)

痛みに耐え、少しだけ、レイは体を動かした。

立ち上がるなんて事は出来なかったが、落とした刀へと手を伸ば
す事ぐらいは出来る。

(明け渡す、つもりなんて無い。見返りが欲しいなら………名前
をやるよ)

レイは腕を伸ばす。大量に舞った葉の上へと、天風は刺さってい
るのだ。

ゆつくりと、柄の部分へと腕をかざす。

『名前だぁ？』

（……どうせ、無いだろ？ 丁度良い名前、考えたからさ……俺が作った訳じゃ無いけど、気に入ると思うよ——名は）

レイの意識は、限界に達し、途切れた。

伸ばした手はだらんつ、と垂れ、死の森は一時的な沈黙が訪れる。

——そう、一時的な。

ズンッ！

木の葉中に響き渡るのではないか、と思える圧迫音が鳴る。

垂れていた手が、刀の柄を力強く掴み、立ち上がった。

「……グリードか、気に入ったぜ」

不適な笑みのまま、刀を鞘へとしまう。

そうして、走り出した。

——生命を終えた主人の命の下に。

31話 気付く思い（後書き）

戦闘模写はやはり難しいですね。

いつの間にやら二時間ほど立っていたときには驚きましたw

じつはもっと早く書いた方のやつが手違いで消えてしまい、この有様ですw

32話 戦慄

ミヤビとカブトの戦闘は、両者共に一步も引いてはいなかった。

チャクラメスと柔拳の接近速度はほぼ互角。

白眼を持つミヤビが次第に有利に進めていく。

シズクを枝上へと移したトモヤは、ピクリとも動かなくなったサクマを警戒しながらも、その様子を黙って見ているしかなかった。刹那、カブトの放った右手をミヤビのチャクラを込めた掌底が弾いた。

「……木の葉の兵器は健在の様ですね、僕の本気をことごとく避けるなんて」

謙遜とは思えぬカブトの言葉に、トモヤは首を傾げた。

見立てでは、ミヤビが使っているのはあくまでも柔拳。点穴を狙った攻撃はしていない。

チャクラのメスは文字通り、チャクラを使う。

点穴を突けば、カブトをほぼ無力化出来るというのに、ミヤビは馬鹿の一つ覚えの様に柔拳を繰り返すのだ。

「兵器？……ああ、昔のあだ名な。あんなもん何の役にもたたないよ？ 他国の忍は任務中に襲い掛かって来やがるし」

「でしょうね、では、貴方が以前、暁の勧誘を蹴ったのはなぜですか？ 木の葉にいるよりはずっと良いと思いますかね」

ミヤビの表情が霞む。

何か突かれたくない事を言われた風に、とても険悪そうな顔付きだった。

「……良く知ってやがるな」

「ええ、大蛇丸様は暁の動向を常に把握してましたから……で？ どうして蹴ったのです？」

しばし、静かな空気が流れた。

まるで、宵闇が歌う様に、誰も何も言わない。

不意にばたんつ、と衝撃音が、静寂に響く。

背後から聞こえたその音に、トモヤは振り返ると、サクマが倒れこんでいた。

「なっ、何や？」

意識は残っていた。

脅えた様に目をぎよるぎよると動かし、現状把握でもしようとしているのだろう。

その瞳以外は何も動かず、動かさず。声も出せない様な状態であった。

「……サソリの術、大蛇丸が掛けやがったのか」

「良くご存知の様ですね」

あっさりと、カブトは答える。

知られ様が、知られまいが、どうでも良さそうな表情だった。

ミヤビは、しぶしぶこちらを振り向き、言う。

「——トモヤ、シズクの幻術を解いてやれ」

「は？」

予想だにしない事が起こりすぎて、トモヤは頭が混乱しているのかと思った。

一週間前、カブトによって薬を盛られたシズクの、それが幻術だというのだ。

「だろ？」

「……………本当に、良くご存知で」

先とほぼ同様の言葉で、カブトは返した。

ただ、違うのは、少々の苛立ちを隠せぬ表情であろうか。

「当たり前だ、一週間も前から今、このタイミングで効果を起こすなんて神業、出来る訳がねえ。……それに、シズクを陥れる程の幻術を使えるのなんて、この場じゃお前ぐらいだろう？」

ミヤビの言葉を聴いた途端、確信を持ってトモヤはシズクの肩へと手を沿え、軽く印を結んだ。

「解っ！」

幻術返し。

そう名のついた技法だ。

幻術に犯された対象者へとチャクラを流し、乱れた流れを崩す。すると、呼吸しかしていなかったシズクが、噓の様に目を開けた。

「——あつ、あ、あ」

それでも、正常とはとても言いがたい程、瞳は虚ろであつた。

喘ぎながらも、虚ろな目から大粒の涙を流し、白い手でそれを押し付けても、どうやら止まらない様だつた。

少しだけ、雫を拭き、とても小さな声で呟く。

「……レ、イが………死んだ」

「よう」

前へと進む大蛇丸の更に前へと、グリードは降り立った。

嫌悪を混ぜた視線にも、大蛇丸は何食わぬ顔でこちらを見る。

「何か用かしら？」

「惚けてんじゃねえよ」

右手へと持っていた刀を鞘へと、グリードは収める。

「……あら、刀は使わないのね」

いつの間にか構えていた草薙の剣を、大蛇丸は喉元へと残念そうに戻す。

余裕というのか、余韻というのか。

人格が明らかに変わった自分を見ても、何一つ、動じなかった。

「へっ、武器は弱い奴が使うもんだ。こいつと俺を一緒にするなよ」
自らの体を、親指で指差す。

傍からならば、何とも奇妙な光景であろうに、それでも、大蛇丸は、

「あら……そう」

と、軽く流す。

「所で、どうして来たのかしら？ 貴方でも、私には勝てないと思うわよ」

大蛇丸の周りを、風が舞う。

高濃度なチャクラと圧縮した殺気が折り重なって出来た風である。

あり得ぬ程、濃密なその気を見ても、グリードは不思議と物怖さすら感じない。

もっと怖い風を知っている。

こいつより、おかしい人間を知っている。

「俺はただ、契約と、俺を知りたいだけだ。お前に走った悪寒、何か知ってんだろ？」

「さあ、それはどうかしら」

この場でも、大蛇丸は体勢を崩さない。

面白い動物でも見る様な目付きで、こちらの視線と合わせるのみだ。

「——しらはつくれるか……ならよお」

声と共に、黒い風が周りを飛ぶ。

この体となる前から、技の記憶があつた。

だからこそ、簡単に、現実で使う事が出来たのだ。

「ボ口雑巾にして聞き出してやらあ！」

背後を渦巻く黒き塊が爆ぜる。

狼の如く舞う暗黒が、大蛇丸を遙か後方へと吹き飛ばした。

「この俺を、敵にまわした事を後悔させてやるよ」

一言、その場で呟いて、迎撃の為、吊いの為に、グリードは、吹き飛んだ大蛇丸を追う。

32話 戦慄（後書き）

やっと帰ってこれて、更新です。

ミヤビは今の状況からしたら、めっちゃくちゃ謎な人物ですね。

自話で、おそらく大蛇丸系統は一端終わると思います。

ルーキーが好きな皆様、彼等もちやんと活躍しますよ？

というか、彼等も一応主役ですからね。

34話 一度の終着（前書き）

これだけ待たせて置いて、余り物語的にも進んでませんね……。死の森での出来事は大切なので、ご勘弁願いたいです。

34話 一度の終着

再び、ミヤビとカブトは打ち合っている。

決着の無いシーソーゲームを続けていると言っても良い。そちらの戦いよりも、シズクの異変に目が行った。

「……死んだ？ どういう事や？」

問い掛けに、シズクはだんまりとした。

涙が止まっても、記憶を探る様にじつと頭を抱えている。

「——刀で、刺されて……血が、血があ！」

左胸を押さえ、シズクは苦しそうに唸った。

通常の冷静さなど欠片も見当たらず、少女は取り乱しながらも動かないサクマを睨む。

少女は立ち上がり、三つ文様の写輪眼へと瞳を変貌させて瞬時に小さな手にクナイを持った。

「……殺します」

ぼそりと呟き、シズクは逆手にクナイを構える。

取り乱しは無くなったものの、とても冷静とは言い難い風貌であった。

息を切らし、手は震え、真紅の写輪眼を更に真っ赤に充血させる。

「待て、何を——」

「こいつが……こいつがっ！」

言葉を聞かずに、シズクはサクマへと迫る。

クナイの先端をサクマへと翳して、一直線に首筋を狙った一撃。

ヒュン！

クナイは虚しく空を切った。

寸での所でシズクの腕を掴み、トモヤはクナイの滑空を止めたのだ。

「……離せ！ 止めるな！ 私はこいつを殺す！」

それでも少女のその腕は、下へ下へと力を込める。
殺気に満ちた赤い眼を大きく見開きながら、少女は口調を荒げていた。

「とりあえず、一端落ち着けや。なっ？」

レイが死んだ。

トモヤがそれだけは、朦朧としたシズクからきちんと聞き取れたのだ。

カブトの幻術を見ていたのではないか、と当初は考えたが、それでは収まりが付かない箇所がいくつもある。

かたんっ、とシズクはクナイを落とした。

木の枝の刺さらずに滑り落ち、そのまま地面へと落下する。

「ッ！ 違っっ！」

クナイが地面に刺さると同時に、シズクは頭を抑え出した。

何らかの発作の様に、違う、違うと呟きながらも、下層で黒光りするクナイへと視線を向けている。

逝かれた目の矛先には、本当は何が映っているのだろう。

「……いなくなるの？ ……いなくなっちゃうの？」

涙を瞳いっぱい溜め、少女が俯く。

いつもとは違う、年相応の話し方であった。

今にでもわんわんと泣き出してしまいたいそうな、純朴な子供の顔だ。

——だからか。

「あいつは死なん！ 絶対に死なんから安心しとけ」
気休め。

それくらい、トモヤ本人が一番分かっていた。

ただ、困る少女の気を逸らす事しか出来ない自分は、本当に何の為に存在しているのだろうか。

昔に聞いたレイの言葉の意味さえも、今は全く掴めない。

「——良か……った」

意識が飛んだのだろっ、少女は膝から崩れ落ちた。

間違いなく、レイはシズクの支えとなっている。過去に、自分が
出会うまでに何が起こったか、それが現実の時に何が起こったの
だろうか。

もし、レイが本当に死んでいたのだとしたら、シズクはどうなっ
てしまうのだろう。

考えた直後、すぐに答えが出てしまう。

だから、考えない、そうでなければ、全てが分かってしまうから
……。

（なんや、皆レイ、レイって……）
下らない嫉妬だ。

惨めな劣等感と膨大な自尊心との狭間で、トモヤは項垂れる。

一つの結論。

——頼られているのは、レイであって自分では決していない。

シズクも、カブトも、はたまた大蛇丸さえもそうだ。

価値観がどうであっても、三人は自分ではなく、レイを見ている。

（……何でや！）

ネジとの好敵手の様な状態も、いつまで続くかなんて分からない。
日向の天才と日上の凡人。

もし、自分があつさりと負けたら？

もし、敵わない差を感じたら？

戦いの最中に考える事ではないが、トモヤは深く拳を握る。

怒りとは違うベクトルの虚無感だった。

努力が天才を超える——などと言う奴もいる。

決して間違った目標ではないだろう、原作のネジに対するリーの
様な考えも。

ただトモヤには、その天才が大き過ぎたのだ。

突如、ごおんと、森が鳴いた。

爆発音みたいに轟音が鳴り響き、地面が揺らぎ、枝が爆風に折れる。

どす黒い風圧とびりびり伝わるチャクラを感じ、トモやは唇を噛んだ。

「……ッ！ 今度は何や！」

揺れる木枝の上で、思わず尻餅を付く。

今まで感じた事のない途方も無い禍々しいチャクラ。それでいてとても見知った感覚を覚えるのはなぜだろうか。

「ふう、ようやくですか。ミヤビさんの相手は骨が折れますね」

「何だと？ じゃあこいつは大蛇丸か！」

「まあ、そんな所ですかね……では、僕はこの辺で失礼しますよ」

カブトはさも嬉しそうに口にする。自力が上の敵相手に、果してどう逃げるのだろうか。

少なくとも、ミヤビからは逃げる隙を与える様な気迫は出ていない。

そうして、ミヤビは尋ねる。

「逃げ切る？ 俺からか？」

文字通りカブトはその言葉に嘲笑う。

表面だけの笑いか、算段のある笑いか。

トモヤが考える間も無く、背後を氷の様な寒気が走る。

気味の悪い生暖かい吐息、鳴き声が滞った。

振り返る事無く分かる。

自分の後ろへと構えているのは、夥しい形相を浮かべた、大蛇であるだろうと。

「てめえ！」

「早く行かなくていいんですか？ 動けない忍が二名、とても彼一人では守りきれませんよね」

ミヤビが舌打ち音が聞こえる。

こちらへと駆けるミヤビの姿と、不気味に嘲笑うカブトの姿が、良く目に焼きついた。

無力。

仲間を狙っていた敵にも敵わず、馬鹿にしていた教師に、今助けられようとしている。

どんな誰よりも、トモヤは今の自分が哀れに思えた。

サスケとナルトは倒れている。

ロック・リーという男は、音忍の何らかの攻撃を受け、とても動ける状態であるとは思えなかった。

そうして、目の前には、黒髪を逆立てた音忍に、サクラが噛み付き、そのまま殴られている様子だ。

茂みに隠れながら、シカマルはそれら全てを見据える。

「……ねえ、どうすんのよ？」

「どうするってなあ」

いのの言葉に、シカマルはもたついた。

詰め将棋などはアスマとの将棋をやっているお陰か、得意であるが、この状況はどうにもし難い。

言っなれば、飛車角落ちで始まっている様なものだった。

怪我人も多く、人質にでも捕られれば、一気に形勢なんて及ばなくなってしまう。

だが、それはただの良い訳だ。

「行くつきやねえだろ」

ロック・リーは知らないが、シカマルにとっては全員腐れ縁だった。

アカデミー、それ以前からだらだらとした付き合いがあり、いつの間にか友達か、それに近い関係となる。

結果論など、後でいくらでも唱えれば良い。

「ええ！ 本当に行くのオ？」

「ああ、勝算はある……後三秒だ」

チヨウジの情けない声も、なぜか今は頼もしく思える。

戦いとなれば無理やり怒らせ、やる気を出させる。それが猪鹿蝶の通常のコンビネーションであつた。

「二……一……」

カウントを進めていく。

見立てでは、三秒で丁度相手の意表を付ける筈だ。

不意打ちであるが、サクラを助け、手傷を負わせる事は恐らく可能だろう。

最後のカウントは、叫ぶ必要は無かつた。

黒い人影がすぐ近くの地面へと墜落したのだ。

「……なんだろうね、人の戦いに首を突っ込むなんて……」

包帯の男が不気味に囁く。

どこかの下忍だろうか、クレーターの様に凹んだ地面へと、その男が近寄つた。

土煙が晴れた時、男の顔は豹変していたのだ。

「お、大蛇丸様あ！」

悠長に話す先程とは別に、声を荒げていた。それは、他の二人も同じく萎縮し、サクラは名前を聞いただけで噛み付いていた口を離した。

土塗れとなった黒髪長髪の、大蛇丸と呼ばれた男がゆっくりと立ち上がる。

「……下がってなさい、死ぬわよ」

大蛇丸は上空を見上げた様だった。

木の枝や大木の上などではなく、遥か高い空をである。

「死ぬ？ お前がか？」

大蛇丸と同様に、それは飛来した。

柔らかい地面へとどすんつ、と音を立て、両足で着地をして黒い風を舞わせ、漆黒のコートをはためかせている。

(……おいおいっ、どういう冗談だ？)

心中でシカマルは動揺した。

淡々とした水色の髪、透き通る碧眼、特徴的な服装。

口調の変化はあれど、それは紛れもなく、月下レイであったのだ。

「——シカマル……あれって」

「多分同じ事、考えてると思うぜ？」

「やっぱり、レイ君よね？ でも、怖い……」

質問をした、いのが自らの体を摩る。

レイから流れる黒い風は、寒気を超えた零度の冷たさを生み出していた。

誰も近づかせない様な、冷風を。

「レイ……なの？」

「ん？ ……ああ、一応な」

時を同じくして、サクラがレイへと問い掛けた。

一応、と付け足した事と言い、レイの言動には疑問が残る。

「っと、話してる場合じゃねーわ」

包帯を巻いた男以外の音忍が、大蛇丸を守る様に前へと出ていたのだ。

「そんな奴、庇う必要なんてないだろ？ 所詮、前時代の敗北者だ。ただの年老いた爺だつてのによオ……」

音忍二人の手は、小刻みに震えていた。

それは至極当然の事だ。

見知った自分でも、あんなレイの前に立つたら恐怖を感じるだろう。

「ほざくな、すぐ黙らせてやる！」

音忍が一人、両腕をレイへと向ける。

恐怖や邪念を振り払う様に、男は声を発した。

そしてサクラにも放った、恐らく空気を圧縮した風圧を構える。

（やばいっ！）

シカマルは悟る。

男の先程よりも力む腕と殺気に満ちた顔を見た。

サクラの時とは違う、明らかに本気の攻撃。

「いの！ チョウジ！ 伏せろっ！」

「斬空極波ア！」

忠告と術の発動と、それはほぼ同時だった。

こちらに放っている訳でもないのに、目も開けていられない程の暴風が顔を覆う。

地面を削り、大木を揺るがした。

人間がまともに食らってしまったら、身一つ残らないだろう。

「はっ、バラバラになりやがったか！」

男は勝利の余韻に浸る。

実質、常人ならば軽く葬れる程の術を放ったのだ。

油断が生まれるのも無理はない。

自分の角度からはしっかりと見える。

土煙が晴れ始めた中で、微かに移る人影が……。

「今の何よつ？ レイ君、大丈夫なの？」

「……………」

未だに伏せたままのいのの声に、シカマルは応える気にはなれない。

目の前に広がっている事は、それ以上に衝撃が強いのだ。

暴風の特攻を受けた地面の抉りすらも、レイの手前で途切れる。

術を放った男も、残りの音忍二人も開いた口が塞がらないでいた。

「……大蛇丸逃げちまったじゃねーかよオ」

レイは悠々と右手の平を前へ突き出している。

まるで何かを受け止めた様な構えだ。

姿からは余裕が滲み出て、音忍を恐怖へと追い込む。

そして言葉通り音忍の後ろへといた大蛇丸は、確かに跡形もなく消えていた。

「……シカマルう、大蛇丸つて人は？」

「多分、陽動じゃないよな……あの風を利用した……つつより、
音忍^{なかま}を利用して逃げやがった」

レイの言葉を聞いて同様している音忍を見て、シカマルは判断する。

勝てないと悟ったどうかは知らないが、音忍達が利用されたのは事実であろう。

「どうする？ 俺は別にお前らを殺したい訳じゃねーんだが？」

レイが問い掛ける。

言葉からは間違いなく、逃げなければ殺す、という意味を感じ取れた。

「……手打ち料です。引かせてください……」

「おおつ！ ミイラ男の癖に物分りが良いなア！」

包帯を巻いた音忍は地の書を地面へと置く。

それを見て、レイは破顔一笑した。

「おい！ ドス！」

「……仕方ないよ、斬空極波すら通じなかったんだ。僕らには勝ち

目はないよ」

それを聞いて、男は渋々と納得する。くのーも承諾したらしく、三人は一度頷き、森の奥へと消えた。

（あーあ、大物も逃げちまったし、どうすつか……）

グリードは肩を落とす。

音忍は捨て駒、つまりは人質とした所で大蛇丸はやって来ない。（どうせ向こうから干渉してくるか……待つのはあんま面白くねえんだけどなあ）

深く、グリードは呼吸をした。

外の空気とやらを始めて感じたが、精神世界と何ら変わらない。元々向こう側から見ていた景色の中を歩いているだけ、新鮮さなど欠片もあつたものではなかった。

「あなた……本当にレイなの？」

「ああ？ さつきも言っただろ？」

「だって……いつもと全然違うし……」

少女――春野サクラの目付きは脅えていた。

アカデミー時代から、レイとそこまで関係を持つてはいないサクラだが、自分に確実な不信感を持っている。

（……しゃあねえか）

自分の事は自分には良く分からないものなのだろうか。

一貫していない口調を思い出し、グリードは一度目を瞑り、開く。「……ははっ、冗談冗談。ちよつと不良っぽくしてみたただだよ。」

その方が敵さんも逃げてくれるかなあってね」

明るく元気な、いつもの月下レイを演じるのだ。

無駄な感情を持たれるのは何かと動きにくい上に、確実に面倒事が起きてしまう。

それならば、恥を承知で猿真似だつてするだろう。

「……本当？」

「本当だつて！　じゃあ俺少し休むね、疲れたから」

サクラはまだ疑っていた。

アカデミーで主席は伊達ではないと言う事か。

（……面倒だ。変わるんなら変わって欲しいもんだぜ……）

グリードは軽く無い物強請りをした。

そもそも、交代なぞ出来る筈もないのだ。

一つの体に一つの魂、それが人間の体の大原則。この体に二つも存在している時点で奇跡である。

更には最初からあった表の人格を自分が上乗せした。だから月下レイの魂はこの世から完全に消滅した。

いや、消滅させたと言った方が正しいだろうか。

34話 一度の終着（後書き）

一応、休日だったので頑張りました。

生存報告って事にもなるでしょうかね？

次話もきつと遅れますので、ご了承ください。

それにしても、チョウジといのの台詞少ないですね。

キンに至っては台詞すら与えられませんでしたア！

見せ場すら与えられるかどうか也非常に微妙な感じがします。次話からは多分急展開かな？

少し適当に終わらせた感じがしたので改稿しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9477q/>

NARUTO憑依小説

2011年7月27日18時35分発行